788
162

0026328000

0026328-000

788－162

産業組合の本質とその進路

賀川豊彦・著

協同組合新聞社

再版
昭和１５

ADF

工3Y-86

農業組合の本質と其進路

賀川豊彦 著

788-162

帝國圖書館藏

賀川豐彦著

産業組合の本質とその進路

協同組合新聞社

昭和十五年九月廿日 帝國圖書館藏

著者小影

互助精神を涵養して
災厄の救貧に防貧に福利の
活用——以って之と経済と
顯現する德愛をば產業
組合運動とぞ云へ

[illegible]

788
162

序

經濟は價値の運動である。價値は心の作用である。この心の作用が無視された場合に經濟は唯物的に傾き、半意識的になつた時に、搾取と資本主義が生れる。それに對抗して階級意識を基礎とした左翼理論が發生する。階級意識は意識經濟に眼覺めんとする一つの兆である。この意識的眼覺めが、全民族に及び、全人類の自覺となつた時、經濟は始めて全意識的になり、意識經濟學が社會全體の計畫的統制經濟に乘り出す。

社會成員の一つ一つが、この全體意識に眼覺めて、搾取を離れた互助友愛の經濟組織を結成せんとする運動が、協同組合の組織である。從つて社會成員の意識的眼覺めなくして、完全なる協同組合の運用は不可能である。こゝに於いてか產業組合の運動には心理的要素と倫理的要素と教育的要素の三方面を基礎にしたる社會經濟が發展する。

今日までの經濟學は餘りにも、經濟心理を無視し過ぎた。特に唯物史觀に於ては、全然心理

性を無視するために、階級意識の説明すらつかなくなつてゐる。發明と發見の時代に於ては人間の心理性が直ちに社會經濟の內容となる。それと同時に社會成員相互の兄弟愛的自覺の濃度に從つて產業組合自體の組織內容に大きな變化が起る。命を捨てゝでも同志を愛せんとする者は、全財產を拋つて、協同組合を守る。この意識內容を空間的に、また時間的に擴張すれば、暴力を無用とする經濟革新が斷行される筈である。それで產業組合の發展は全くこの兄弟愛への自覺を促す各種の教育設備の上に、乘せられてゐると考へてもよい。この兄弟愛意識の社會的自覺がなければ、凡ゆる產業組合も何等の効用を持つものではない。この精神的內容に眼覺めたスキスの協同組合は、世界最初の小學校を創始したペスタロッチの隣人愛の教育運動を基礎にして產業組合を組織してゐる。

二宮尊德先生も、心田を耕さずして水田を耕し得ずと說かれたが、この言は經濟原理を貫く第一法則であると私は考へてゐる。私がこの事に於て發展させた協同組合の根本理論も、全く二宮尊德先生やペスタロッチの經濟心理的原理を現代的に再考したものと言へよう。私はその經濟心理性を考へることなくして、協同組合の理論と實際を、思考出來ないと思つてゐる。

日本の產業組合は今日まで雛壇に飾られたやうに倫理運動の自覺も、意識經濟の根本認識も持たずして發展して來た。そのために組合員數だけは增加したけれども、組合意識に於ては誠に缺けたものがある。私は產業組合運動を始めてから滿廿三年、惡戰苦鬪こゝに產業組合哲學の本質を苦き經驗によつて學んだやうに思ふ。玆にこの書を出版して、日本に於ける組合經濟を守らんとする同志に送る所以である。

建國二六〇〇年紀元節の翌日

賀川豐彥

目次

第一編　産業組合經濟の本質とその進路……一

第一章　意識經濟學より見たる産業組合の本質(上)……一

意識經濟學とは何ぞや—社會的能力表現の要素—マルクスの資本論は前世紀の遺物—唯心的經濟史觀の立場—無形物の價値—心理的表象としての商品—唯物經濟より人間經濟への推移—唯物史觀の無能—經濟價値と宗教價値の一致—協同組合制度に於ける思想的發見—經濟行爲の三時代—ロッチデール消費組合—ライフアイゼン—富の社會的所有

第二章　意識經濟學より見たる産業組合の本質(下)……三

協同組合の五大使命—産業土地より心理的土地へ—唯物的資本より心理的資本へ—個人的勞働より組織的勞働へ—消費は物質的より感覺的意識的へ—交換を組織化し意識化するのが協同組合—經濟理論と組織的協同組合運動—分配に關する三つの問題—協同組合社會の理想—日本の協同組合は協同意識が不足である—資本主義はカタツムリ經濟である—協同組織による農村經濟の建直し—協同組合運動は全意識愛の發露である—協同組合は唯心的經濟史觀の結論である

第三章　兄弟愛意識の發展として見たる産業組合……六

混沌たる世界—資本主義社會の悲哀—唯物經濟學の無能—經濟心理學的方法論—感覺經濟と意識經濟—七種の價値要素—精神價値と經濟價値の一致—唯物史觀に對する不滿—唯心史觀の公式—土地、勞働、資本の唯心史觀的發展—金融心理の精神分析—金融市場の心理化—貨幣以上の金融—時の

心理的計算と金融—金融の氣體化—金融の速力と宗教的社會愛—原始文化の精神的基礎—機械文化の唯心史觀的解釋—協同組合運動は唯心的經濟史觀を確證する—精神力による經濟改造—經濟革命に對する暴力の無能—階級意識より全體的兄弟愛意識へ

第四章　宗教的兄弟愛意識の發展と協同組合意識の開序……二五

キリストの意識したる經濟價値—十字架愛と經濟價値—使徒パウロの意識したる經濟價値—贖罪愛と經濟革命—初代キリスト教徒の兄弟愛的經濟生活—ゴシック經濟文化の起原—ローマ法と寺院法の對立—宗教改革期に於けるアナバプテストの經濟運動—プロテスタント自由主義と兄弟愛運動の分離—宗教的兄弟愛の經濟的實現性

第五章　意識的兄弟愛と協同組合運動……二五三

近代協同組合運動と中世ギルドの差異—ロッチデール式とライフアイゼン式—日本に於ける協同組合運動—共産主義より協同組合主義へ—協同組合運動に對する反對—精神運動としての協同組合—保險組合—生産組合—販賣組合—信用組合—ドグラス・システムと信用組合—貨幣の破壞—金本位の破壞—共濟組合—失業共濟保險組合—教育共濟組合—利用組合—消費組合

第二編　組合社會事業と組合社會政策……一九〇

第一章　防貧策としての産業組合……一九〇

天災と産業組合—土地利用組合の必要—立體農業と生産組合—更生の近路—乳と蜜の流るゝ鄕—水難及び船舶保險の問題—國民健康保險組合の問題—經濟不安と産業組合—米穀統制と産業組合—肥料問題と産業組合—農民の借用性と産業組合—産業組合は精神運動である

第二章　農村更生と産業組合……二一八

協同組合の起原—利得を離れよ—協同的精神—協同の訓練—共濟組合—土地利用組合—加工組合—販賣組合—協同一致互助の精神—デンマークの協同組合—奉仕的精神と信用—私慾を離れよ—會計檢査を嚴重にせよ—二百軒の加盟者—出資額—事務所—配給法—掛賣制度の良否—利益金の分配—商人の妨害—忍耐せよ

第三章　都市行政と産業組合……二三六

ウキンの都市行政—資本主義の大衆化—利用組合を作れ—生命保險の組合化—最も進んだ衛生施設—學資も組合で融通

第四章　醫療組合の本質とその進路……二四九
醫療制度の完備へ—協同組合としての醫療組合運動—結核と榮養對策—結核と建築法改正の必要—國民健康保險法改正の必要—結核の作業治療—療養所の生態學的研究—結核と國民の精神開拓の必要

第五章　國民健康保險組合と産業組合代行問題の將來……二七一
農村體位の低下と醫療問題—協同組合に依る醫療制度—醫療組合代行問題の將來—國保組合に於ける運用の諸問題—最も能率的なる産業組合の代行

第六章　日本に於ける協同組合保險運動の將來……二八四
互助組合としての保險制度—生産資本と生命保險—日本に於ける協同組合保險の現狀—失業保險組合の問題—社會による社會の進歩—森林保險法と

漁船保險法

第七章　消費組合運動と其の進路……二九五
日本消費組合運動の困難なる事由—希望の信念—勞働組合と消費組合—地域單位の消費組合に對する期待—榮養食配給所と消費組合運動の將來—醫療組合と消費組合—協同組合生産への進出—保險の協同組合化を主張する理由—互助愛を基礎とせる戰線の統一と大衆動員

第八章　組合國家を論じて國家改造に及ぶ……三二
政黨の無力と議會の改造—組合國家の根本問題—本能の改造—本能を改造し得る宗教—職業經濟學の出現—本能經濟より意識經濟へ—天分と生活のヂレンマ—轉業轉任の困難—天分を伸張し得る社會經濟組織の問題—交換即搾取の誤—搾取なき交換經濟樹立と統制の必要—國營と協同組合—醫療組合と醫師會の反對—國營の機構が問題—支那の實例—頑固な家族意識の

障碍—組合利己主義と組合他愛主義—ライファイゼン式信用組合の特長—組合を基礎とする國家改造—産業生活に即したる代議政體—組合代表による議會改造—國體と政體—世界平和と組合國家—泥棒の世界平和—協同組合主義の旗の下に

第九章　統制經濟に於ける産業組合の役割……二九

國家社會主義の擡頭—ヒットラーの失敗—イタリーの組合國家—舊オーストリアの誤れる組合政策—組織者ザイペル—國家社會主義に於ける産業組合の役割

第十章　世界平和と國際協同組合運動……三七

世界戰爭の經濟的原因—協同組合貿易と世界平和—ロイドの船舶保險を見よ—世界軍縮會議の失敗と世界經濟會議

産業組合の本質とその進路

第一編　産業組合經濟の本質とその進路

第一章　意識經濟學より見たる産業組合の本質(上)

意識經濟學とは何ぞや

私は、先づ經濟運動といふものが、特殊なる價値運動であることを讀者に考へて貰ひたいのである。價値運動には色々のものがある。即ち、智的價値運動、美的價値運動、倫理的價値運動、宗教的價値運動等がある。經濟といふものも、價値運動を認めてゐるが、此の經濟の價値運動は利即ち利益といふことを中心としてゐる。

但し、經濟に於いては、交換の出來ない物品、勞力、職業は、價値を與へ難い。それであるから、原始的時代に於ては、經濟問題は大きな問題にならなかつた。原始社會におけるやうに自から耕し、自から刈り、自から織るところの經濟機構は、宗教的の問題、或は反宗教的問題に比較して大きな問題とならなかつた。

それから、交換の必要が高まれば高まる程、經濟問題は喧しくなつて來た。交換によらざれば、經濟生活は益々都合よく行かなくなるから、其處に止むを得ず經濟問題といふことが社會問題の根幹をなすやうになつて來るのである。

其處で、交換といふものゝ標準を決める必要が起るのであるが、それを客觀的に取扱ふ爲めに、物質的になる傾向を持つて來る。これが卽ちマルクスの唯物史觀、卽ち唯物的經濟史觀なる傾向なのである。又或は、辯證法的唯物論の傾向になる性質を持つてゐる理由である。ところが、私はその點に於いて、マルクスの唯物的共產主義とは大なる意見の相違を持つてゐる。

なんとならば、交換の標準といふからには、客觀的なる表象、卽ち唯物的（或は「卽物的」）なる傾向の必要を認めるけれども、それは幼稚なる時代における考へ方であつて、人間の心理的機能の發達が進めば進む程、最早や物的な標準を必要としない。むしろ、或は人間の持つてゐる他の方面を基準として、標準を立てるやうに進步するからである。これを抽象的にいふても解り難いから以下少し說明して見よう。

文明の初期においては、生產者と消費者とが同じ人である。又同じ團體のものである。Pを

生產者Oを消費者とすると、Pは消費者といふものを掩護し、Oは常にPより大きいのである。生產者、消費者の比は、大阪、東京に就いて見ると、四對一、消費者が百であれば、生產者は廿五位である。その生產者が、自分の妻子、或は病人、老人低能者等を含むところの廢疾者まで養つてゐることが社會の現狀である。初期においてはそれでも良かつたが、だん〳〵文化が進むと、PとOとが段々離れてくる。その間に交換を反對するものがゐる。處が文明が更に進むと、段々これが分化して、生產機關に對する大きな投機化が現れ、それに對して、株式、株券取引、等が始るのである。隨つて株式市場と稱するものが現れてくる。これは不動產であつても少しも差支へない。元來全然動かせないさうしたものを、一段と人間の進む作用によつて液化するのである。

個體物、個定物、不動產等を流動化し、或は人間の心理作用によつて動產化し、流動化しようとする場合、例へば、紙片れの一部が百圓、或はそれ以下である時、それを人間の心理作用を利用して流動化させ、それを消費の方面に於ける物品市場といふものに液化させると、百圓以上の價値がつく場合がある。或は又爲替證券を出し、或は農業倉庫の證券を出す。卽ち倉

庫證券、或は貯蓄債券を出し、或は賴母子講の掛金證書を見せる。それに對して金融する。或はもう少し進んで、その人の財産信用の權利が二千圓しかないのに、二千五百圓即ち五百圓餘計に貸しませうといふ。かういつた樣な種類の腋化が始まるのである。これは物とつり合はないが、衣食住に全然關係のない處に、社會的能力の表象がある。マルクスはこれなどを物として計算してゐる。又河上肇博士は、音樂會の切符などを物であるといつてゐる。

切符の販賣を見れば、唯物史觀ではないかといはれるが、私は、切符そのものを買ふのではない。目的は、切符で音樂といふ空氣の震動を買ひに行くことが、切符を買ふ目的であると云ひたい。然らば、その空氣を震動させるものに、値打がなければならぬ。

即ち神經の作用に或る刺戟を與へることが、音樂を聽くことである。要するに、刺戟といふものが、或る活氣的表象を持つた場合に、それが經濟的購買價値として現はれて來るのである。そして、此の複雜した金融市場の上に、所謂爲替市場といふものが出現するのである。

此の爲替市場、株式市場、物品市場、金融市場を通じて、一つの證券が發行される。それが

即ち約束手形である。約束といふものは、全然主觀的な心理的なものであつて、社會心理の圓滑なる進歩があつて初めてこの約束が守られるのである。

社會的能力表現の要素

約束を守るには、七つの要素が要る。先づ(一)生命が安全であること、即ち、戰爭があつたり、疫病があつたり、或は危險があつたり、洪水があつたりすると、安心出來ないから、約束手形は割引されずに戻つて來る。

その次は、社會的個人の(二)力量、勞力、動力、機械力である。次に市場、交通、かういうものが(三)變化する力によつて、約束を守る力が變つて來る。即ち市場が閉鎖されゝば、約束が守られない。その次は(四)成長の問題である。即ち人間力を通じて、自然の産物を增加し、又機械的增産によつて、利子、利潤、利益を得ることである。

その次は、人間の(五)選擇力である。即ち、能率に關する發明、發見の研究、技術があてになると思つてゐたものが、當てにならなかつたが爲めに、約束が守られない。その次に色々の(六)法律關係がある。これは司法、立法、行政の三つが加味されてゐる。經濟的方面に於

いては、是れが利權となつて現はれて來る。

經濟に關係ある法律により、又政府が保證して出來ると思つたものが、あてにならない時は、約束が守れない。

次に、(七)文化といふものがある。例へば、かういふものは流行するだらうと思つて作り、又こういふものが多分民衆に適應するだらうと思つて奔走したが、民衆は、そのものに對して無關心で、ふりむいてもくれない、結局失敗する。——又、こんな例もある。ラヂオは今盛んに取付けられて、民衆に實用化されつゝあるが、テレビジョンは既に我國でも發明されてゐるに拘らず、民衆はこれを受け入れてくれない。

殊にテレビジョンは世界的な發明であるのに、日本では、それに無關心である。それは、日本の人々がさういふ發明の機械を家庭に設けるだけ、文化が進んでゐないからである。

此の七つの要素といふものは、物質的、唯物的なものと違つて、經濟價値の心理的基礎である。此の七つの要素を主張する點に於いて、私は唯物的マルクス主義と訣別したくなるのである。

マルクスの資本論は前世紀の遺物

マルクスの資本論は、資本主義發展の幼稚な時代に於いては、必ずしも間違つてはゐないけれども、今日の經濟狀態はマルクスの資本論だけでは想像もつかない程進んでゐるのである。ロシアのやうに、まだ社會文明の幼稚な時代には、それは正しいかも知れない。又ロシアのやうに、總人口の八割迄が農村に住んでゐる國に於いては、かうした經濟組織は簡單であり、やり易い。ところがドイツ、フランス、英國、といふやうな文明國が、何故マルクス主義を採用しないかといふと、それには大きな理由がある。

マルクス主義が、そんなによく人間の幸福を與へてくれるならば、フランスの如きは、日本と違つて共和政體であり、所謂大統領が國を治めてゐるのであるから、共産主義で行く筈であるが、行けない理由が其處にはある。それは、共産主義に入つたならば、どういふ經濟であればよいか、どういふ形態をとればよいかと云ふ事の基礎が、はつきり分つてゐないから、共産主義に行けないのである。

幼稚な時代に於ける、交換經濟を基礎としての資本主義時代に於いては、マルクスの理論は

必ずしも無理からぬ説明である。即ち、交換經濟を基礎としての概念的な價値運動の時代にあつては、或る一部の資本家が、段々餘剰價値を貯へる、即ち儲けんとすると、それは集積になる。資本の集積は資本の集中となり、いふまでもなく、その結果競爭となつて現はれて來る。そして恐慌となる。隨つて恐慌が來れば失業者が現はれて來る。といふのが、マルクスの説明である。

そして、マルクスの理論には、協同組合の説明が何處にも出て居ない。マルクスは、幼稚な生産組織の時代に於いて唱へたもので、今日の如く、資本が液化し、氣化した時代における、新しき經濟組織に於いて、如何にすれば、積極的になし得るかについては、マルクスの資本論は説明してゐないのである。故に、マルクスの資本論と云ふものは、古い、前世紀に屬するものである。マルクスの資本論を讀んだ時の昂奮は、それは前世紀的昂奮である。

又、マルクス資本論の他の缺點は、立體的に、又世界的に發展して行く意識經濟がわからないところにある。それについてもう少し説明する必要がある。

即ち先に説明した七つの約束の、初めの二つ——生命と力といふものは、文明の極く低い時

代には、物的に、自然的に考へてよかつたのである。隨つて、此の程度に低い時代にあつては、經濟を研究するのに、自然的方法論でよかつた。マルクスは是れを自然方法的經濟論と呼んでゐるがそれはよい。まだ心理的にむづかしくなつてゐないから、かうも云へるのであるが、人間の變化性、成長性に入つて來ると、今度は社會的に心理性が加はつて來て、種々なる方面に亙つて分化して、意識的世界に入る。そして、統制經濟といふものが必要となつて來る。その統制經濟と云ふものは、最早や唯物的なものと違ひ、人間的能力、組織的結合、即ち協同組合組織によらざれば、眞の統制經濟と云ふものは出來て來ない。その點を、マルクス資本論は一言も云つてゐない。マルクスは此の點を忘れてゐる。であるから、ロシアは、マルクスの資本論によつて革命を起し、國家を破壞したが、その後にきたものは、革命はやつたが、今度はさあどんな經濟方法をとつて良いかわからなかつた。革命によつて舊政體は破壞したが、その爲めに資本の集積はない、集中はない、餘剰價値もとまつてしまつた。その代り國民は皆失業してしまつた。其れが一九一七年十一月革命である。

この十一月革命から一九二一年までの間といふものは、ロシアは危險狀態に曝されたのであ

る。革命の初期に於いては、數千萬人が失業して居り、實に悲慘なものであつた。何故なら、是れは資本論一點張りであつたからだ。ロシアは、如何にすれば資本論から新しき社會組織を作り出すことが出來るかと云ふ知識を持つてゐなかつた。

ロシアに於いてはマルクスの考へた前世紀的の資本主義が漸く始まつたばかりで、失敗に終らうとしてゐた。前に述べた樣に權力と云ふものは、經濟的要素の七分の一であるから、革命といふ權力行使に依つて、經濟的效果を納めるものは七分の一である。けれども、レーニンはマルクスの資本論と云ふものを採用して、前世紀的に獨裁主義をやりたいと思つたので遂に經濟組織に失敗した。

アーチエリー（ロシア協同組合の名稱）でさへ解散してしまつた。アーチエリー解散の爲めに、國內產業は四ヶ年間完全に止まり、儲けも止まつたから、皆生活に困つた。そこで、一九二一年五月になつて漸く是等のことに氣がつき、もう一度アーチエリーを復活させた。是れからロシアに曙が來た。

私が、マルクス主義と緣を絕つたのも、其の爲である。協同組合なるものを、マルクスは知

らずに居つた。マルクス時代に於いては、協同組合の機能の筋が解つてゐなかつたのである。

吾々は、新しく進んだ處の經濟狀態を主張して、新しき出發を始めなければならないのである。かう言ふ意味から、私共は更に協同組合の根本理論を考へて見たいと思ふのである。

唯心的經濟史觀の立場

あまりにも、日本の青年達が、唯物史觀と經濟史觀を混同するために、經濟卽物質運動であるかの如く考へたことを、私は悲しく思ふ。

經濟は、主として交換價値を基礎にしたものだ。交換といふのも、價値といふのも、心理的意味を離れて存在しない。交換である以上AとBとの二人の人間が、合意的に財なり、勞働なり、行爲なりを交換することを意味してゐる。價値といふ以上は、最少のエネルギーを用ゐて、最大の可能性を發展せしめることを意味する。それは時によつて（全部ではない）物質をミデアムに使ふけれども、その場合、物質そのものに價値があるのではなく、人間の精神と精神との間に、媒介物として存在するところに價値が發生するのである。

私は、最近の物理學が、唯物的實在論から唯心的實在論の方に推移しつゝあることを再びこ

こでは說かない。ドブロイやシユレディンゲル、またはハイゼンベルクの量子力學說、そして、波動力學の發展によつて、物質を組織する電子が、エネルギーの波であることを、これらの人々は說き、物質が最後の實在でなくして、エネルギーが、實在の本體であることを說明せんとしてゐる。それで私は、唯物史觀の學說に、必ず一大變化が起ることを、今から注意してよいと思ふ。

然し、經濟學に關係する人々は、物理學的唯物論を無視して、辨證法的に唯物論を主張せんとする。彼等は、客觀の世界に開展するものが凡て物質であることを主張する。そして、交換が客觀的事實である以上物質的媒介物を基礎にしなければならないことを主張する。

空間の擴がりを、すべて物質であると考へるならば、交換の世界に於ける物質的表象を、本質的のものと考へることが出來るかも知れない。然し、私は、この場合に於いても、物質が時間的推移を經た後に於いて、價値の計算を要求せられる場合には、過去つた物質は、もはや實在ではなくして、記憶の世界に於ける價値の符號にしか過ぎないことを主張するものである。

こゝに十人の家族が、一年間に十石の米を食つてしまつたとする。年末にこの米代を拂ふ場

合には、米はもう既に無い。その場合に拂ふ米代は、米のために拂ふのではなくして、十人の生命を持續さしたエネルギーの價値に對して、支拂ふのである。その價値といふのも、すでに過去つたものであつて、今はどこにも無いものである。ただ記憶にだけ殘つてゐる。それで、價値はその記憶の上の計算になるのであつて、その場合の支拂は主觀的實在を基礎にする。

これからの經濟が、激しく流轉すればする程、唯物的に考へられた價値が、一つの符號にしか過ぎないで、時間的に變轉する刻々の價値變動は、交換の世界に於いても、無形のものを取扱ふやうになるのである。

無形物の價値

殊に、先物取引に於いては、無形物の取扱ひに多くの人は專念してゐるのである。六ヶ月後に精算されるべきはずの絹絲に對し賣手と買手が契約をする場合には、そんな絹絲はまだ地上に存在しないのである。然し、心理的に實在するものとして、無形物を取引することが出來るのである。

投機市場に於いて、價格の變動の激しいのは全く、この無形物を取扱ふことから起つてく

る。そこに於いて實在するものは、たゞ心理的の可能性だけである。それであるから、心理的可能性を疎外する（一）生命の危險（二）勞力の損傷（ストライキ、サボタージュの如き）（三）變化性の阻止（四）成長性の中絶（五）選擇作用の妨害（六）社會秩序の混亂（法律及び權力の無能）（七）文化目的の實現不可能等によつて、心理的可能性が打擊をうける度毎に、價格に一大變動が起る。これを私は、價格の心理的分析といふてゐる。

これを見ても、經濟行動が、たゞ唯物的のものだけを取扱つてゐないことが判るだらう。

心理的表象としての商品

否、かうした無形物の取扱ひだけに止まらない。たとひ有形の商品であつても、商品そのものに心理的要素が含まれてゐるのである。人間が、決定的必然性の固形體でない以上、生理的の日用品を要求する場合でも、生理的變化性の差異があり、その生理的差異を決定する本能的偏移差が認められる。そしてこの本能が心理的のものであるだけに、生理的の必需品までが、本能心理の支配を受けるのである。

これは食物に就て考へる時によく判る。人間の攝取する食物は、多岐多樣である。それはカ

ロリー量を攝取するだけではない、如何なる種類のカロリー量を攝取し、如何なる味をつけてそれを食ふかといふ問題が起る。生理的に要求してゐるものは、食慾として、心理的形をとつて表はれてくる。鹽分の足らないものには鹽がうまく、脂肪の足らない者には脂肪がうまく感ぜられる。そしてうまいものは、また身體のためになる。この商品を心理的に分析すると、食物の如きは、單に物質的な存在といふだけでは濟まないで、感覺を投影したものとも考へられ、（これは生産者の立場から考へた場合）また消費者の立場からすれば、刺戟の結晶とも考へることが出來る。日本米だけでも、一萬五千種類もある中から、ある特殊なものを摘出して、我々が食ふのである。關東人は小粒を喜び、關西人は大粒を喜ぶ。それに味の苦情がある。

かうなつて來れば、商品は、物質ではあつても、出鱈目な無質ではない。勿論機械論的に考へるべき物質ではない。それこそ心理的の意味を持つ價値の結晶體であると考へていゝのである。

かく考へてくると、商品としての財は、單なる唯物的なものと考へないで、心理的價値のある表象體、あるひは表現體として考へてよいのである。それで、マルクスが「凡ての文化は、その時代の唯物的生産の形式によつて、主として決定せられる。」といふ場合でも私はこの唯物

的生産の形式といふことに、價値論的分析を施さなければならぬと思つてゐる。

同じ商品でも、生理的必需品と、視覺本能の娯樂物のフィルムや寫眞機のやうに心理的の內容を持つものがある。更にまた、書物や廣告の意匠や、美術品のやうに、紙やインキに價値があるのでなく、全然心理的な意味に於いてのみ、價値を持つものがある。そして人間の心理的內容が、無意識的な反對作用より、感覺本能を通つて、意識化すればするほど、その表象として、商品は、物質的內容よりは、意識的內容を多分に盛るやうになり、必要なる書籍は、その紙とインキに價値があるのでなく、それが意味する意識的思想內容に價値があることを、我々は發見するのである。

かく考へると、文化が唯物的生産の形式によつて決定せられるといふけれども、「物」だけを生産したから値打があるのでなく、物の中に盛られた內容の貴いものを生産するところに、文化の決定があるのである。

唯物經濟より人間經濟への推移

この物品の內容が、無意識なものより意識的な內容を持つたものに變化すればするほど、文

化は、高くなることを私が注意する他に、交換經濟の世界に於いて、或商品にもれないで、人間の技術的活動のみに、交換價値が發生する場合がある。そこに職業經濟が發生する。學校の教師は、物品を販賣するのではない。物質としては見えないけれども、時間的に推移する彼の精神的作業に對して價値が發生するのである。ピアニストに對する報酬も、講談師に對する報酬も、職員に對する報酬もみな然りである。そして、都市文明といふものは、ますますこの種の心理的意識經濟ともいふべき職業を、大いに增加さすものである。

即ち農村の經濟は、まだ衣食住に關する所謂唯物的生産に多くの努力を拂つてゐても、人間そのものが、無意識的生活により意識的に目醒めて、宇宙目的や、人生目的の測定、實現、保存、補正の四大價値の運動を始める段になれば、唯物的生産の形式は殆ど機械に任せて、人間は、意識的職業經濟へと移行するものである。

唯物史觀の無能

米國のニューヂャーシーでは、人間の居ない人絹工場が出來てゐて、ニューヨークのオフィスに坐つてゐて、釦を押せば、機械がひとり動いて人絹の生産をするさうである。

衣服がかうして生産せられ、食物の生産もトラクターや、リーパーや、ハーヴエスター等によれば、一人が勞働することによつて、廿町歩も耕作せられ、一人の農夫によつて、五百人位の食物は、容易に生産出來る。

かうなつて來れば、無意識的勞働にのみ從事してゐるものは、皆失業する。そこで、人間は益ゝ意識經濟へ出發することを餘儀なくせられる。そのために、意識の開拓に必要な學校教育といふものが、大事な經濟機關となり、學校卒業生が意識的勞作の職業を求めて、社會に出かけてゆくのである。かうなれば、唯物的生産の形式だけで、文化は決定しない。いくら、唯物的生産形式が機械化しても、人間がその餘剰勞力を意義的作業に導き、而も名人が相互的連絡を保ち、統制ある腦細胞の如く、個人々々が、宇宙意識の細胞の一つ一つになるやうな氣持で努力しなければ、駄目である。徒らに、唯物的生産の形式によつてのみ、文明が決定せられると思つて居れば、失業者ばかりが出て、不幸な社會が生れる。失業者が無いやうにしようと思へば、意識經濟に這入つた各人が、機械の生産した日常必需品を分配して、生活を保證し、その上は、宇宙眞理の實現のために、腦細胞のやうな生活をする必要があるのである。

都市經濟といふものは、全くかうした腦細胞的意識活動者が、一定の統制のもとに活動するやうになればよいのである。今の都市は、それに行かんとする凝體であつて一種の發狂狀態に置かれた腦細胞であるといふことも出來る。

斯く考へると、唯物的經濟史觀を說明する交換經濟の世界は、財に關する一部分の經濟世界であつて、意識經濟に移りつゝある職業經濟に關しては、唯物史觀を說明しない。

經濟價値と宗教價値の一致

それであるから、マルクス主義では、失業問題は解決出來ない。ドイツのマルクス的社會民主黨が失業問題をよう解決せず、英國の勞働黨が失業問題をよう解決しなかつたのは、唯物經濟より更に進んで職業經濟の本質を理解しないからである。

もちろん、ロシヤの共産黨は、人間の意識經濟を理解しないから、失業問題を解決してはゐない。ロシヤは職業の自由を否定する國であるから、職業選擇のない國である。職業選擇の無い國は、個人は國家に隷屬する。卽ちロシアは一八七一年に解放した農奴制度を强制勞働によつて復興したに過ぎない。ロシアに失業問題がないといふのには奴隷に失業者がないといふの

と均しい。人間を物質と考へる國に於いては、必然的にかうした結果に導かれる。

即ち經濟價値の發展は、意識價値の發展と同一方向に向いて居り、それは宇宙目的を實現するための價値運動でなければならない。そして宇宙の目的を實現するのは宗教であるが故に、經濟價値も、宗教意識的價値を基準にして出發しなければならない理由がこゝにある。

要するに、唯物史觀が「凡ての文化は、その時代の唯物的生産の形式によつて、主として決定せられる」といふに對し、私は、

「凡ての文化は、その時代の經濟活動の意識的發展と、その運用が、社會的表現をとる形式にしたがつて、主として決定せられる」と主張するものである。

それで、意識的に利己的な人々が、機械的生産をする場合には資本主義となり、意識的に他愛的な人々が、機械的生産に從事した場合にのみ、眞の目的性を持つ意識社會が生れることを私は主張する。階級意識をのみ基礎にして、個人の自意識を蹂躙する專制的共産主義は、ファッショと何等變る處なく、自意識活動による理想的發展の拒絶を意味するが故に、個性に對する選擇の自由と、自發的勤勞を阻止し、怠惰の世界を生み出す傾向を持つてゐる。

結局我々は、意識を開發する唯心的經濟史觀を基礎にしなければ、理想社會を建設することは困難である。

協同組合制度に於ける思想的發見

英吉利のロバート、オウエンは、一八二四年頃から協同組合といふ言葉を使つてゐた。しかし、實際はフランスに於て、もつと早くから、この言葉が使用されてゐた。即ちフランス革命の運動と關聯して、一七八九年頃から其處には協同組合運動の思想が、既に胚胎してゐたのである。爾來、この運動は漸次進展して、組合の組織されるものも多かつた。が初期時代に於いては組合事業は大抵失敗であつた。

初期協同組合運動が失敗に歸したのには、二つの理由があつた。それは、初期の協同組合は一種の生産組合であつたが、第一に生産物の販賣が圓滑に行かなかつたこと、第二に利益分配に缺陷があつたことである。そしてこの二つの中でも特に重要なことは、利益の分配に關するものであつた。即ち利益を分配するに當つて、資本家が多くを取り、勞働者の手に入るところが甚だ薄かつた。

この缺陷は、ロッチデールの方法に於いても、なほその域を脱することが出來なかつた。ロッチデールの方法とは、一八四四年十二月二十一日に、英吉利ランカシヤのロッチデール市に於いて、二十八人の紡績職工が消費組合を作つた時の方法であつて、これは協同組合運動史上に最も重要な事件である。

協同組合を組織するには、金錢及び勞力の出資を必要とする。この出資なくして組合は作れない。そしてこの資本と分配との關係を合理的に進めて行くのが、今後の協同組合運動として、最も愼重に考へられねばならない問題である。

ロッチデール消費組合が出來てから暫く後に、協同組合制度の上に一の大きな思想的新發見があつた。それによつて協同組合は、今日見るやうな、まことに美しい姿を取ることになつたのであるが、その思想的新發見とは外でもない、利潤拂戻の制度である。利潤拂戻、それはむしろ當然の事と言つてもよい位制度としてはごく簡單なことではあるが、本質的に、協同組合運動にとつて、最も重大なる命題であることを注意して置く必要がある。

資本主義に於いては、餘剩價値を資本家が搾取する。しかし、搾取の弊に陷らず、もし利潤

拂戻の法式が定まるならば、それによつて又更に、次の新形式が生れて來ろであらう。利潤拂戻は一の經濟道德である。近藤康男氏の著作「協同組合原論」を見ると、同氏がこの點をくはしく説明してゐられないのは殘念であるが、搾取なき制度、それは單に思想としてばかりでなく、今や實際運動として成功しつゝあるのである。

一九一三年英吉利に、ギルド社會主義が生れて、協同組合運動に一の新しい形體が備へられることになつた。これも協同組合運動史上肝要な一事象である。

社會主義は、初期に於けるユートピアン・ソシアリズム時代には、まだ社會學的、經濟學的の確乎たる根蔕をもつてはゐなかつた。それは單に、道德的空想の社會主義に過ぎぬと、言はゞ言はれるものであつた。トーマス・モーアの小説「ユートピア」は印度洋に於ける遭難者が、理想鄕を發見したといふ空想的の記述であるが、この思想はフランスで盛に流行し、ユートピア的社會主義の實行運動さへ起つて、サンシモン等もこれに參加した位であつた。日本では、どちらかといふと、寧ろこの思想を嫌ふ傾向があるが、フランス人のうちには道德肯定の思想から、マルクスよりも却つてこれを採る者が多いのである。

ロバート・オーエンの徒は、かうした理想の社會が、容易に實現するものとし、六箇月くらゐの後には必ず來るものとさへ思ひこんでゐた。日本でも大正九年頃の麻生久氏の如き、全く同じ考へを抱いてゐたやうである。しかし、事實は豫想を裏切つた。それならば何故に來るべきものが來なかつたかといふと、經濟的運動が社會的、思想的混亂の渦中に卷きこまれてその方向を失つたからだと言へる。

經濟行爲の三時代

經濟行爲の發展には、生理的時代、心理的時代、意識的時代の三つの階段がある。生理的時代は原始的であり、心理的時代は主として目、耳、鼻、口等を通した感能的時代であり、そして意識的時代に入つて、善や美や、道德、宗教の意識が擴がつて來る。今この原則を協同組合運動に當てはめて見ると、消費組合で取扱ふものは生理的のものに止まり、まだ意識的には進んでゐない。そしてこの三つの發展を更に七つの價値機能によつて分析することが出來る。七つの價値機能とは、生命、精力(勞力、動力、機械力)、變化、成長、選擇、秩序(法律)、目的である。右のうち選擇に至つて意識的世界に入り、目的の時代に始めて宗教的、科學的文化世界

が現はれることになる。

マルクス學徒の唱へるやうな物質的社會經濟の一歩奥に、經濟心理の潜んでゐることを考へなければ、眞の經濟機構は分らない。事實について言へば、社會主義は最初富の平等分配といふことを主として考へてゐた。即ち富を物的にのみ考へた。一體人間の意識が幼稚の時代には、すべて客觀的の事象以外には分らないものである。けれども眞の富といふものは、物的、客觀的の見方をしてゐる間は決して分らない。眞の富は主觀的に意識生活の内容を豐富にするものでなければならない。

マルクスは「財」を何處までも物的に考へてゐた。しかし、富といふものは、單に「財」の考へだけを以て決定することは出來ない。富はもつと人間的であり、職業的である。そして文化が進むほど財的經濟から職業經濟に移るもので、從つて失業問題が深刻になつて來る。この失職をすらマルクスは財的にのみ考へてゐた。そして初期の社會主義者、共産主義者中には、法律をもつて總てが解決されるといふ考へをもつところの、法的社會主義者、共産主義者が多かつた。

それは議會中心主義者から、レーニンの協同組合反對時代、國民主義、專制フアッショ時代を通じて、外形こそいろ〳〵の變化を示してゐるが、內部的には少しも進歩してゐない。アムステルダム、モスコー、イタリーを通し、たとひ議會を解散して見たところで、根本的の解決を與へる事はまだ距離があつた。一口に言へば唯物的社會主義は、われ〳〵の經濟生活に寄與すること極めて淺かつた。

然らば、根本的に經濟生活に寄與する、とは何んなことであるかといふと、前に擧げた生活の七つの機能に全部タッチしたものでなくてはならない。そしてこれこそ眞の協同組合の機構であるといふことが出來る。ロッチデールの利潤拂戻の方法が唯物的社會主義以上の効果を、徐々に收めて行つたのは、まことに味はふべき事實である。

ロッチデール消費組合

初期ロッチデールの消費組合運動には、キリスト教の應援があつた。ロッチデールは紡績工業の中心地で、自然、團體的經濟機構に關する刺戟を受けることが多かつたのであらう。そしてその上に、ケンブリッヂ大學の神學部教授で、英吉利のキリスト教社會主義の指導者であつ

た、フレデリック、デニソン、モーリス等の熱心な支持を得て、ロッチデール消費組合は發展したのである。

日本で政府が産業組合を始めたのは、明治三十三年（一九〇〇年）で、丁度二十世紀の第一年に當り、平田東助が內務大臣をしてゐた時であつた。まづ信用組合、販賣組合、購買組合、利用組合、及びそれらの兼營組合を作つた。これは平田東助が品川彌二郎と共に、ドイツを視察してその制度を採つたものであるが、こゝに面白いのは、この制度を採用することになつた眞の目的は、當時日本にも入つて來て國民の間に漸く擡頭しかけてゐた、社會主義思想を緩和防壓する爲であつた、といふことである。

英國勞働黨の一部には、現在でも消費組合に反對を唱へるものがある。彼等は消費組合といつても、實質は資本家の數が殖えたゞけであると言つてゐる。實際英吉利に於いては消費組合內のストライキが數回もあつた。

消費組合は勞働階級に最高の賃銀を與へる、といふことを標榜してゐるが、勞働全收權から言へば消費組合は成立しない。經濟的に成立しないのである。私はすべての經濟價値は勞力に

よつてのみ決定されるとは思はない。一般には經濟價値は勞働行程に於いてのみ發見されるやうに思はれてゐるが、それは間違つてゐる。いくら勞力を費して造つたものでも、不用の品は賣れないのである。また勞働には時間と巧拙の關係があり、能率經濟のことも考へなければならない。そして法的秩序、文化的目的が價値を發揮させるのであつて、かうした事は取も直さず意識的活動の顯現であるといふべきものである。

専制的哲學者はまた、協同組合の經濟を馬鹿にした。そしてこの運動に對して、妨害をさへ加へて來た。けれども歐洲戰爭前に至つて、生産者と消費者とが、互に扶け合ふところの、眞の搾取なき協同組合が漸く認められるやうになつて來た。英吉利のペンチー、オレーシ、テーラー、G、D、Hコール等の人々は、協同組合によつてのみ、社會主義でも共産主義でも達し得られなかつた理想的經濟社會を編み出すことが出來ると、聲を大きくして唱へるやうになつて來た。

ギルド社會主義は、一面からいふと英吉利勞働黨を吃驚させたことになつてゐる。何故かといふと、英吉利勞働黨は、すべて國有主義で、土地その他、十大産業に對して國有を主張し

た。日本でも鐵道や電信電話は國有であるが、國有といふことが、勞働階級にとつて直ちに幸福であるとは言へない。これはギルド社會主義創唱者の一人である、オックスフォード大學教授コールの批評で、佐野學君の邦譯がある。しかし、コールの論述するところだけでは、なほ職業經濟に對する理解を缺き、マルクスに對しても徹底的の批判が示されてゐない。要するにギルド社會主義は、まだ机上の議論と言はなければならぬ狀態であつた。

ところが、勞働黨の世となるに及んで、英吉利人はもう一度、ギルド社會主義の思想を考へ直して見た。そして一九一七年のロシア革命以後、改めて協同組織の仕事に向つて發足した。一方伊太利に於ても、勞働組合のストライキは屢々繰返され、その勞力を皆遊ばせてゐた。けれどもそれが今日では、産業組合制度を基礎とするギルド國家にまで進展してゐるのである。

以上は協同組合運動發達の跡を、現狀から既往に溯つて一瞥したものである。

ライフアイゼン

ロッチデールで作られた協同組合は消費組合であつた。しかしその思想がドイツに入つて、シユルツエが先づ信用組合を作り、續いてライフアイゼンはライン川流域のヘイデスドルフに信

用組合を創設した。日本の信用組合はまだ高利貸のやうなところがあるが、ライフアィゼンが特に貧乏な町を選んで、信用組合の運動を起したのは、最も意義のあることであつた。それにライフアィゼンは熱心なキリスト教者で、キリスト教的分配といふことをさへ始めた。日本の産業組合は、この調子で行くなら、高利貸になる可能性があるが、キリスト教的分配と共産的分配とは、その差眞に僅であつて、餘剰價値を最貧者に分配するといふことが、キリスト教的分配の特色となつてゐる。これは共産的分配には全く無いことである。

次に來るものは、富の全體社會の所有である。

富の社會的所有

富を一部の生産階級、消費階級だけの所有とせずしてこれを國有とする。およそ國有で實行し得られるものは、大抵の場合利用組合に於いて行ふことが出來る。また利用組合に於いて行ひ得るものは、國有でも出來るのであるが、それには意識的結合がなければならない。ロシアの經濟の程度ならまだよいが、もつと複雜なものになると、何うしても意識的結合がなくてはならず、この點に於いて國有といふことは力が稀薄になる。ロシアの共産主義は、漸く發達し

て、今では協同組合の形を採らうとしてゐる。即ち究極はギルト國家の組織になるといふことを豫覺させられるが、社會心理の團結を根本要件として、組合經濟は確立するのであるから、この點から言つても、複雜なものになると、國有では仕事の遂行に不便を感じることになる。

ブラジルは土地國有の國であるが、依然として富は增さない。これも組合意識のないところから來てゐると言へよう。

また協同組合には非常に力强いものが祕められてゐる。そして前に言つた價値の七機能の發展に從つて、生命的には保險、勞力的には生産、變化的には販賣、成長的には信用、選擇的には互助組合、法律的には利用組合（利權を發生するため）そして目的的には消費組合となる。これだけのものを完全に守り立てゝ行く覺悟があれば、社會はいかなる場合に臨んでも困ることはないのである。けれども事實はまだそこまで發達してゐない。英吉利は消費組合だけ、獨逸は信用組合だけ、といつたやうに、片寄つた發達しか遂げてゐないといふのは、悲しむべきことである。

第二章　意識經濟學より見たる産業組合の本質(下)

協同組合の五大使命

協同組合は、五つの使命を持つてゐる。第一は餘剰價値をなくすること、第二は資本の個人的集積をなくすること。協同組合が發達すればする程、私的集積は減つて來る。ドイツ、スキーデン、デンマークの如く、凡そ協同組合の發達した處程、私的集積が減つて行く。又第三に資本の私的集中がなくなり、第四に恐慌がなくなる。マルクスが前世紀的に起ると云つた處の恐慌から、脱却出來るのは協同組合にある。

從つて第五に階級闘爭をなくすることが出來るのである。先づ第一に餘剰價値から脱却し、金儲けが型を變へて來る。儲けは協同組合のもの、即ち皆のものになる。協同組合の儲けは協同組合の儲けで差支ない。協同組合が儲けた場合は、社會が幸福である。此の點私は、餘剰價値の總てが悪いといふのではない。餘剰價値を自から求めることがいけない、即ち、個人のものでなくして社會全體のものでなければならない。それ故に問題は餘剰價値を私せずそれを

社會化すればよいといふことである。

デパートなどは、時々奉仕デー、特價デー、などを設けて、或る特種なものに限つて、商品を損して賣ることがある。そんな事をやつて儲けのカムフラージュをはかつてゐる。これは一見奉仕的に見えるがかうしたものは、資本主義の發達の初期においてはよいけれども、もつと進んだ時代にあつては必ず勞資の衝突をする。即ち、大資本家たるデパートが商品を安く賣るには、生産費を安くしなければならない。又奉仕しても、只多く賣らうとするだけでは、それは浪費になつてしまふ。協同組合の必要は其處にあるのであつて、資本の私的集積をなくしてしまふと云ふことに非常な特徴を持つてゐる。又奉仕してゐて儲かるものがある。却つて、奉仕的にやつた方が儲かる場合がある。又奉仕し得るのが産業組合の協同組合たる特徴である。隨つて恐慌と云ふものがなくなり、失業者もなくなる。此の五つの點を、協同組合は持ち得るのであるが、吾々はマルクスの資本論に對して協同組合のなし得る使命を、はつきり知ることが出來るのである。

産業土地より心理的土地へ

マルクス時代に於いては、大きな經營は出來なかつたので、經濟問題の解決は權力のみによつて可能であると考へたのである。又、マルクスは、その後に出來た協同組合を知らないのである。私は更にもう一度交換經濟に歸つて行く。不動産を不動産と考へ、若しくは物品のみを物品と考へた經濟組織においては、マルクスの理論だけでも簡單に説明が付くのであるが、經濟が所謂物件的でなくなり、心理的になつてくるとマルクスの云ふやうな經濟政策ではやり切れなくなる。これを生産機關に就いて云はう。

先づ私は、土地の問題を摑まへて見る。土地と云ふものは、マルクス的に云へば、唯物的なものであるとしてゐる。けれども今日では、土地を心理的に考へることが出來る。例へば、今から約八十年程前に、ドイツのリービッヒと云ふ人が、人造肥料といふものを發明した。さうして、硫酸アンモニアと過燐酸と加里との三つを加へたならば、土地の生産力は增すと云ふことを云ひ出した。さうすると、人造肥料發明の結果、地力と云ふものは、人間の心理的修正を受けるやうになつて來た。それのみならず今より約十數年前から、コロイド農業、即ち、膠農業と云ふことを唱へられて來た。例へば、植物を最も助長發達せしめるものは、膠であつて、

土地が膠にならなければ、植物に貢獻することができないと云ふのである。さういふことがわかつて來たので、土地の改良に志す人は、膠農業といふことに頭を向けてきた。このことに氣付いてゐたのは、宮城縣の森孫太郎と云ふ人である。この人は、土地を改良するのに、藁灰を土地に無限に入れておいて、惡い土地を改良した。藁灰は膠質であるから、土地の改良に益するわけである。此のことに氣が付いた爲め、宮城縣は、惡い土地をどん〳〵改良して、非常によい土地となつたといふ。

これは一例であるが、此の膠農業の發明發達といふものは、人間の智力の發達の結果であつて、即ち、土地の心理的修正といへるのである。更に又最近であるが、膠、即ちコロイドの中にある處のバクテリアに氣が付いて來た。此のバクテリアの種類が約百種類ある。その中に空中窒素の分解作用をするものもあれば、しないものもある。そのために、米國の農業研究所の技師の如きは、『土地は生物である。土地は死物に非ず』と云ふことを云つた。

斯うなつてくると、もう土地といふものは死物として扱へないで、生物として扱ふやうになる。人間が益々是れを意識的に生物として取扱ひ、人間の智力を用ひて改良して行く、——と

云ふやうに、人間の智識に依らなければ、どうしても生産を増す事は出來ないことになつて來た。

物的に唯物論的に考へてきたマルクスの學説では、精神的の氣分を商品に取扱ふことは出來ない。例へば、土地即ち、不動産を動産に結合して、證券土地といふものに變へる。これを販賣する場合になると、最早やそれは物的なものと云ふよりも、寧ろ心理的なものとなつてくる。これは、恰も土地と云ふものを、液化、氣化する處の原理である。土地を、自然土地から産業土地に、産業土地から心理的土地に、段々修正して來る。

唯物的資本より心理的資本へ

次に、今度は資本はどうか、と云ふ事になる。多くの人々は、資本といふものは唯物的なものであると思つてゐる。カール・マルクスも資本を唯物的なものであると思つて居る。處が、文明が進んで、信用經濟と云ふ方向に向いて來ると、資本と云ふものは、唯物的なものではなくなつてしまふのである。文明の初期に於いては、衣食住と云ふやうな、簡單な、物的なものを資本と考へ得るけれども、文明を高度に組織しようと思へば、趣向をかへなければ勞力を供

給することが出來ない。それ故に、人間の資本といふべきものも要るのである。それには、技巧も入つて居り、體力も入つて居り、又動力資本も要る。動力資本とは、人間の勞力その他の動力即ち文明の發明といふものを處理してゐる處の智力、氣力、動力といふやうな實質を助長する處の勞力を加へて云ふのである。

その次は、得意先と云ふ資本だ。第三に必要なものは、市場方面である。市場といふものが、資本になるのである。これを市場資本といはうか。要するに「これだけ儲かる」と見越されるものは資本に繰り入れてよいのである。即ち、自然的利潤、人間的利潤、かうしたものがはつきり解つてゐる事業、それが一つの資本なのである。例へば、あの男を雇へば、この店は榮える、といふ場合、店の店員、技術員、と云ふものは資本である。

その次にくる問題は、即ち能率である。斯う云ふやうに資本といふものは、時代が進歩すればする程、物的資本が、社會の心理的資本に移行して行くのである。これに氣が付いた人の中には、社會的總資本と云つてゐる人もあるが要するに、これは物的なもの、唯物的なものではないのである。是れは人間的なものであり、精神的なものである。

社會的總資本といふものは、人間の內面的進化力そのものによつて增して行くのである。發明發見の力、教育の力、土木學の研究、航空學の研究、或は地質學の研究、さうしたものが、即ち、資本になつてくるのである。これは、智的方面の資本である。

社會全體が、人間の能力を增すやうに、深刻な努力を拂へば拂ふ程、國民の信用は高まり、信用は大きな力を持つて來る。それと反對に暴力を以つて、內部的に人間の力を抑壓すれば、人間は働かうとする意思はなくなつて來る。

私は、最近ロークレンダス、グレトシンプス（これはロシアの本）を讀んだ。それによるとロシヤは非常に困つて居る。革命後十六年もたつのに、まだ農村に於いては、衣食住に缺乏してゐる。私の知つてゐる外交官天羽英次郎君は、曾てロシヤの大使館付參事官として、足掛三年ばかりロシヤにゐた人であるが、天羽君のいふ處によると、ロシヤの大使館は物品の交換も出來ない。又食物も買へないから、やむを得ず外國から食物を買ふ。

革命をやつてから十六年も立つのに、食物も物品も交換出きない、此の事情はどうか。是れは、百姓が物を作つて收穫すれば、政府がそれを全部取上げてしまふから、百姓は、自分の食

べるだけしか作らない。都會はどうであるかといふと、これも又、窮境にある。

是れは、暴力革命といふものを行ひ、社會の人的資本を、唯物的に考へたからである。社會の心理を、暴力で抑壓すると、人間の勞力は三分の一に減る。カスタクのシボラーといふ有名な、墺太利の經濟學者が、歐羅巴の、奴隷の經濟を研究した結果、奴隷の勞働能力は、普通人間の三分の一しかないと云ふことが解つた。即ち、暴力で抑壓すれば、人間の勞働能力は、三分の一に減つてしまふ。假りに、諸君が今日、レニングラードやシベリヤに居つたとするならば失業がない。その代りそれは奴隷である。諸君が、斯ういふ組織に甘んずるならば、失業はなくてすむ。ロシヤの過激派は、都會に厚く、農村に薄いから、農村の人は、都會の勞働者になりたいと、數年前から、毎年五百萬人位都會に集中し、どの停車場も皆、野人の群で一杯だ。其處で、ロシヤ政府は、六大都市に命令を發して、あるときは六ヶ月間に、百萬人に、人口を減らさうとした。即ち旅行券を持たないものは、都會から出て行けと云ふ命令である。又何處へ行けといふこともいはず、行く處も拵らへずに、强制的に追ッ拂つてしまふ。斯ういふ權力を日本で行使したなら、諸君は、是れに對し從順であるか。ロシヤの國民は、それでも、

だまつて退却する。さういふ人間ばかりである。

暴力をもつて來た場合、勞働能力は縮少し、能力は自然的なものとなり、成長能力、技術的能力等の、文化的な、いろんな能力は全部止まつてしまふ。其處で、資本、それ自身が縮少してしまふ。ロシヤのルーブル紙幣は、現在廿五錢して居るが、國内に於いては、殆んど三錢位の價値しかない。經濟といふものは、そんなものである。

經濟といふものは、内側から、卽ち、人間の精神から來て、時代を益しよう、時代に貢獻しようと思ふ人、協同しようと思ふ人、さういふ自主的な考へを持つた人が集まつて、成り立つもので、その考へがなければ、能率といふものは、ぐつと、減つてしまふ。であるから、マルクスの唯物觀の經濟は、今日では全然、資本といふものが、集まつて來なくなり、又資本は、ロシヤのやうに暴力、武力で無理矢理にとられてしまふから、國民は、自分の食ふだけしか作らない。こんな風であるから、皆な怠けてしまふ。これではなんにもならない。それで世界的のサボタージュ國になつてしまつた。是れによく似てゐるのはスペインである。

一七〇八年頃、非常に富んでゐたウクライナ地方は、政府が盛んに、暴力、武力をもつて虐

げたので此の三、四年間といふものは、飢餓を續けてゐる。卽ち資本は、物的な資本であるといふことは、昔である。

此の一例は支那である。支那の山東省、山西省は世界中で一番石炭が多い。無煙炭が一年間に、一億噸づゝとつて、何千年でも續くといはれてゐる程、石炭の包藏量が無限である。支那の國民はそんなことには全然無關心である。それは、支那の社會狀態が混亂してゐるから、物質資本や、動産があつても、人間的資本、言葉を替へて云ふならば、卽ち社會的資本と云ふものがなつてをらないからである。それであるから、支那の國では、よい株式會社は組織出來ない、賄賂ばかりとつて、個人的利益が中心であるから、もう駄目だ。又儲けは、儲けで社長が一人占めをしてしまふ。それはもう徹底してゐる。日本人が助けなかつたならば、支那の紡績會社は絶對に經營が出來ない。我國で、資本を十億圓も投資してゐる紡績會社が支那には七つもある。

支那人には、道德的組織能力がない爲めに、日本人の道德的組織能力を、借り入れなければ、資本の運轉が出來ないといふことになつてゐる。

資本と云ふものを、物的資本とのみ、思つたら、大きな間違だ。即ち、社會的能力、そのものが大きな資本と云はなければならない。

皆は、資本主義が悪いといふが、個人的資本主義だからいけない。資本が個人的利益を得る場合は悪いが、組合資本か、國家資本か、社會資本なる場合は、幾等儲けても差支へない。資本を、物的に、個人的に、使用するのが悪いのである。組合を作る場合、金は少しでもよい、一株五十圓でも構はない。只、社會的の資本さへあればよい。組合は、さういふ心理的要素、即ち能率的、技術的、秩序的、文化的等、全部の社會的エネルギーをもてば、それが資本である。

協同組合といふものは、株式會社のやうな、大きな拂込を必要とせず、僅かな資本で足りる。此の點が協同組合のみに與へられたる大きな特長であり、實に不思議なものである。

個人的勞働より組織的勞働へ

勞力は、進歩する。最初の社會に於いては、大體、體力である。それから智力に移る。發明の力、發明のやうな、創造力、推理力、補充力或は、組織力、こういふものが勞働力に入つ

てゐる。高等小學校卒業程度の人と、尋常小學校より行かない人との、勞働力を較べてみると、尋常小學校卒業者は、成績も悪いし、智力も少ない。能力が違つてゐる。即ち、注意力、聯想力、記憶力こういふものゝ集まつたものが學習力である。故に、注意力のまとまらない人、聯想力のまとまらない人、記憶力の悪い人は進んだ、機械工業に從事できない。大きな工場は、まかせられないのである。支那に造船所が發達しない理由は、支那の勞働階級が、普通教育を受けてゐない爲めに、機械を使用する爲めの、判斷力を缺いてゐるところにある。機械工業を發達させる爲めには、どうしても、智力をもたなければ充分な勞働力を發揮することは出來ないのである。これは、農場の組織も同じである。

我國の農業を考へると、農場にをる人々は年寄りが多い。農場組織に團結力がない。町には工場があるが、村には、さういふ機關がない。町には分業組織がある。けれども村には分業組織がない。又、勞働力は町は榮えるが、村は榮えない。其處で、村といふものゝ、生産能力を增加しようとすれば、工場に於いて、やるやうな、勞働組織をひいてやらなくてはならない。さうするには、まづ注意力、聯想力、記憶力、體力、判斷力、學習力を增加して、而して、大

大的な組織を持ち、分業的に、組合農業を行ひ、又、土地の產業組合を作る一方、農村の勞働力を增す爲めには、生產方面に於いては、立體的農業、多角的農業をやる。さうして日本のやうな山國に於いては、山の農業を發達させなければ嘘である。

例へば天龍川の砂面を利用して、ナツメ、ヒツカリ、朝鮮松などの植物を植ゑて研究する。或は、山の木の下を利用して野牛、山羊などを飼ふ。殊に信州のやうな山國に於いてはかうしたことはもつてこいだ。獨逸には、山羊が非常に多い。日本の國は少ないが、獨逸に於いては全國に、百四十萬ばかりをる。長野縣も多いが、沖繩縣には約十萬ばかりをる。これは、草を食はして肉を食ふのであるが、肉を食ふのは、一番損なやりかたである。肉を食はずに乳にすれば一番よい。假りに、一軒の家で、山羊の二匹も飼つてをれば、どんなことがあつても、餓死するやうなことは、絕對にない。

又養蜂をやることが必要である。蜂を飼つて、蜂蜜をとるには、矢張り、專門的な智識が要る。卽ち昆蟲學の研究が要る。如何にして、優良なる蜜をとるか、又、如何にして蜂蜜量を增すか、これは智力の問題である。卽ち頭腦資本である。要するに、さういふ方法に組織化し、

智的に、團結的に、分業的に綜合して行く、その人間的資本、卽ち團結と云ふ資本がなくてはならない。

消費は物質的より感覺的意識的へ

消費は大體、心理的な最初の衣食住である。吾々はもう、食ふことは出來ないといふが、衣食住は、非常に、心理的なものである。初期に於いては、たゞ簡單に、寒さを、凌いでゐる程度でよいが、段々文明が進步すると、感覺的要素になつて來ると同じやうに糸でも、デニール、セリブレンが喧ましくなる。又織り上げた綿柄でも、縱縞、橫縞と云ふやうなものが、五十種類程ある。かやうに文化が進むに連れ、感覺的な要素が、非常に喧ましくなつてくる。その次は、舌覺的經濟、卽ち舌で味はふところの經濟である。實際滑稽な話であるが、煙草を吸はなくては生きられない。日本では、一年間に三億二千萬圓も吸つてゐる。實に、煙草の爲めに消費する金は大きい。日本の人達が、一年間煙草をやめたら大きいが、それでは、政府が困るだらう。小學校の經營費は、毎年議會で問題となるが、煙草の消費高の六、七割も出せばなんでもない。その、小學校の經營費以上を、煙にする經濟は、實に大きなものである。

その次は觸覺經濟である。これも又、實に、大きな經濟である。米國は、スキーに百億弗、現在の爲替で邦貨に換算して三百億圓ほど使ふ。日本でも、おそらく五億圓以上使ふと思つてゐる。

時代が、進歩すれば、消費と云ふものゝ性質が、物的傾向から、感覺的となり、意識的になる。マルクスは、あんな簡單なもので、社會經濟をやらうとしたのであるが、それは、到底出來ないことである。私は、まづ協同組合の外には、眞の經濟改造はあり得ないと思ふ。

交換を組織化し意識化するのが協同組合

消費といふものが、物的傾向から、段々、感覺經濟、刺戟經濟に移り、更に職業的、技術的經濟に進展する。意識的なるものが、都會經濟に交換するから、どうしても組織をもたなければならない。即ち、言葉を替へて言ふならば、組合を作るなら、同一體の意識でなければならない。注意は、注意、聯想は、聯想、記憶は、記憶で一つの組織體を作る必要がある。即ち、衣食住を興味、感覺、刺戟、經營、といふやうに行くのが組合運動である。故に協同組合運動は新世紀的な消費經濟でいかなければならない。資本主義といふものは、私的に、さ

う云ふ間を利用して、搾取するのであるから、寄生蟲が、母體の中に發生して、營養分を吸つてしまふ爲めに體が衰弱するのと同樣である。かういふことは、マルクス經濟學からは、見付けることは出來ない。協同組合經濟の哲學と云ふものは、經濟行動が、先にあつて、經濟理論が、後に進んだのである。英國の協同組合哲學は、協同組合運動が、先にあつて、經濟理論が、後から進んだのである。

東京のある、ある業界新聞が、私を、ひやかして、賀川豐彦は、産業組合運動に、轉向したといつたが、これは、實に、もつての外である。私は、二十年も前から、産業組合運動をやつてゐる。十數年前大阪府から、産業組合のために、私は表彰されてゐる。私は、産業組合運動に、轉向したのではない。もとから、産業組合主義者である。マルクス主義や、資本主義の餘弊と云ふものを、是正し得るものは、産業組合のほかにないと思つてゐるから、私は、二十年も前から、消費組合を作り、信用組合を作り、利用組合を作り、又質庫信用組合を作つたり、最近は、醫療組合を作つたりして苦勞してゐる。

經濟理論と組織的協同組合運動

まづ經濟理論から、考へてみたい。西洋の人は、經濟理論から考へてゐる。產業組合運動も經濟理論から來てゐる。昔の物的經濟學からいへば、人間の嗜好、人の欲望、これを人間の二つの傾向といふ。インテンション、卽ち嗜好といふものが、經濟運動に、非常に影響する。隨つて、これからの經濟行動といふものは、物的な問題でなく、人的な要素を必要とする。卽ち、人的要素と、組織的機構をもたなければならない。故に、生產、消費、信用とあらゆる方面に於いて、組織的な協同組合運動をやる外には、資本主義經濟を、是正し得る道はないと考へる。私は、經濟行動といふものは、創作的な性質を持つてゐるものと思ふ。又創作たるものは、その決定を、發表する人格的なる要素を多分にもたなければならぬ。私は、十五年前に發表した『經濟原理』に書いたことがある。『經濟は、大いに議論して、更生の經濟社會を、作つていかなければならない。さうした、經濟社會を作れば、資本主義の入つて來る道はない。』さういふ人間的な要素を持つてゐるから、人間は、發明、發見も出來るのである。プロシヤの協同組合は、非常に、苦勞して作つた。それは當然苦勞して作るべきものである。昔の簡單な自然的經濟のやうに、木の實が、畑に落ちて、芽をだしたのと違つて、時代が進んでゐるから、

發明、發見、經濟、創作、技倆を必要とする。それを、私も考へたから二十年間も、苦勞し研究してゐるのである。

交換經濟といふものは、その初期においては、半意識狀態、卽ち本能的であるから、欲しいものは買ふ、そして思はぬ病氣になる。傷つけば自分はぼんやりしてをつて、手術をしない。それは、傷ついたことを、自分自身が意識しないやうである。これと同樣に、經濟の如きも、始終、ぼんやりしてゐる。信用とか約束は、意識經濟である。そして、交換を、組識化し、意識化しようとするのが本能經濟であつて、これを意識經濟に直すことが協同組合の根本である。

經濟社會に、創設的意思を持たなければ、眞の協同社會は出來ない。マルクスの唯物經濟は、卽ち、本能經濟である。又民衆は無意識でよいといふ人があるが、私は、それは人を馬鹿にした經濟學だと思ふ。レーニンには、デモクラシーは解らない。しかし農民は、何れ意識化して來る。又、意識化してこなければ、眞の進化は望まれない。然らば、如何にすればよいか。それは、協同組合のほかに、賴るものはないといふことを、痛切に感ずるのである。

分配に關する三つの問題

今日の社會の如く、總て幼稚な、本能的な購買經濟の時代に於いては、分配が、非常に頻繁になつてゐる。富の分配なども、意識的になつて來ると、必要だけ、平等にわけようといふ氣持になる。勿論、平等にも程度がある。人間の生命は、これ皆平等である。生存權、或は、生産に關する必要品、これは平等にいかないまでも、或る程度迄、平等に近いものがある。又職業といふものは、勞働と云つてよい。職業は、誰れ彼れと云はず、一つは必ずもたなければならない。私は、職業に對して社會が保證するといふ正則を設けたい。同時に、人格の尊重も、大體平等にしなければならない。隨つて人格を作る基礎、即ち普通教育を平等にしなければならない。これ以上のこと、即ち、生産原理、勞働原理、人格權この三つのほかは、平等である必要は少しもない。誰れは何邊活動寫眞を見に行つたが、あれは何回しか行かなかつた。そんな決めを作る必要は少しもいらない。この三つの點の爲めに三つの協同施設を作ればよい。先づ第一に救濟組合を作る。これは病氣に罹つた場合とか、災厄に遭つた場合とか、或は破産に陷入つた場合とか、生命が危機に陥入つたとかいふ場合に救濟する方法を執ればよいのである。今の協同組合は、どの位の救濟施設を、持つてゐるか、それは殆んど問題にはならない。

眞に、優良なる協同組合といふものは、このやうな、內容を持つ必要がある。救濟的施設を、持たない處の、協同組合は、人間には何等必要のないもので、實に悲しむべき傾向である。今の日本の協同組合は、未だ其處まで來て居らない。救濟的意味を、持つてゐるものは、今では僅かに、醫療組合に限られてゐるけれども、將來は、是非共、我國の協同組合は、救濟的意義を多分に持つように成らなくてはならない。然らば何う云ふふうにすればよいか、方法は澤山ある。

即ち、利用、販賣、購買、信用この四つが許されてゐる處で、利益といふものを積立て、それを共同資金に廻して、救濟的方面に向け、その救濟施設の救濟的機關に利用組合を作つてほしい。

一例を擧げれば、東京市本所區に江東消費組合がある。組合員は最初六十三名で、一年間に一千八百圓儲かつた。この救濟組合の施設を力說したい。利用組合は、只今では、江東消費組合の名で利用してゐるが、今後は、産婆も雇入れて、貧乏した場合は救濟する。又、將來は、組合員の託兒場の施設までやりたいと思ふ。私は、さうした救濟的なものの外に、あらゆる保

險をやりたい。元來保險といふものは、生命保險でも、火災保險でも、その根本目的はみな救濟が目的である。それが、何時とはなしに今では、二重の營利機關になつてしまつた。これも昔の救濟本位に返へさなくてはならない。もう一度、救濟的なものになれば、生命の生存權、職業、人格尊重の三つの權利と云ふものは、生命保險、災害保險、火災保險、あらゆる保險に依つて、安全なる程度まで、充分保つことが出來る。もう一つは信用組合である。信用組合の目的は、一つに止まらない。信用組合によつて、平等が出來なくとも生存生命の平等、職業の平等、人格の平等、この三つの平等といふものを、保證し得るやうな信用組織にしたいものである。これは、今の型の信用組合では少し困難である。

獨逸の小さい、農村の町が、今から、八十年前、飢饉で困つたことがあつた。當時獨逸は、シュルツエの作つた信用組合運動が盛んであつたけれども、貧乏人を、救ふには、餘り役立なかつた。多く利用したものは利益を得たが、貧乏人は利用しないから、役立なかつた。其處でフリードリッヒ・ライハイゼンの信用組合は、ロッチデールの組合に見習つて、利益があつた場合は、これを三つにわけ、第一は積立金、第二は利子を拂ふ、第三は利用高に應じていくらで

も、必要に應じて拂ひ戻しこれを組合の一般貧乏人に、生業資金として、貸しあたへる、こうなると、組合員の中の貧乏人と金持との差は少なくなつて來る。こうして、ライハイゼンの信用組合は、公平なる立場に立つた。

獨逸は、一九一七年十一月から、革命を初めた爲め、一九二三年、即ち日本の關東大震災時分から非常に困つた。この實質上の飢饉を救つたのは、シュルツエの信用組合でなくして、ライハイゼン式産業組合であつた。一九二三年——一九三二年までの十ケ年間、ライハイゼン式産業組合を調査した處、驚く勿れ、三十億萬圓の金が預けられてゐた。こういふことは協同組合のほかには出來ない。又普通の銀行でも出來ないことである。信用組合は、シュルツエ式ではライハイゼン式の儲けをわけてやるといふことは出來ない。連帶責任のある、生存權、人格權が平等である場合に儲ける、さういふ精神が協同組合運動に喰ひ込まれて初めてなし得ることである。

協同組合社會の理想

生産、分配、消費の傾向が全部、物質及、本能的な經濟行動から救はれて、初めて意識的に

移つていくが、マルクスの唯物史觀では、眞の經濟狀態は現れない。たゞ心理的に社會的な運動と道德的訓練とをもつて助け合ふ、進んで自分の勞働と生命と人格と云ふものを、協同活動の爲めに捧げると云ふ意識に於いて、初めて、新しい經濟狀態が發生するのである。

吾々は、この復雜なる、今日の交換組織に對し、如何なる協同社會を作つていくか、それは先づ生産組織の爲めに生産組合を作る。日本では利用組合になつてゐる。さうして、養蜂、養豚、養鷄とあらゆるものを網羅し、總ての生産的方面の機關をはつきりする。又消費方面に於いては、消費組合を作る。さうしてこの消費者と生産者との連繫する、販賣組合を作つて金融市場を置き替へるところの信用組合を作る。こうすれば、今日の經濟施設に對して大體調節がとれていく。即ち、今の日本にある、利用、販賣、購買、信用の四つのほかに、生産組合、共濟組合、保險組合を作つて、大體日本に於ける否、世界に於ける組合的協同の社會といふものが完全に出來るのである。勿論これは、全國の村々、町々の人達が集まつて組合を作り、この町村の組合を單位として、郡の聯合會を作り、郡聯合會から、縣の聯合會を作り、縣の聯合會から、國家の聯合會を作り、國家聯合會が集まつて世界的の聯合會を組織すると云ふやうにや

ればよい。さうなると、日本の消費組合が米國の生産組合と連繫し、組合製絲と絹絲消費組合と連絡する。さうして軍縮會議のほかに世界の協同組合會議を開き、日本の生絲は米國でこれだけ買ふと云ふことを決め、協同組合は、それに對し、三ヶ年なら、三ヶ年間の期限を切つて、消費生産の大々的契約を締結する、さうなれば金と云ふやうな物的な貨幣を用ひなくても、取引がやれる。全く、紀元前廿世紀も前にもやつたやうな經濟のやり方である。さうなれば、貿易をしよう、貿易は古くさい、斯う云ふことは言はなくともすむ。隨つて爲替相場も決まる。

例へば、歐洲大戰當時、英國政府の金の準備高は、僅か弗にして六億弗しかなかつた。しかるに英國の爲替は下らなかつた。何故下らなかつたと云ふかと、英國は六大植民地を有し、生産と消費が完全に吊合つてゐるから、金を餘計にもたなくとも信用で運轉した。金を根本において、嗔ましく云ふことは、時代遲れの骨頂である。時代は進んでゐるけれども、こう云ふやうな進んだ經濟が出來ない時は、已むを得ず此處まで落ちて來る。

昭和二年の大恐慌のあつた時、銀行が次ぎ次ぎにと潰れていつた。さうして昭和五年とな

つて渡邊銀行が潰れた時、民衆は身震ひした。その時は、東京―大阪の小切手は通用しなかつた。殆んど現金を持つていかなくては、信用してくれなかつたが、紐育の銀行が渡した小切手はみな通用した。

日本の國内で發行した小切手は通用しないのに紐育で渡した小切手ばかりは通用した。日本の銀行は、紐育の小切手なら何處でも受け取つた。けれども協同銀行だけは、紐育の小切手でも通用しなかつた。こういふやうな誠に妙な狀態が日本に起つた。

即ち經濟は、或る時に於いては低下現象を示し、上から下へ降る時がある。それは爲替相場の如きものであつて、爲替相場は毎日一定せず變つてゐる。何故爲替は毎日相場が變るかと云へば、これは國内信用である。即ち國内信用の上に外國爲替が乘つかつてゐるからである。

吾々人間には『創作力』『保存力』『補充力』『想定力』この四つが生命である。即ち日本の人口はどの位增加するか、日本には病院がいくつあるか、又日本には、どういふ機械が發明されたか、日本の動力、民力はどの位の能力をもつてゐるか、或は勞働力の方面にストライキはないか、もしストライキがあれば、爲替相場はすぐ下る。

例へば、英國が一九二〇年に大きなゼネストをやつたために、百億圓の損害を蒙むつた。これは石炭、鑛物、鐵道運賃この三つの革命的ストライキをやつたために爲替はパット下つた。

マルクスは市場を唯物史觀的に解釋ができるといふが、私はさう思はない。私はむしろ心理的存在と思ふ。それは、市場、交通、通信といふやうなものが、民族精神を基礎にして、民族心理に影響するからである。感情が交換の基礎になつてゐるといふことを考へて見る、假に一つのデパートがあるとする、吾々は、此のデパートで品物を買つてよいが、賣子が癪に障はるから買はないと云ふことになると、デパートは、そのために營業が立たずに潰れることがある。そこが人間の感情の面白い處である。又社會には成長力がある。自然的成長、人爲的成長、これ即ち進化である。此の成長力により、人間の職業能率は非常に違ふ。支那人の勞働能率は、日本人に比較すると驚く程違ふ。又英國、獨逸あたりの職工の能率も大變違つてゐる。

私は、米國の大きい鐵道會社の工場を調査したことがあるが、それは實に進んでゐる。

又オーストラリヤの職工さんは、實に驚くほど働く。日本ではベスメル（時計のゼンマイ）と云ふものがどうしても出來ない。機械の發明は、職工が機械と共に成長することである。即

ちそれは、職工が、此の機械はこうであるから、こうすれば新しく、然も、能率がよくなると云ふことを考案するのが發明と發見である。此の點は、マルクス理論と全然反對である。

こうして爲替相場は、色々に變動する。即ちこの未來の創造、現在の保存、過去の修繕及び規定の四要素に他の七原則を乘じた、廿八の要素によつてパット爲替が騰る。又特に影響するものが二つある。それは、市場の關係と法律關係である。

例へば、政變があつて、內閣が更迭するとか、戰爭が起るとかいふ場合である。

假りに、今まで政友內閣が放漫政策をとつて來たが遂ひに崩壞して、今度緊縮政策を揭げた濱口內閣が組織されゝば、すぐ爲替は暴落したと同じやうに、米國のフウバー大統領が落選して、ルーズヴエルトが大統領に當選しただけでも、新しい政策が行はれるといふので爲替市場はパット大變動をみせた。又フウーバが去つた後、ルーズヴエルト新大統領が就任するといふので、四日間といふものは、各市場共大變化があつた。斯樣に經濟行動といふものは非常に、心理的な要素を持つて居るから、交換運動が驚く程、昔のマルクスが想像した以上に、心理的な情勢をもつてゐる。

即ち、生産者と消費者との間に大恐慌があつた場合に三つのことをする。

第一には、不合理な解合をする。これは西洋流で餘り深く知らないが、日本に解合のあつたのは、米の取引所である。大正九年には、モスリン取引所が最初何億圓かの金を解合つてしまつた。

第二には、整理的に切り捨てをするが、これは吾々の相像もつかないことをする。

さうして第三には合理化といふのを初める。

解合、整理、合理化、こういふ超商業的な而も心理的なことを案出して來たのが今日の心理的經濟學、即ち意識的經濟學である。

其處で約束的な方面は何處にその基準を置いてあるかと云へば、玆に簿記と稱する帳面が一冊ある。もう使ふものは、使つてしまつたから、使つただけ帳簿に記錄させる。それにはもう交換價値はない。銀行、商店、或は協同組合としても、帳簿があつて、帳簿の上には貸方、借方だけの二つあつて、その間にはなんにも無い。帳簿があるだけだ。支那人は簿記を(流水簿)といつてゐる。

即ち、私が或る砂糖屋で砂糖を五斤なめた。何故なめたかといふと、私は刺戟の爲めになめた、ところがまだ金を支拂つてゐない。此の場合、砂糖會社は私に、五斤何十錢かの砂糖を與へたといふことだけしか記錄がない。

經濟といふものは、こんなものである。これが進んで行けば大きな損害である。或は何千萬圓或は何億萬圓貸したのがもう記錄だけしか殘らない。さうなつて來ると、その簿記といふものが、非常に大きな役割となる。

金融といふものは、記錄だけて結構である。即ち、精神的方面、信用的方面から、完全に統制されゝば記錄だけでも通貨融通がきく。デンマークの如きは傳票一つで完全に旅行が出來る。宿屋へ泊つた場合、私は何處其處の何某といつて、信用組合中央金庫の傳票を渡せば、それだけで宿屋へ泊れるのである。假りに、一晩の宿賃が五圓であつた場合は、宿屋に對し五圓の傳票を切る。すると、その傳票が宿屋から組合に廻はり、産業組合から中央金庫に廻はされる。さうすると、中央金庫は直ちにその傳票の相當額を帳簿に記錄してとつて置く、その記錄が即ち金で宿賃を拂つたことを證明する。さうして四ケ月目にその記錄だけ私の方へ廻はして

くれる。それでよいのである。今頃、金、金、金といふことは間違つてゐる。實際、面倒な金など使はず記錄だけで結構である。其處まで行くには、人間的意識といふものがもつと發達しなければならぬ。

日本の國は、餘り小切手帳を利用しないが、米國は五十弗から小切手をくれる。デンマークは小切手帳はいらない。その代り傳票を使ふ。

私は、まだ張學良が滿洲にゐた頃、張學良の經營してゐる奉天の東北大學の學生が、强ひて奉天に來て話をして呉れといふので、私は奉天の青年會館まで、出掛けて行つて講演をしたことがあつた。私は、その時いろ〳〵な社會問題に就いて說明した。その時或る大學生が私に質問して曰く『今日の貨幣制度、即ち通貨制度をなくする制度はないか』これに對して、私は『貨幣制度を徹廢することは容易である。貨幣制度をなくすには、二つの方法がある。一つは、まづ進んだ高度の協同組合を組織することである。それは、デンマークのそれのやうな組織を作ることである。もう一つは、全然、諸君が野蠻人になりきつてしまふことである。この二つの方法の一つを選べばよい』と云ふた。すると、大學生は、協同組合のことではなく、

レーニン流の暴力をもつて、全部の産業制度を破壞し、以つて貨幣制度を講じろ、さう云つてくれると思つたらしい。

然し、私はそれを云はなかつたから、大學生は皆な落膽した樣であつたが、若しそれをやれば人間を奴隷化するやうなものである。

ロシヤは、暴力革命をやつてから、十數年間困つた。その原因は、産業制度をやり違へたからである。理想的社會といふものは、人々が協同的に高度の組合を作れば比較的完全なる貨幣制度の撤廢が出來るが、暴力や野蠻的な物々交換的な方法をとつて、理想的な時代が來るといふことを考へるのは非常な間違ひである。

故に私は、暴力革命により、貨幣制度を撤廢したとしても、少しも羨やむに足らない。それは原始的文明に歸るだけで、要するに、奴隷制度に返るだけである。

こういふ風に考へると、私どもの交換制度といふものは、全廢する必要がない。

交換制度があつても、消費價値が發生して、搾取さへしなければよいのである。隨つて、交換といふことが文明の進歩である。

ロシヤは産業革命によつて、この交換制度を撤廢したから、今困つてゐるのである。

斯樣に考へると、協同組合のみが、眞の理想的、意識的經濟社會に可能性がある。

日本の協同組合は協同意識が不足である

日本の協同組合は、數は多いが、まだ駄目だ、殘念ながら、今の協同組合では足らない。

何故足らないかと云ふと、その理由は、日本の協同組合といふものはまだ意識が足らない。

然らばどういふ意識が足らないかといふと、卽ち、協同意識が足らない。

マルクスの階級意識のやうに、どいつも、こいつも癪に障つたから、殺して終へ、下の奴は、上のものに反抗するから、殺して終へといふやうな考へでは、到底駄目である。

日本人で銀行に預金しないものはない。銀行預金は利子をとつてゐる。二錢でも、三錢でも利子をとるといふことは、それだけ搾取してゐるといふことである。

要するに、資本家といふ大金持は、大きい搾取をやり、吾々のやうな小さな預金者は、小さい搾取をしてゐる。其處が徹底しない點であつて、今日の資本主義制度といふものは、上にも、下にも、もう全く、完全であつて、吾々が少しでも多く金を持つと必ずこれを銀行へ持つて行

つて預金する。こういふ考へを持つてゐては到底駄目だ。

吾々は徹底的に、今日の制度を替へて、上も、下も、おしなべて全意識的に覺醒するやうな時代を作らなければならない。

その意識の覺醒が、日本人としても、國家としても、それは世界全人類に對する、幸福を意識するものである。こういふ考へを持つならば、金持は、これは少し餘計に持ち過ぎてゐるから、組合に投資しようといふやうに、全意識的に意識するならば、全部が幸福になれることは受け合である。

子供は子供で、貧富の別なく全部教育して呉れるし、學校へ行けば、教育保險があつて大學までやつて呉れる。こうなつてくれば、社會の信用といふものは一層大きくなつてくるから餘分に、富を持つ必要がなくなつて來る。

隨つて、餘分に富を持つてゐても、致方がないから、富を持つてゐるものは、みんな出してしまふ。又提供しても少しも差支ないのである。

協同組合の中には、病氣になれば、醫療組合がある。

又、夏になつたが蚊張がないと云へば、保險組合があつて、必要な蚊張を提供してくれる。組合員は毎月卅錢位づゝ組合に納めれば、七十錢位になつて戻つてくるから、勞働階級は少しも困らない。

所謂、進んだ、失業保險もあれば救濟保險もあるといふやうに、一切の協同施設があれば、もう衣食住は安泰である。

資本主義はカタツムリ經濟である

資本主義と云ふものは、資本家自身にとつても、憐れむべき、實に危險な、不安定なものである。

協同組合によれば、かう云ふ苦勞は少しもいらないと云ふことが、意識されて居りながら、それが出來ないと云ふのは、人間も實に憐れむべき動物である。

これは本能的な昔ながらの、資本主義制度に縛られてゐるものであつて、蝸牛のやうな生活をしてゐる蝸牛經濟である。即ち、景氣のよい時は、角をだし、景氣の惡い時は角をひつこめる、これが蝸牛經濟學である。かう云ふ狀態では、人間は幸福になれない。

寧ろ、進んで新しい協同組合意識が、全意識的になり、世界全體の經濟狀態が協同組合組織になつてくれば、世界の平和は保證出來る。其處まで進むのが私の希望である。

然も、これは、唯物的思想では出來ない。精神的に相助け合ふと云ふ、協同精神と人格的修養がなくては出來ない。

今の經濟といふものは、非常にをかしな經濟である。販賣する時には、賣る人間と買ふ人間と話をすればよいのであるが、今の社會に於いてはそれだけではすまない。最初は必ず何處かの料理屋の日本間で酒を飲ませ、煙草を吸ひ、御馳走を出して食慾を進め、藝妓を揚げ、唄をうたひ、最後に妙な女を抱かせる。かうしなければ大きな取引は纏らないからして、みなこれをする。

大正八年頃、某豪商にはこうした取引をやるお抱への料理屋がいくつもあつた。今でもある。藝妓や娼妓が何故八萬人もゐるかと云ふと、これは殆んど取引の關係である。商賣人のゐる處には、必ず遊廓や大きな料理屋がある。

こんな無駄な經濟があるものか。又周旋の爲めに、番頭が店の金を使ひ込んでしまふ。後に

なつて大きな穴を開けたことが判ると、刑事が來て、青くなつてゐる番頭を警察署へ連れて行く、實に妙な經濟である。此の場合、上の方に、組合組織の方法を講じて行けば、世界の戰爭をなくするやうな經濟組織は、何時でも出來る。

協同組織による農村經濟の建直し

私は、世界を一つの協同組合經濟にする爲めに、あらゆる無用なる經濟はこれを破壞して、一目散に、世界の經濟を建て直す處の、協同組合經濟を奬勵したい。日本の經濟、殊に、農村經濟を、もう一度堅實なる經濟に建て直す爲めに、獅子奮迅の努力を拂はなければならない。それは、酒を飲み、煙草を吸つて、浪費してゐる經濟を、利用すれば必ず出來る。卽ち、我國の一萬四千に達する協同組合、一萬貳千の農村中、いまだ醫師なき村が今日三千二百三十一もある。實に悲慘なものである。一番多いのは福島縣の三百ヶ村、岩手縣の二百ヶ村でその不便、悲慘なことは想像に難くない。

農村の協同組合組織が、生産、消費、販賣、信用、救濟、保險に、もう少し組合運動を盛んにして、農村の消費する肥料だけでも全部中央聯合會と關係してやり、又健康保險の如きも、

國家が保證してやる、かうすれば、かの醫師なき村の如きは、直ちに、更生せしめることが出來る。

現在の日本の國の欠陷は、確りした生産組合組織がないことである。其處で、我國の農村の販賣組合であるが、販賣組合に、賣る商品がない場合は、まづ都會の人が買つてくれるやうな物を村で、生産する組合を作らなくてはならない。それには色々のものがある。

機械で作れるやうな物は、幾らでも作れるから、作つても仕方がない。まづ機械で生産出來ないものを作る。即ち動物のやうなものは機械で出來ない。又豚を機械で作れといつてもこれは生産出來ない。隨つて、農村に於いて、これからはどうしても有畜農業をやらなくてはならないといふことが重點になつて來る。

植物的なものは機械で出來るが、動物的なものは機械で出來ない。其處で、有畜農業、即ち、牛、山羊、羊、豚、馬、兎、蜂、鯉、その他色々な生産組合を澤山作らなくてはならない。協同組合なら必ず出來る。が、今のやうに、一人一人の人間がやるのであつたなら到底出來ない。又智識がなくては出來ない。

組合運動は、少なくとも、五人か十人位の本當に腹の合ふ同志が集まらなければ出來ない。『あの奴が、組合に入るならば、俺はどうも癪に障るから厭だ』實際、かう云ふ感情があつたなら組合運動は駄目だ。どんなに自分の癪に障はるものでも組合にお入りなさいと云ふ風でなくては駄目である。

協同組合運動は全意識愛の發露である

愛にも三種類ある。無意識的に、自分の生命を守る『自愛』と他人を少し可愛がつてゐると云ふやうな、『半意識的な本能愛』(今日の愛といふものは此の半意識的本能愛が大部分を占めてゐる)と、しかし、自分が目覺めて、自分は損しても、人を助けて行かうと云ふ『全意識的な愛』と此の三つがある。

ボルシエヴヰキの運動のやうに、自分の階級を愛し、他のものは顧みない。

然し殺されたならば、殺された子供は、決して、殺されたことを忘れない、あの左翼のやつてゐる本能的な、標準を基礎とする自分の階級だけで團結しよう、他のものは、皆な殺してやらうと云ふやうな、階級意識のみで、階級的組合を作れば、これは、全人類を不幸に導くもの

である。何故ならば、前にも言つた通り、生産者の數は總人口の二割五分しかない。即ち二十五パーセントで後の七十五パーセントは子供か、老人か、病人か、少し低能か、或は生理的に、心理的に、道德的に、足らないものである。これは、千人の中、四割は子供、百人は老人、四十人は病人である。又二十人は低能である。三人は淺學であり、十八人位は毎年死んで行く。

簡單に言へば、實際働いてゐるものは、約二十五パーセント、これを考へると意味が深い。お互ひに、助け合つて行かうといふ意味に於いて協同組合を作ろ、そこに必ず人道的な精神を發揮し得られるのであつて、又それが協同組合哲學の、根本的なものである。

レーニンも矢張り職工を解雇してゐる。全道德的に於いて、レーニンは決して純潔ではない。矢張り、純潔な理想を適用するやうに精神をもたなければ、幸福な經濟を行ふことは出來ない。

幾ら、本能的だからと云つて、酒を飲めば、低能兒が生れる。何れにしても總て、純潔なる運動と禁酒運動が併行してこなければ、何時も、低能兒がふえるから、結局カタツムリが出來あがる。

資本主義經濟は所謂低能兒經濟である。例へば、家の子供は社會の役に立たないから、親はその子供の前途のことを考へて、財産を遺して置かないと外に養つてくれる人はないから、親はその子供の爲めに、財産をなくさないように守つてゐる。

又、金持の伜が親から讓られた財産をすつかり遊蕩に費やして、無一文になつた爲めに生活に困る。又どこの會社へ行つても使つてくれない。

この資本主義制度は、確かに、低能兒經濟である。故に、純潔なる、道德的基礎により、協同手段に向つて、發展出來ない。

唯物的なる共産主義と云ふものは、表面は美しいが、段々赤色化して來るから必ず崩壞する。隨つて、さう云ふ考へを持つてゐたならば、理想的協同社會は出來ないのである。

かう考へると、私は、どうしても農村に於ける協同組合運動は、精神的、人格的なる運動、理想主義の運動と一致しなくてはならぬと思ふ。すべての唯物的な、破壞的な、革命的な運動は駄目である。

先づ農村は、分業的な組織をもつて、土地利用組合を作ろ。或は又、消費組合を作ろ、と云

ふやうに、確かり、大地を固く踏みしめて、進まなければならぬ。

經濟行動は、理窟とは違ふ。人間の消費と云ふものは、大體、衣食住から、刺戟經濟に、刺戟經濟から、意識經濟に移つて來るやうに、相當深い方面に向つて、進んで來る。意識經濟を厚くして行くには、意識に覺醒しなくてはならぬ。

協同經濟運動は、意識經濟であつて、暴力や脅迫によつて出來るものではない。

我國でも意識的の思想が進んで來たが、まだ全意識的なものは少數であるから、此の全意識的なものをもつと普遍的に押し擴げて行く必要がある。

要するに、吾々全部が意識化して、相助け合ひ、專制のない好意的な時代を作つていかうと云ふ、意識化の上に、協同組合をのつけて行かねばならぬ。

日本のやうに、普通教育が一般化してゐる國に於いては、かう云ふ經濟は出來るのである。

ロシヤのやうな教育の普及せぬ半意識的國家に於いては、レーニンのやうな壓制も滿足されるのである。

ロシヤはそれでよいが、ロシヤのやうな壓制を日本に持つてこられたら非常な迷惑である

例へばロシヤでは、精神的な人間の就業を否定する。共産主義唯物的でなければいけないと云ふ、實に重壓的な考へである。

私は、勞働組合運動もやり又無産政黨も長くやつて來たが、實際、資本主義の中にも整理があれば、合理化もあり、大資本主義の人は、却つて協同組合と同じやうな經營をして行く、即ち特約組合の養蠶家をカムフラージュしてゐる如きである。其處でもう一歩進んで、さう云ふ資本主義のカムフラージュを突き拔けて、協同社會建設に向つて、突進しなければならぬ。

日本の協同組合が發達しないのは、今迄、協同組合が、資本主義に對し遠慮し過ぎてゐたからである。そして、無産階級には、非常に矛盾した法律が多く出來てゐる。何故さうした法律が出來たかと云へば、個人々々に經營してゐる資本家の爲めに、消費組合運動がより多く出來ると、資本家の利益が減るから、これを保護する爲めに登錄制度をとつて、法人組織とし、實行組合の如きも七日以内に屆け出ないと五圓の罰金に處すと云ふ法律が生れた。

私は、實にうまく出來てゐると思ふ。又政黨でも、何んでも、所謂恐慌といふものが來ると、政府は五億五千萬圓といふ莫大なる金を資本家に融通して、協同組合を破壞し、資本家を

擁護しようとするから、其處で議會は大變喧ましいのである。然し資本主義と協同組合が競爭することは、これはやむを得ないことである。

政府の保護と云ふものは、資本主義を基礎とする經濟學に向つて進んでゐる。それでもう古い考への年寄には用がない、まづ青年が奮起しなければならない。

たゞ、青年の意氣と元氣と經濟的努力があつたならば目的を達することが出來る。即ち、青年が兵卒となつて、獻身的努分と義勇公に奉ずる愛國的精神をもつて、あらゆる困難と戰ふ。此の氣力と覺悟がなくては、我國の非常時農村を救ふことは出來ない。

故に、協同組合運動は、精神的意識をもたないものには出來ない。マルクスの階級意識は、協同組合には用をなさない。全階級的の協同意識、即ち、所謂聖雄ガンヂーの靈魂力を重んじられない人は、協同組合運動は出來ない。

協同組合は唯心的經濟史觀の結論である

産業組合の人達は自分だけ儲ければよいといふやうな、そんな貪慾で産業組合を作るならば、そんなものは發展しない。精神修養は精神修養で金儲けは金儲けだといふ考へで協同組合

を作るならば、これは協同組合ではない。協同組合は儲けんが爲めに作るのではない。即ち、日本の窮狀を救ふ爲め、都市、農村の聯絡を公正なる價格によつて、うまく、資本を收積せず、全日本を改良する、その爲めに、此の運動をするのであるから、精神主義の組識的經濟的な見地、即ち我が理想とする協同組合であるといふことを意識する必要がある。

青年の進むべき道は決つてゐる。青年は誇大なる共産主義に迷はず、産業組合を中心として意識運動の上に、新しき協同組合を盛り立てるやう努力しなければならない。

これは、私が唯物史觀に對し、唯心的經濟史觀の立場から、その結論として協同組合を主張する理由である。

第三章　兄弟愛意識の發展として見たる産業組合

混沌たる世界

世界は今や混沌としてゐる。飛行機飛び、ラヂオは唸り、テレヴヰジョンは人智の極致を思はせる迄に發達した。それだのに、何故、世界はかくの如く貧窮と不安に戰かなければならないか？

現代の貧乏は、無い故の貧乏ではない。有り餘る爲めの貧乏である。過剰生産と、過剰機械と、過剰勞力と、過剰知識階級の惱みである。無いからでは無い。有り餘つて困つてゐるのである。

而も、富は少數者に集中し、社會の大衆は失業と、生活不安と、從屬性と不信用の世界に蹴落され、永遠に浮び上り得ない叫喚の聲を放つてゐる。

自由放任の市場は、忽ち修羅の巷と代り、幾千萬の失業者は、食糧倉庫を眼の前に見乍ら飢えてゐる。

世界に、キリストの名を呼ぶものが六億に近い。そしてキリスト教國と呼ばれるものは、凡て文明國に屬してゐる。それにも拘らず、その文明的キリスト教國に戰爭が相續き、失業、恐慌が絶えず、社會を脅かしてゐるのは、何故であるか？

それは云ふまでも無く、現代のキリスト教が、全生活の全福音で無いからである。

そこで唯物的共産主義者は、キリスト教の賴む可からざるを叫んで、宗教は阿片なりと主張する。そして彼等は暴力と生産者階級の專制を叫んで、瞬間的の暴力革命によつて、恒久の社會組織を捷ち得んとしてゐる。

ロシアはそれを經驗してみた。然し、その爲めに數百萬の人命を犧牲にして、漸く捷ち得たものは組合國家への道程であつて、共産社會へはまだ〳〵遠い。而も、そこでは思想の自由も、言論の自由も、職業選擇の自由も、投票の自由も、信仰の自由も、移動の自由も與へられ無いのみならず、革命の最後に於いては交易の自由さへ與へられなかつた。その爲め産業は麻痺し、國民は日常生活の物資にすら缺乏を感じた位であつた。

英國の勞働黨は必ずしもマルクス主義的革命を理想にはしてゐなかつた。然し一九二五年に

ラムゼー・マクドナルドが失脚するまで、勞働黨内閣は大英帝國の政權を握り乍ら、失業者數を減退せしめることも出來ず、勞働法政上、何等見る可きものがなかつた。

これは獨逸社會民主黨の失脚に就て見るも同じことが云へる。エヴエルトを大統領とする獨逸社會黨は、一九一八年の革命により全獨逸の民衆を支配し得る地位に置かれたにかゝはらず、殆ど、何等見る可き産業革命を爲し遂げ得ずして、失脚してしまつた。而も、勞働者中心の政權を數年間も握り得たのであるから、失業者の數位は減少させ得るかと思つたが、それさへ爲し得なかつたところを見ると、生産者のみを中心とする唯物的社會主義も、經濟的に社會を改造する力は無いと考へなければならない。

資本主義社會の悲哀

これを見れば、教條的キリスト教も社會不安を除く力を持たず、唯物的社會主義も經濟革命を完成し得る力を持つてゐないと云ふことが判る。

私は、資本主義の復興が、永遠の社會組織に役立たないことを此處に記述する迄もない。それは、自由競爭の上に立てられてゐると云ふ特徴もあるが、(1)その半面には搾取制度(Exploi-

tation)を隨伴し、(2)少數者への資本の集積(Accumulation of capital)が可能となり、有閑階級を社會の上層に形成させ、(3)それ等の勢力は資本と勞力を少數者に集中させ(Concentration of capital)、(4)遂には階級爭鬪を引き起す結果となり、無産者は出現し、恐慌と失業は必然的となり、唯物的共産主義はその結果として現れることとなつた。

然し、私は過去の悲哀をたゞ反復して、それを呪詛することだけで止ることを望まない。私は資本主義が失敗し、教條的キリスト教がもて餘し、唯物共産主義及社會黨が爲し遂げ得ない、眞の社會改造への進路を探し出さなければならぬ。

唯物經濟學の無能

然らば、新しき社會への改造の道はあるか？　私は『ある』と答へる。然し、それは、舊式なアダム・スミス流の經濟學でも駄目だし、さればと云つて、カール・マルクスや、レニンの唯物的辨證法(Materialistic dialectics)の基礎の上に載せられた唯物史觀的經濟學でも駄目である。勿論、全く經濟倫理學の範疇を持たない教條的宗教でも不可能であることは云ふまでも無い。

然らば如何にして、また何處に、その解決を發見すべきであるか？　私は、それを人間意識を基礎にしたる新しき精神經濟學の上に求む可きであると斷言する。

アダム・スミスが、宗教と經濟學を分離させたのは成功のやうに見えた。然し、それは一時的な現象であつて、人間の社會意識が、經濟意識と、宗教意識の二つに分裂した時に起り得た現象であつたのだ。細胞は分裂によつて成長する。然し、最後は必ず全體の一部分として働く。然るに、十九世紀社會に於いて、宗教と、經濟が全く背反し、殆ど二元的生活の二半面を表出したかの如く考へられた時代に於いては、經濟學と、宗教學とは全く別個の主題を取扱ふものとして少しも差支えが無かつた。然し、分科も我程度以上は害になる。二十世紀に於いて我々はその害毒を既に充分見せ付けられた。

では、過去の經濟學說の誤謬は何處にあつたか？　それは經濟と云ふものが、人間意識より獨立した記載科學（Descriptive science）として取扱ひ得たと思ひ込んでゐる矛盾である。アダム・スミスの如きは、經濟は人爲的支配より自然的支配をより多く受けると考へて、人爲的干渉を極度にまで恐れてゐた程、自然主義的傾向が强くあつた。

マルクスは方法論に於いて、アダム・スミス流の行き方をなし、經濟學を自然科學的に取扱ひ得ると考へ、凡てを唯物論的決定論（Materialistic determinism）によつて分析し得ると考へた程奇妙な說き方をした。

そして、十九世紀から、二十世紀初頭にかけて、世界のキリスト教會が、これらに對して根本的反對論を唱へ得なかつたと云ふことは、又悲しいことであると云はねばならぬ。然し、是も無理の無い話で、この期間に於いて、神學者も、經濟學は、自然科學的領域に捨てゝ置いて差支へないと考へたものである。

經濟心理學的方法論

然し經濟社會が進步し發展すると共に、經濟學が、結局、自然科學的に取扱はれる可きもので無くして、價値科學の領域に屬するものであることが段々了解されるに至つたのである。

だが、衣食住に關する價値行爲は、意識の目覺めの非常に鈍い本能行爲に屬するためにそれが一種の心理的必然性を持ち、自然界の必然的變轉と相俟つて、自然科學的取扱ひを爲し得ると考へたものも多數あるのである。

然し、經濟社會に於いて、本能經濟より理智經濟に、習性經濟より發明經濟に、放任經濟より統制經濟に移りつゝある今日に於いては、もはや、唯物論的經濟學は、心理學的經濟學に地位を讓らねばならない。

マルクスは一八四八年、彼の書いた共産黨宣言の中に、一つの時代の文化はその時代の唯物的生産の形式に從つて、主として決定せられると書いてゐる。そして彼は、その唯物的生産の形式が、人間の意識の目覺めに依つて齎される、心理的技能の進歩に依つて變化する事を、全く無視してゐる。今日に於いては、唯物的生産形式そのものが、全く意識的目覺めの、水準の差に依つて異る事がわかつて來た。

オーストラリヤの、ドラビジアン系黑人は、人間生活に必要なる機具及必要品の技術すらを全く忘れてしまつた。この忘却の心理が、濠洲土人の間に建築が發達せず、織物が全然無かつた理由である。

或る民族は、團結力を持たない爲めに株式會社をすらよう結成しないで居る。況んや先物取引の株式取引所、不動産取引所、證券取引所等の如き心理的組立ての必要なるものは、互助意

識の稍々發達したる社會に於いてゞなければ決して成立しない經濟行爲である。

感覺經濟と意識經濟

經濟慾望が、心理的なものである事は、正統經濟學に於いても、マルクス派經濟學に於いても認めてゐる。然し經濟行爲そのものが益々心理的組立てを以て、進歩すると云ふ事を彼等は充分意識してゐない。そこに今日の經濟が、失業期や、恐慌期に於いて無能な理由がある。

人間の慾望は、原始的な、衣食住に關する本能的欲求より更に進んでは感覺本能の經濟に移る。こゝに於いては視覺、聽覺、嗅覺、味覺、觸覺等の經濟より、運動、色慾、寒溫の調節、苦痛脫却の經濟に迄發展してゆく。

眼に對しては、各種の眼鏡、寫眞、寫眞術、活動寫眞、各種の染料等が感覺經濟として文明社會を賑はし、ラヂオ、蓄音機、ピアノ、オルガン其他の樂器が、聽覺的文化經濟を賑はす。各種の香水、煙草、抹香等が、嗅覺經濟として文化社會に現れてゐる事は誰しも氣が付く事である。

味覺の經濟に就いても同じ事が云へる。各種の調味料、酒、サイダー等の味覺を刺戟する物

品及びそれに伴ふ料理法が、文化社會を賑はしてゐる事は全く驚嘆すべき事である。日本に於ては、陸海軍に使用する一年間の豫算より酒に使ふ費用が毎年五〇パーセント程多い。

觸覺が感覺經濟に重大な關係を持つてゐる事を人は餘り氣がつかないが、肌ざわり良き絹物が木綿より好まれ、軟かき百二十番手の羊毛が六十番手の羊毛より高く賣れる理由は觸覺經濟より來てゐると考へなければならぬ。

又スポーツに使ふ金、放蕩に使はれる金は想像以上に大きいものである。日本に於いて公娼、私娼、カフエーの女給に落ちる金が毎年十億圓を下らないと推定される。日本人が一年間に食ふ米は約十五億圓であるから、如何に放蕩の費用が多額に上るかゞわかる。

感覺經濟より更に進んで、人間の意識が抽象的に進んで來れば來る程、教育經濟の如き知識に關する經濟學が發達して來る。又注意力を喚起する爲めには、廣告心理が發達し、此の爲めに幾億圓の金が消費される。聯想の爲めには、記念品や銅像や、各種メタルが作られる。

判斷の爲めに判檢事が現れ、辯護士の職業迄が現れて來る。先物取引が盛んになると共に、推理力が必要となり、株式取引所員が巨萬の富を稼ぐ樣になる。

又美的感情の爲めには藝術的職業が現れ、音樂家、彫刻家、俳優、和歌、詩人等の職業が社會に現れて來る。それと共に智的要求を滿足させる爲めに、新聞、雜誌が出現し、それを職業とする記者、著述家が現れ、各種の學術研究所が設立され、發明を職業的にする者が、多額の俸給を喰んで、智的職業に從事する。

又意志訓練の爲めに各種の修養團が組織せられ、修養書類が賣買せられる。又形而上的心靈科學の發達に依つてこれを職業にする者さえ現れて來た。英國に於いて心靈協會が五百以上もあると云はれてゐる。更に神聖なる生活を我々に教へる爲めの宗教團體が生れ、その爲めに米國だけでも七十億弗に近い投資が教會に捧げられてゐると云ふ事を我々は知つてゐる。又年年、宗教の爲めに捧げられる金は少い額ではない。その爲めに宗教教師はこれを職業となし、主として人間の意識を神に目覺めしむる爲めに努力してゐる。

かく考へて來ると、この高度の意識經濟は低き生理經濟とは全く內容を異にしてゐる。然し人間の能力が、發達すればする程、此の方面に進歩する事は何人でも氣の付く事である。

唯物史觀を考へるものでも、社會主義或は共產主義を主張する場合に、これを唯物的必然と

のみ考へないで、或種の選擇を得た主義と云ふものを主張する所をみれば、主義經濟と云ふものは、生理經濟でなくして、意識經濟に屬するものである事に氣が付くであらう。

七種の價値要素

この生理的本能經濟より感覺的心理經濟へ發展したものが、更に意識的心理經濟へのびて行く結果、我々は七つの價値の水準を考へなければならない。卽ち生理的經濟に於いては、生命保存の價値行動が、その基調をなして居る。

生命保存の慾望のために、衣食住の問題が現れ、衞生設備が必要となり、戰爭の危險を防ぐに各種の防備が企てられる。

かうした生命保全の價値行動から、筋肉勞動の價値決定が爲される。この生命價値と勞働價値は、主として生理的のエネルギーを基礎にして考へて差つかえない。で、經濟を、この二つの領域にのみ考へるならば、稍自然主義的に考へる事も出來る。勿論この二つの價値活動に於いても、心理的意識活動が大なる力を持てゐる事は忘れてはならない。例へば、强制勞働が、自由勞働に比べて、その能率に於いて三倍以上も違ふと云ふ事は誰しも認めてゐる。然し私は

その事をくわしくこゝでは論議しない。

感覺的本能經濟に到つて、初期の自足經濟から稍進んだ交換經濟に進み、人間技能の優劣は、自然界に於ける各種の變異差と相結んで、交換をやむなくせしむる。で、經濟と云ふことは、殆んど交換を基礎にしてのみ考へられる樣になつて來た。

その上自然界には、成長の法則がある。一粒の麥が、收穫期に於いては、百五十粒に成長し、一番の鷄が一年間に百數十個の卵を生む。牛も馬も、羊も、山羊も、そして人間の人口迄も增加して行く。これは人間の勤勞に依つて更に倍加せられ、人間の互助組織に依つて、質と量に於ける生產の增大が、擴げられて行く。

それに加へて、機械力の使用は、十八世紀迄は殆んど想像出來なかつた人間活動の能率を增大し、生產額を幾百倍、又幾千倍增す事になつた。

變化の容易なる事と、成長の容易なる事が、資本主義文化の特色であつた。然し、唯單に變化し成長しても、これを人間の個性から見た場合に、必ずしもその變化と成長が愉快でない場合がある。一人の藝術家は、交換市場に於いては、何等の價値もなく、又機械的生產の世界に

於いて、何の役にも立たない。彼に繪を畫かせれば、人並以上に優れてゐる。そこで第五の價値水準が現れて來る。即ち、意識經濟に於ける選擇經濟の出現である。こゝに於いては、技術選擇、職業選擇が能率經濟を成立せしむるに至つた。生理的差等、感覺的差等、教育の差等、心理的差等が技術、職業、能率の上に著しき差等を出現し、近代都市に於ける職業經濟をして一層複雜なるものにならしめた。

近代都市經濟に於ける失業問題が、唯物論的社會主義に依つてなか〳〵解決し得ないのは、近代文明に於ける、職業經濟と云ふものが、唯物的に決定せられないで、心理的に決定せられてゐるからである。即ちこの心理的意識經濟に、發達して來れば、古き時代の物品經濟學は、何等役に立たない。況んや、この心理的職業經濟を基礎にして發達した心理社會の、法的社會經濟（Legislative Social Economy）は初期の物的經濟學に於いては全く豫期し得ないものである。今日の商法、手形法、銀行法、組合法、勞働法、其他各種の社會的、經濟的法律は、法律より生ずる利權を伴ひ、利權は社會意識を基礎にして發達し、こゝに、抽象的な利權經濟が生れ出づる事になる。然し意識經濟を取扱ふ者にとつては、この法的社會經濟程大切なものはな

い。こゝに於いて政治と經濟とが相結び、權力と價値行動とが複雜なる交渉を保つ樣になる。

然し、法的社會經濟は、人生目的を明確に意識する價値生活とは、平面が異つてゐる。目的價値の變化は文化の樣式を變へて行く。或る時には、藝術が重んぜられる時があり、或る時には智的に走る時代があり、又或る時には意志訓練を重んずる倫理的時代がある。人間の注意と判斷が、普遍的に焦點を持ち得ない爲めに、文化に流行性が現れて來る。これは宗教の發達に於いても同じ事が云へる。全人的に目覺める時には、その時代は非常に宗教的であり、然らざる場合に於いては、宗教的でなくなる。從つてその時代時代に於いて、文化經濟の型が異つて來る。

以上私は、生命價値、勞力價値、變化價値、成長價値、選擇價値、法的價値、目的價値の七つの價値水準を、人間意識の發達に從つて說明して來た。忘れてならない事は、この七つの價値法則は、マルクスが云ふ唯物的辨證法に依つて支配を受けない事である。この七つの價値は、客觀的世界と主觀的世界とを結ぶ、七つのトンネルの樣なものである。

精神價値と經濟價値の一致

我々は、物的世界に於いても、生命の法則と、エネルギーの法則と、變化と成長と選擇と、法則と、目的性の存在する事を疑ふわけにはゆかない。チャールス・ダーヴヰンが說いた進化論の世界は、この七つの價値法則を承認してゐるのである。勿論、ダーヴヰンは合目的の世界を、根本的に認めたわけではない。然し、暫定的目的性を認めないわけにはゆかなかつた。眼が光の爲めに作られ、胃袋が食物を消化する目的をもつて作られた事を、ダーヴヰンとても否定することは出來なかつた。で、この七つの價値法則は、客觀に於いても主觀に於いても共通したものであり、絕對の世界に於いてもこの七つの價値法則を無視して、絕對を考へる事は出來ない。

即ち經濟價値の世界は、主觀的並びに絕對的價値運動と、決して分離してゐるものではなく、寧ろ人間生活全體から見れば、全意識活動への前提であり、基礎工事であると考へる事が出來る。

かく考へて來れば、意識經濟を取り入れない經濟學は、半身不隨の經濟學であり、又普通、物的經濟と考へられてゐる世界をも、意識化し得ない樣な宗教運動は、神經麻痺に罹りたる不

具的宗教であると考へる事が出來る。

であるから、總ての主義經濟は或る種の宇宙觀の上に基礎づけられ、宗教類似のところまで接近してゐる。即ち、今日に於いては共産主義も、科學的社會主義も、宗教と對立し得る程度に迄或る種の宇宙觀を持つに到つた。かうしてこれらの主義は、宇宙意識を基礎にして、その經濟學を發展せんとしてゐる。かうなつて來れば、その本質に於いて唯物論であるけれども、一種の宗教と何等異らない。彼等は、唯物論だと云ふけれども、その價値批判は總て心理的法則に從つてゐる。又彼等はその本質に於いて、決定論的宇宙觀を選び、心理的宇宙觀は、可能性に基づく合目的性の宇宙觀を選ぶだけの差である。

それを要するに、經濟社會に於いて、宗教價値と交換價値を完全に分離し得ると考へた時代は、資本主義初期の時代であつて、人間意識が今日の樣に目覺めて來た時代に於いては、人間の交換の行爲と、人生目的とを分離して考へる事が出來なくなつた。即ち、意識經濟に於いては、交換價値をも、精神價値に吸收し盡さなければならない事になつた。

然らば、所謂經濟價値と考へられる交換價値を、如何なる形に於いて宗教化するか。私は此

問題を更に研究して行き度いと思ふ。

唯物史觀に對する不滿

カール・マルクスの唯物史觀が、新しき時代の經濟生活を說明し得ないことを私は既に說いたが、私は更に進んで、私の持論である唯心的經濟史觀をこの章に於いて說明したいと思ふ。既に私は、經濟行爲が人間意識の發達に依りて變化することを說いた。私はそれが歷史的に如何なる形でもつて發達したかを說明しなければならぬ。

マルクスは、人間社會に於いては、主として唯物的生產の形式が、文明文化を決定すると言つた。然し私は、そんなに簡單に一國の文化を說明し得ないと思ふ。先づ、簡單なる衣食住に關する必需品の生產の形式を考へて見やう。最も必要な生產は、食物に關する生產である。この食物の生產は、植物の征服、動物の征服、氣候學、土壤學、肥料學、微生物學、等の研究によりて革命的に進步した。それは全く人間意識の發達に依るものであつて、唯物的決定によるものではない。

又、たとへ、同じ方法を以て生產されても、社會を構成する市民の意識內容が相異つて居れ

ば、その文化は根本的に差異を生ずる。例へばキリスト教的共產主義の意識をもつてゐるメノナイトの人々の間に於いては、四百年間の訓練があるために、手工業的に生產する場合に於いても、機械的に生產する場合に於いても、少しも變化なくして宗教的共產主義的に生產、分配、消費を實行してゐる。

これは、ソヴエトロシヤより追はれて、ブラジルのサンパウロ市に來たメノナイトの一派の仕事を見ればよくわかる。マルクスが、唯物的生產の形式のみを基礎にして考へるのは大きな間違である。

衣服についても同じ事が言へる。手車で糸を紡いで着物を織つてゐた時代と、紡織のミウルで糸を紡いで自動織機で織つてゐる時代に於いて、どれだけ所有權の思想に變化が起つたらうか。所有權に對する意識的自覺がなければ、機械文明は資本主義的經營に委ねられ、手工業時代と、機械文明時代と、人間意識の上に何等の變化は起らぬ。この意識の變化が起らないために、資本主義は恐ろしい罪惡を生み出してゐるのではなからうか。卽ち、唯物的生產の形式といふものは、必然的に意識を改造するものではない。むしろその反對であつて、人間の精神的

自覺といふものが、發明、發見となり又、所有權、相續權、契約權に對して根本的の革命を行ふものである。

この意識の變化が衣裳に現れて行く形式は、全く心理的なものであつて、トーマス・カーライルの如きは、これを衣裳哲學として說明せんとしたこともあつた。各國の衣裳の歷史を繙けば、その時代の社會文化的意識生活が、如何に衣裳の線及び色彩に特殊な關係を持つていたかがよくわかる。（拙著「衣裳の心理」及び「化粧の心理」參照）

意識と建築の關係は、ジョン・ラスキンが、彼の名著「ベニスの石」に最も苦心して書き表はしてゐる。人間は唯單に鳥の巢のやうな家を作るだけでも、ある心理的工夫を必要とする。況んやある種の精神的動機を以て建築せられるものに於いては、いかにその時代の意識的目覺めが、物質の上に强い影響を與へてゐるかゞよくわかる。卽ち、古典的意識の時代に於いては建築樣式が古典的になり、ローマンチックの社會意識の働く場合に於いては、その建築樣式はローマンチックとなり、自然主義的社會意識の强い時代には、建築樣式が自然主義的になる。これを見ても生理的に必要な貨財が、人間の意識的目覺めに根本的な關係を持つことを全く見

逃すことは出來ない。況んや所有權の問題、相續權の問題、また契約權の問題の如きは、社會意識の變化に依つて、先に言つたやうに變化する。

生理的血族社會が、攻守の關係から、總てを共同的にしようとする場合に、原始共產主義が現れる。然し此場合に於いても一種の心理的意識のないことはない。彼等は血族と云ふものに對する特別な神聖さを意識するのである。それが心理的に個性を尊び、個性の自由を血族社會以上に尊重する樣になると、十六世紀に現れた樣な、自由競爭的資本主義文明が出現する社會意識の溫床が作られる。カルビニズムが、個性の使命觀を神聖なるものとして、ギルド社會に對して反抗せしめたことは、資本主義文化を導くに誠に適當な機會を作つた。若しもカルビニズムが、舊ギルド社會に反抗して、個性の使命觀を尊重すると同時に、新しき心理的互助組合を作る可き事を高調して居たなら、恐らく、十六世紀以後の資本主義文明は、今日の樣な悲慘な形で發達はしなかつたであらう。殊に、契約並びに相續の思想が、十六世紀以後、全く混沌としてその根本原則を見失ひ、機械的生產の形式だけは、新しき賃銀奴隷の群を作りつゝあつたにかゝわらず、これに對する社會的正義が全く失はれるに到つたことは、プロテスタントの

神學者も全く豫期しなかつたことであるに違ひない。かうして個性の意識ばかりに神學的思想を集注させたカルビン以後の神學者は、社會意識に對する目覺めを如何に取扱ふ可きかに就いて迷うてしまつた。その結果、經濟と神學は分離し、精神生活と經濟生活と游離して差支ないものと考へられるに到つた。

然し、社會意識の目覺めは、資本主義治下の下積になつてゐる無產階級から聲が上り出した。勞働組合運動及び社會主義運動がそれである。それらの運動は。機械的唯物的生產の壓制より、人間それ自身を解放せんとする全くの意識運動であつたのだ。その證據に彼等は階級意識と云ふものを先づ第一に說き、生產階級それ自身が、社會の中軸を爲してゐることを社會に認識せしめようとした。勞働組合運動及び社會主義運動には幾多の變遷はあつた。

然し結局、社會經濟の社會化がなければ、人間それ自身を完全に解放し得ないことがわかつたので、いやでも應でも、社會立法は漸次に進んで來た。これは、唯に生產階級のみならず、消費者階級までが各種の協同組合を組織して、社會經濟を合理化せんと努力する樣になつた事を見てもわかる。この協同組合運動の如きも、全く社會意識の目覺めに依つてのみ進展するの

である。

唯心史觀の公式

かうして生產及び消費の兩方面より社會意識の目覺めが成長すると共に、經濟心理の活用は、古き時代に於いて全く考へられなかつた先物取引に迄及ぶ樣になつた。そしてこの先物取引の開始は、經濟と云ふものを一層心理的なものにしてしまつた。即ち、株式取引所、商品取引所、手形交換所等は皆、數ケ月先の、未だ存在しない世界の物品を取引する樣になつた。かうして金融それ自身が、信用と云ふ人間意識の能力の上に乘せられる樣になり、一國の社會勢力、即ち一國の社會資本と考へられる樣になり、其一國の社會資本と社會勢力は、直ちに外國爲替の相場に影響する樣になつて來る。

それであるから、今日の社會經濟は、物貨或は自然資源を多く持つてゐることに依つて、その國の富を測ることは出來なくなつた。物貨を多く持つてゐることは生產過剩を意味することもあり、生產過剩は恐慌を導く導因ともなる。むしろ物貨を多く持つよりか、物的エネルギーを如何に心理的エネルギーに轉換し得るかと云ふことが、今日の大切な經濟問題となつて來

た。即ち、唯物史觀的見解は、古き時代の說明にこそ役立つ樣に見えても、新しい先物取引の心理的經濟社會に於いては、ほとんど何等の効用を爲さないものである。

それのみではない、心理的に組立てられてゐる今日の職業戰線に於いては、唯物史觀的說明は、何等の効果を持たない。今日の歐米の社會に數千萬の失業者が出現したと云ふことは、唯物論的に說明なし得ても、この社會を再建設せんとする場合には、唯物論的にかたづかないことは多くの人の認める所である。教育の程度が進めば進む程、その社會の職業戰線は心理的に混み入り、其社會の組立は唯物史觀的に發達せずして、唯心的經濟史觀の形をとつて發達するものである。それで私は、かう云ふ事が云へると思ふ。

『總ての文化は其時代の社會を構成する民衆の意識生活の目覺めが、如何に物的生產、分配、消費の形式を進展し、且統制するかに從つて決定せられる』

土地、勞働、資本の唯心史觀的發展

此法則は、土地と資本と勞働の問題に就いても、あてはめることが出來る。土地を自然土地、產業土地、社會土地、心理土地と分類するならば、自然土地は人間生活に殆んど役立たない。

それに人間の機能が加はり工作が始まり、土壤の研究、肥料の研究、微生物の研究、氣象の研究等が加へられて土地は產業的に有効なものとなる。

更に、その產業的土地も、人間の住宅地と化し、そこに市街地が出來る樣になると、社會心理が土地の價格に作用する樣になる。從つてその土地の價格は自然的價値を離れて、人間的價値に一致する樣になる。祖國に對する考へ、或は故鄕に對する考へは、その心理的價値を極限にまでもつていつたもので、もはやそこに於いては經濟的取引を超越する樣になつて來る。

土地、證券が銀行の手を經て、資本化する場合も全く同樣であつて、その土地の證券的價値と云ふものは、土地が人間意識に於いてどれだけの價値をもつかと云ふことに依つて決定せられるのである。で物的土地は、人間意識を通しての需要、供給に依つて一旦液化し（Liquidation）、それが不動產を通して投資せられる場合に、全く氣化したものであると考へることが出來る。かうなつて來れば、經濟行爲を物的に見るのは間違であつて、空間を占むる廣大なる土地そのものすら、心理的に氣化せしめる事が出來ることを考へねばならぬ。

勞働が精神的意味を持つてゐることは云ふ迄もない。筋肉勞働は生理的必然性に支配される

ことは、我々は否定することは出來ない。然し此場合に於いても、強制勞働と自志勞働とには著しい差が起り、感情の興奮の度に依りて、能率に非常な差のあることを何人も否定することは出來ない。況んや、技術的智能勞働がこれに加はつた場合、その差は一層著しいのである。

資本に就いても同じことが云へる。資本を、物價又は金錢であると思つてゐるのは認識の不足から來るのである。金錢は、要するに、社會能力を測るメートルにしか過ぎない。眞の資本は、生命力、勞力（動力を含む）、變化力（交換力を含む）、成長性、選擇性（能率を含む）、律法性、合目的性の七要素を含んだ社會能力その物であると言ひ得る。いくら金錢があつても、生命が危險に陷り、動力が動かなくなり、交換が不可能に陷り、成長性が止み、能率が下り、法律がなくなり、合目的性の文化が廢頽に歸するなら何の役にも立たない。それで、若しもこの七つの要素が完全に社會意識の内に溶解し、社會能力が進展して行けば、金錢は無くとも、非兌換紙幣を流通させても、金融は十分足りる。かく考へて來れば、經濟行爲と云ふものは、唯物的にメートルを借りるのであつて、その本質は、人間意識の發達に依つて始めて完

成することを我々は考へるのである。勿論私は經濟が物質を無視して成立すると云ふのではない。私は、物質と雖も、人間精神の反應を受けて始めて經濟行爲に役立つものであるといふことを主張するものである。

一つの石炭でも、それを燃燒して動力に使ふ場合と、それを利用して染料をとる場合と、更にそれより藥品をとる場合と、同じ石炭でも内容が違つて來る。それを變化せしめるものは石炭そのものではなくして、人間意識そのものである。であるから、物的資本と云ふことは、その物質を使用する人間或は社會の意識内容と關聯させて考へた時のみ、眞の價値が發見出來る。

金融心理の精神分析

金融行爲と宗教に何等關係ないやうに、最初は考へられる。實際、金融は、交換に關する人間行爲であつて、宗教は、日常生活に、宇宙目的を實現せんとする目的價値の行爲である。

それで、どうかすると、經濟生活は本能化し、全意識的に目覺めなければならない宗教と、絶緣する傾向を持つてゐる。イエスキリストが、「神と寶にかね仕ふる能はず」（マタイ六ノ

廿四）といはれたのは、全くこの處に理由が伏在してゐる。

然し、金融と金錢とを混同してはならない。金錢は物質であるけれども、金融は、人間の行爲である。而もそれは、社會組織を持たなければ出來ない社會心理的經濟行爲である。つまり、金融は、特定の地域に於いて、特定の時間を限り、最少の社會的勢力を、最大の效果に導くための價値行動である。この效果といふものゝうちには、（一）生命の保存、（二）精力の增加（勞力を含む）、（三）變化の極大的可能性（變化のうちには交換による變化をも含む）、（四）自然的及び人間的成長（發明發見により人間能力の發揮をも含む）、（五）選擇の可能（快不快、適不適、安全不完全等を選擇陶汰し、自己及び社會の生理的心理的、また道德的差異による職業選擇及び教育によろ能率增進を謀ることの效果）、（六）社會生活の秩序を維持し、法律を作り、それを社會化し、司法的に、律法的に、行政的に、社會を維持せんとする效果、（七）また個人及び社會の目的を實現すること、等々の七つの效果が含まれてゐる。

金融市場の心理化

個人的自足經濟には金融はない。之は自足的家庭生活に於いても同樣である。また小さい種

族的共産制度に於いては、金融はない。金融は、社會の分業が、必然的先決條件である。この社會の分業は、生理的に、そして心理的に組合せられ、最初は本能的に、後には意識的にまた道德的に發展するものである。

それで、金融も、最初は本能的に行はれたものが、ますます意識化し、統制化し、人生目的を基準にした宗教的な意義を持つてくることは勿論のことである。

經濟行爲は唯物的なるが故に、宗教は精神的なるが故に、兩者は相容れないと思ふことは、大きな間違であつた。經濟も要するに、主として交換價値を基礎とする價値運動であり、宗教は、その目的價値を絶對價値へ結び付けて行く運動であるから、宗教は飽くまでも金融市場をも宗教化させる使命を持つてゐる。

貨幣以上の金融

今日まで、金融といへば、普通貨幣のことのみを考へて、貨幣を流通せしめる社會組織及びその社會心理等を、あまり考へなかつた。成程、初期に於いては、金、銀、銅貨が、物質として價値があつた。然し、需要供給の原理によつて、貨幣があまり增加すると、貨幣それ自身に

價値がなくなつてしまふ。それは、個人及び社會の價値發展上に於ける心理作用に於いて、多量の金銀銅貨が、社會進化を助けないからである。今日のやうな進んだ時代に於いては、通貨は物品として價値が有るのではなく、社會的エネルギーのメートルとして價値を持つやうになつたのである。

時の心理的計算と金融

幼稚な社會に於いては、限られた場所に於ける交換のみが考へられ、時間の觀念が殆ど無視せられて、貨幣の流通が行はれたが、今日の取引は、時間といふことも計算に入れなければならなくなつた。即ち、三ヶ月先の取引を株式取引所ではなし、六ヶ月先の取引を物品市場などではするやうになつてゐる。大正七八年頃には、三年先の木綿まで取引した。かうなつて來れば、金融は、無形の價値に對して行はれるやうになり、そこで唯物的な世界から心理的世界へと移行する。

即ち、最初物品と物品を固形的に取引してゐたものが、各種の社會組織によつて、（例へば不動産取引の如き形式により）物品を流動化し、更にその流動化したる物品を、將來の時間的

發展を計算して、氣體化するやうになるのである。この固體より液體へ、液體より氣體への進展は、全く經濟的社會心理を理解しなければ、誰にも解らないことである。この取引の氣體化的取扱ひが、景氣不景氣の「氣」の字を生んだ理由であり、金融に心理的要素が含まれてゐることを説明してゐるのである。

金融の氣體化

金融が氣體化することは、原始社會では起らない。それは、封建制度が崩壞し、個人主義的自由が確保せられ、資本主義的經濟社會が出現するに及んで、初めて可能になつた。それは、世界列國の經濟史を見ればよくわかる。然し、その液體化した取引と金融が、氣體化するやうになつたのは、大規模の商品取引所や株式取引所、そしてそれに並行して銀行取引所が出來るやうになつたからである。

かうした主觀を通して、信用制度が發生し、約束手形なるものが、金融市場にあらはれるやうになつた。

この約束手形があらはれると共に、外國爲替が成立するやうになり、外國爲替は、國民經濟

の全體を、その國民の生命力と、動力と（勞力をも含む）市場と、成長性と（利子、利潤、利益を含む）能率と、法律的及び社會的秩序と文化的發展によつて計量し、その一つ一つを過去現在未來の尺度から觀察し、金本位によらざる場合には、國民が、此等の七つの要素を如何に表現してゆくかといふことを尺度として、爲替相場を決定してゐるのである。

（一）かうなれば、金融といふものは全く心理化し、國民の社會心理的發展能力にしたがつて、全金融が支配されるやうになる。即ち國民經濟は直接に宗教と關係なくとも、間接に非常な關係を保ち、國民宗教が、生命を輕視して戰爭主義に傾けば、忽ち爲替相場は下落する。それは、國民の信用が落ちるからである。

（二）また勞働を忌避し、活動を忌むやうな印度宗教的傾向をとれば、國民の經濟的運動が停頓するために、爲替相場は下落する。

またマルクス主義的に階級鬪爭をのみ考へ、ストライキのみを唱導して勞働を一種の被搾取的對照物とのみ考へるときは、勞働者自ら勞働を中止する傾向が出來る爲に、外國爲替は激落する。

（三）交換の自由を認めず、或ひは交換を碍ぐるやうな鬪爭主義的な、或ひは獨裁的共産主義的な行動があらはれてくれば、交換による財及び人間資源の價値の增加が、國家的に減退する故に、爲替は激落する。

（四）或種の宗教の如く、知識を排斥し、道德的向上を碍げる場合には、發明發見が中止されるために、國民の利益が低下し、延いては爲替相場が激落する。

（五）これは、職業選擇、教育制度の場合に於いても考へられることであつて、宗教的相互扶助の精神があらはれて來ず、國民道德が低下して失業者を顧ない場合、また教育を無視する經濟のたて方をすれば、爲替相場は激落する。

（六）社會愛殊に、人の缺點をも償ふといふやうな贖罪愛的努力が、社會に仄みえず、司法律法行政の根柢が搖ぎ、協同組合の精神がすたれ、共濟保險の精神がなくなれば爲替相場は、勿論激落する。

（七）國民が、宗教と人文的價値行動を輕視し文化の實現に力めなければ、或種の經濟行動は中止されるが故に爲替相場は下落する。

以上私は、經濟心理から、外國爲替を考へてみたが、この反對も考へることは勿論のことである。即ち、民族の精氣が大いに振ろひ、生命に、勞働に、交換に、成長に、能率に、社會秩序に、更に文化發展に於いて、噴火山のやうに努力すれば、對外國の信用は倍加し、爲替相場は昇騰する。

即ち、宗教を狹義に考へないで、宇宙生命が、民族的精氣として發揮せられることそのことを意味するならば、宗教なくして、國民の金融は、信用組織を持つことが出來ない。これは、對外的にも對内的にも同樣である。

金融の速力と宗教的社會愛

これは、金融の速力を調べるときに、一層明確になる。金融の速力は、社會が心理的に組立てられることが完全になればなるほど、速力は增すものである。即ち、運搬交通のやうな生理的な組立てだけでは、金融は、運輸の速力に平行して、必ずしも、速かには行かない。それが、電信、電話、ラヂオ等によつて、心理的に組立てられるやうになれば、金融は電波の波長と速力を等しくする。

かうなつて來れば、社會心理の組立てそのものが、金融の速力の基礎になる。そこで、社會心理が意識的に組立てられるか否かによつて、金融の速力は、差異を生ずる。即ち、本能的社會組織の時代に於いては、人に對する好き嫌ひによつて、金融の速力が途中で中斷せられ、全意識的な道德社會に於いては、金融の速力は高度にまで達する。そして、この全意識的道德生活といふものは宇宙意識を目的としなければ決して存在しない。だから、宗教をはなれて世界の經濟組織が完全に行はれるかどうかは、疑問である。

金融を譬ふればそれは、血管のやうなものである。血は十三秒間に身體を一巡してくる。それほど血行は速力が早い。これは全體にわたつて組織を持つてゐるからである。社會に於いても同樣であつて、社會愛が普及して、全體意識が、社會全體に行渡つて居れば、金融は血行以上に速くなり得る。それは神經の速力と同じ速力を持ち得る譯である。

然し、今日我々は、決して全意識に目覺めてはゐない。人間は必然的に、一日のうちに眠りより醒めて、また眠りに落ちる。かくの如く、社會の組織も、眠つてゐる部分が多く、金融はおのづから其處に停頓するやうになる。それで、農村のやうに、自然的生産を基礎にしてゐる

のは、金融は盆と正月との二度にしかなく、その速力はまことに鈍い。それが月勘定の商賣になれば、金融の速力は、やゝ早くなり、それが工業都市に於ける賃銀受渡しのやうに、毎日勘定になれば、更に速力を増し、取引所のやうに、一日十六回の計算があれば、金融の速力は超スピードで増加する。

斯くの如く、金融の速力は、社會心理の組立が、自然生活に依存する本能的睡眠狀態より、科學的、また道德的全意識の目覺めに至るまで、程度によつて、非常に大きな差異がある。

金融の速力が増してくれば、物質としての貨幣は、ほとんど用途がなくなり、それは、社會の總能力を計るメートルにしか過ぎなくなる。例へてみれば、農民が一圓の金を銀貨で渡す代りに商人が一錢の金を流通して百回渡せば、一圓全部を支拂つた譯になると同樣で、金融の速力が早くなればなるほど、通貨がなくともよいので、遂には、傳票でもいゝし、口でこれだけの社會能力を君に保證するからといふたゞけで濟むやうになる。

それで、金融の速力と、社會愛の組織體は正比例する。社會愛の高まるところに金融の速力は高まり、社會愛の減退するところに金融の速力も減退する。

斯く考へてくれば金融心理から見て、マルクス的唯物史觀が成立しない。高度の經濟社會に於いては決して、經濟行爲が唯物的に行はれてゐるのではなく、それは全く、心理的に、道德的に、また宗教的に行はれて居るものである。

原始文化の精神的基礎

南洋諸島の原始的野蠻民族の社會狀態を研究すればすぐ解ることであるが、ソロモン島の地方的方言發達等に依つて判斷すると、文化と云ふものは、鬪爭に依つて、非常に退歩するものだと云ふことが解る。ソロモン島でも、ニウギニーでも、ボルネオでも、ヒリツピンでも、臺灣でも、二十哩も行けば、はや言葉が通じない。そのために、通商貿易が進歩せず、文化は漸次遲れて來る。そしてこの原因が全く種族間の戰爭にあつたと云ふことを私は認めざるを得ない。

その反對に、種族が統一され、言語が相通ずる樣になれば文化は忽ち興る。それは古代ギリシヤ文化の發達を見ればよく解る。

中世紀の文化がキリスト教的背景を持つて來た爲に、封建時代であつたに關らず面白い兄弟

愛運動がその反面に行はれ、その兄弟愛運動が工人ギルドを組織し、商人ギルドと工人ギルドが組合國家を小都市に於いて組織した事なども記憶せらる可きことである。

機械文化の唯心史觀的解釋

マルクスの唯物史觀は、機械文明を目擊して生れた。そしてマルクスは、その機械的方面だけを考へて、機械が人間によりて發明せられたと云ふことを忘れてゐた。

械機の發明は十八世紀末より、今日に到るまで益々進歩を續けてゐる。然しマルクスの時代は主として蒸氣機關の發達した時代であるために、彼は、大工場主義のみが唯物的に發達すると考へた。

然し、發明が更に進んで、小さい電動機の發明に依り、小工業が、自由に農村に於いて發達する樣になつた爲、マルクスが考へた樣な唯物史觀的決定より、むしろ心理的決定が社會經濟をより多く支配する樣になつた。

若し、蒸氣機關の樣な幼稚な發明に依つて社會が支配せられてゐたなら、或はマルクスの云ふ事の方が、眞理に近い樣に考へられたかも知れないが、電動機の發明が、より多く智的發達

と並行し、智識發達が兄弟愛の實行と並行しない時に、分裂性の社會が現はれ、そこに精神運動と經濟運動が全く一致する樣な社會狀勢が現はれて來た。そこで、勞働運動も心理的性質を以て現はれ、勞働者の運動が心理的性質を以て決行せられ、生産も分配も、消費も、所有權の問題も、相續權の問題も、契約權の問題も、總て、社會心理的發展に依つて決定せられ、マルクスが考へた樣な唯物史觀的發展を考へる餘地は、小電動機を中心とする文化時代に於いては、考へられなくなつてしまつた。

これは又、內燃機關の發達に依つて一層助長せられ、機械そのものが、人間の精神作用と同一歩調を取ることが明瞭になつた。こゝに於いて、私は、マルクスの唯物史觀を根本的に修正する必要を感ずる。

但し、若し社會勢力を表象化したる金力を唯物的なものと考へるなら、私は此場合に於いても、人間の利慾と云ふ心理的なものが加はつてゐることを忘れることは出來ないが、今日の多くの人はその金力を得たい爲に活動して、眞の理想を忘れる傾向があるから、これをしも唯物的と考へ得られよう。

然し、私は、さうした意味の唯物主義は、心理的唯物主義であつて、之も、唯心的經濟史觀に依つて說明し得られるものであると思ふ。

社會勢力が、交換價値を重大なるものとして、總ての社會價値を交換價値の標準に依つて決定する樣になつた。そのことが、本能化すると共に、經濟の目的性が忘れられ、手段が目的に置き換へられ、そこに唯物的に見える金力崇拜が、社會價値の中心を爲す樣になつた。これをマルクスは、唯物主義と云つてゐるが、この意味の唯物主義を科學的唯物論と聯絡して、片附けることは大きな間違である。人間は經濟行動に於いて、どうしても心理性から脫れることは出來ない。

で、マンモニズムは、要するに私利、私慾を中心とした實現主義を意味し、永遠と絕對とを目標とし、愛と高擧を目指す神の生活には未だ餘程距離が遠いことになる。これをイエスが、神とマンモとは共に事へることは出來ないと云ふたのである。然し、この二つの生活はいづれも、人間の精神的生活態度を示す點に於いては變りはない。

それで、資本主義をも、唯物的なものだと考へるなら、それは大きな誤りであつて、資本主

義制度は要するに、自我中心の搾取制度を意味してゐることの外何物でもない。單なる物質運動に、自我があつたり搾取があつたりする理由はない。これは共産主義運動に就いても同じ事が云へる。

他愛的共産生活は、精神的基礎を持たずして、どうして愛の心が起るであらうか。斯く考へると、私は、唯物史觀は經濟史觀の本質を說明したものではないと云ふ事が出來る。

協同組合運動は唯心的經濟史觀を確證する

殊に最近發達して來た協同組合運動を見れば、協同組合經濟なるものが、全く、社會連帶意識の上に乘つかつてゐるものであつて、唯物的生産も、分配も、消費も、總て社會連帶意識の根本精神より湧き出てゐることをよく敎へられる。

これで、協同組合經濟の發達は、機械文明をも、もう一度明確に精神化する力を持つてゐる。それで、協同組合運動をするものは、マルクスの唯物史觀が誤謬であることを痛切に感ずるのである。否、それとは反對に、協同組合運動をすればする程、唯心的經濟史觀の眞理を確信せしめられる。

精神力による經濟改造

假に暴力革命が起きて、ロシヤのやうに、共産黨が總ての私有財産を廢し、宗教を禁止し、議會を解散し、市場を閉鎖し、總てを生産者專制の治下にしてしまつたとしたら、それでその國の經濟狀態はうまく行くだらうか。

フランスに於ける一八七一年の革命に於いては、六ヶ月間だけしかさうした政治はうまく行かなかつた。ソヴエト・ロシアは、多くの犧性をもつて約五年間支へた。然し、それも終に新經濟政策に逆戻りせざるを得なかつた。なぜ暴力革命が經濟革命に餘り役立たないか、それを私は此章に於いて述べたいと思ふ。

暴力革命が、經濟革命の手段として用ひられる場合に、次のやうな七つの障害が起つて來る。

(一) 多數の人命の失はれる事である。

(二) 內亂から起つて來る恐怖のために、市場が混亂し、食物の供給が絕え、農村の勞働力が減じ、忽ちにして飢饉が都會地に襲つて來る。フランス革命の時には、約三百萬人が飢饉の

爲に死んだと云はれて居る。又、ソヴエト革命の時には、千八百萬人が飢餓に瀕した。それで又で死ぬ者よりは、飢饉のために死ぬ者の方が多い事になる。

それのみならず、總ての生産能力が衰へ、日常必需品に不足を感しるやうになつた。これは强制勞働となつて能率が下るからである。

(三) 然かも、交換を禁止するために、需要供給の系統がわからなくなり、需要供給の數量が、明確にせられず、生産と消費の、目論見が立たず、衣食住を分配制度のもとに、統一せんとするために、餘計な費用が嵩み、無駄が生じ、個生の生理的要求の差別、心理的要求の差別を無視するために、浪費と缺乏が極端に感ぜられ、生産地に近い方面に於いては、物資が推積し、その中心地を離れる事が遠い程、日用品の缺乏が甚しく感ぜられる。

(四) 總てが專制的になるために、發明、發見の努力が失はれ、餘剩勞力を用ひて、富を增加することを控へる樣になる。ウクライナの農民が、モスコーにある中央政府の掠奪を恐れて、自己の生活に必要なる物以上牧穫しなくなつたゝめに、かへつて迫害せられ、終に、飢饉にあつて百萬人近くが餓死せしめられたと云ふが、かうした悲慘なる現象を屢々見るやうにな

る。つまり、總ての增産計畫が、失敗に終る。

（五）暴力革命は、職業選擇の自由を奪ふ。ロシヤに於いては强制勞働が强いられるために、失業者は無いけれども、自志的な職業選擇は全く失はれてしまふ。

（六）自由と權利が與へられないために、小數の意志は尊重せられず、官僚的專制主義が總てを支配し、一切の自由が奪はれてしまふ。

（七）從つて、理想主義的意識運動は跡を絶ち、唯物的決定論のみが總てを支配するやうになる。

かうした暴力革命は、暫定的には、成功しても、決して長續きするものではない。若しこれが長びけば、怠け者が增加し、怠惰な民族が社會に多くなる。で、暴力革命は、政治的にはゆるされるにしても、經濟的には、役立つところ誠に僅である。若しもそれが多小なりとも效能ありとすれば、暴力的搾取階級を追放するに役立つ位のものである。然し。これとても、經濟價値の七要素の七分の一にも足りないものである。（經濟價値の七要素は、私が先に述べたやうに、生命價値、勞力價値、變化價値、成長價値、選擇價値、法則價値、目的價値の七種である。

その中、暴力革命が成功し得るところは第六番目の法則價値の律法的世界に於いて、搾取的權力を追放するに役立つだけである。）

經濟活動と云ふものは、私が第一章に於いて述べた如く、意識の目覺めの比率に從つて、差等を生ずるものである。目覺めて居ない社會に於いて、暴力を以て引張る事は出來る。恰も居眠りしてゐる子供を親がその手を採つて引張るやうなものである。幸ひその子供が歩いてくれるなら、少しも遠くまで行かれるけれども、途中で、その子供がひつくりかへる樣な事があれば、それでお終ひである。

やはり、經濟革命は、意識の目覺めに依つて決定されなければならない。ソヴエト・ロシヤのやうな、總人口の八割以上が農民生活を送つてゐる地域に於いては、暴力革命は比較的容易に成功し得る。それは、暴力革命を實行しても、食糧の缺乏を感ずる事が比較的少いからである。

然し、若し、英國や、米國のやうに、總人口の八割以上が都會に集中してゐるところでは、暴力革命の結果は、誠に、或る寒心すべき狀態を誘致する。卽ち、失業者の激增の結果、混亂

に混亂を重ね、暴力革命に成功しても、經濟形態は、根本的に變動を示す事は出來ない。

以上述べた事に依つて政治革命と異つて經濟革命と云ふものは、暴力や法律に依つて直ちに改造出來ないと云ふことが理解されると思ふ。

經濟革命に對する暴力の無能

然らば、經濟革命は、如何なる形で來るか。結局する所は經濟革命は、意識的變化を必要としなければならない。即ち所有權に對し、相續權に對し、契約權に對する財及び勞力職業について、根本的な革命が起らなければならないのである。そして、此の所有、相續、契約の三つの意識に對する革命は、宗教意識を根本にし、それが社會意識的に發展し、組織立てられた時に始めて經濟革命を完成するのである。私がこゝで云ふ宗教意識とは根本的宇宙意識であることはいふまでもない。それが宇宙觀を根本的に確立しないまでも、人生觀に對する根本信仰を持てることは、その場合必要なことである。そして、これを社會的に意識化して行く場合には、私が第一章に述べた生理的潜在意識より、感覺的心理意識へ發展し、更に感覺的心理意識より、道德的社會意識へと發展して行く可きものである。

若し、根本信仰が確立して居ても、生理社會に止まるなら、その時代の經濟文化は中世紀的になる。中世紀の封建的經濟は、多く血族社會を中心とし、自足經濟を基礎としてゐた。これが、社會文明の到來によつて、變化と成長を、殆んど無限にまで增大せしむる事が出來るに關らず、社會意識と宗教意識だけは、未だ封建思想と何等異らない狀態に置かれてゐる處に資本主義文化の發生がある。

この資本主義に飽き足らずして、新しき階級意識に訴へて、資本主義經濟を革命しようというのが共產主義及び科學的社會主義の企圖する所である。然し、階級意識は、經濟價値要素の第二要素、即ち、勞力的價値を根本にするものであつて、經濟價値運動に於ける最も大事なるものの一つであるけれども、それが中心になつただけで經濟革命を完成することは出來ない。何故ならば、生產は、消費を俟つて始めて經濟的循環を遂げ得るものである。殊に、筋肉勞働のみを尊重して、智識階級を疎んずるサンヂカリヂム (Syndicalism) 的傾向を多分に持てば、智識階級の屈從に依つて文化は退步し、發明、發見は止まり、人間の意識的活動が最小限にまで收縮してしまふ。その爲に起つて來る失業は、筋肉勞働のみを以て組織せられてゐる世

界に於いては、全く救ふ事は出來なくなる。

これを經濟的にいへば、生産者中心の暴力革命は、假令成功するにしても、消費系統の組織を缺き、金融活動の根本に觸れることを忘れ、職業經濟の本質を理解せず、徒に法律を改正すればそれで經濟革命が終つたものと思ふ樣な大きな間違をする。レーニンが一九二一年、彼の苦き經驗によつて新經濟政策に移つたのは此の失敗を敢然として悔い改めたのである。其處に於いて、彼は先づ消費組合を再組織し、各種協同組合を中心とする協同組合農場等を興した。協同組合を基礎にして始めて、彼の理想とする經濟革命へ進展し得ることに彼は氣が付いたのである。

階級意識より全體的兄弟愛意識へ

細胞と腦髓だけでは人體は動かない。細胞を以て先づ骨格系統を作り、其上に筋肉系統を加へ、更に消化器系統を作り、循環系統をそれに附加し、泌尿系統、神經系統まで作つて行けば、そこに始めて、腦髓が中央より命令することが出來るのである。

生産階級は、譬へて見れば、一種の筋肉系統である。その筋肉系統が腦髓を占領したからと

いつて、人體全部が出來上つた譯ではない。經濟革命の困難なのは全くこゝにある。資本主義經濟は、循環系統、即ち人體の血に當る金融の部分を小數者が獨占し、麻痺せしめて居たものである。それを最も強く感じた者が筋肉系統に當る勞働階級である。そこで我々は、この循環系統を全部廢して、筋肉系統のみに賴れば良いと思ふのであるが、人體の構造はそれだけで出來て居るのではない。そこで、我々は、階級意識のみをもつて、經濟革命を企てないで、社會全體の完成と幸福を期する全社會化の意識をもつて經濟革命の基調としなければならぬ。

此全社會を基調とする社會化運動こそ、キリストが福音書に於いて說いた神の國の意識とその根柢に於いて同質のものである。キリストは、ルカ傳第四章に於けるナザレの宣言に於いても、また彼の主の祈りと云はれてゐるものに於いても、或は彼の美しき多くの譬喩に於いても、彼は絕えず社會に屬する、いと小さき者をも躓かしてはならないことを說き、それが贖罪愛を基調としたる、搾取なき奉仕的社會を理想とせねばならぬことを敎へ、又それに向つて生活した。

で、私は、眞の經濟革命は、キリストの如き、意識生活を社會化した時に於いてのみ、完成

せられるものであり、キリスト教的兄弟愛が發展しなければ、眞の經濟的理想社會は來ないと云ふことを確信して居る。

第四章　宗教的兄弟愛意識の發展と協同組合意識の開序

キリストの意識したる經濟價値

或る者は基督教の本質が全然宗教的なものであつて、經濟生活と何等關係ないことを主張する。それはあたかも消化器系統が、神經系統と關係がないと主張するのに等しい。成程その差は明瞭である。然し、その人體に關係あるところは消化器系統も、神經系統も、同じことである。いやむしろ、神經系統が、消化器系統を指導して食物を採取し、味はひを知り、あらゆる方法を以て消化を助けるところの運動を爲し、運動不足にして消化の不完全なる場合には、藥を用ひて消化を助ける樣にしなければならない。宗教が、經濟生活に關係のあることは、以上の例を以て見てもよく解る。然し東洋に於いては、經濟生活をきたないものとして輕蔑し、西洋に於いても、經濟社會と教會の分離を根本的に主張する者が少くはない。

然し、イエス・キリストはさういふ態度をとらなかつた。キリストの主の祈を見るとそれが

よく解る。彼は日常生活のパンの問題を、神の國の來る可きことと一緒にして祈つて居られる。彼が、食事の度毎に祈り、最も大切な教訓を食卓に於いて述べた外に、彼は、經濟の根本問題に、隨所に觸れて居る。

即ち、彼が經濟價値の七原則に就いて優れたる教訓を與へて居ることも我々は注意せねばならぬ。

第一――彼は、人若し全世界を贏くろとも己が生命を失はば何の益あらんや（マタイ傳十六章二十六）と云はれて、經濟價値の根本原則が生命價値に始まることを說いて居る。彼は、經濟價値の上に差等のあることを說いて、生命は糧に勝り、體は衣に勝るならずや（マタイ傳六章二十五）と云ふて居る。で、イエスは厚生經濟の原則を樹てた。

第二――イエスは又、勞働を重んじ、我が父は今に至るまで働き給ふ。故に我も働くなり（ヨハネ傳五章十七）と、生命價値に次いで勞力價値の尊ぶ可き事を主張した。然かもイエスは彼の有名な譬喩に於いてその失業者が生活を保證せられる爲に、最低賃銀を約束せられたことに就いて述べて居る（マタイ傳二十章八）。

第三――交換價値（變化價値）に就いてはマタイ傳十三章四十四、四十五に、畑や、眞珠の賣買に就いて語り、ルカ傳二十二章三十六には衣を賣りて劍を買へと云ふことさへ弟子に云ふて居る。然し、イエスは、その賣買が親切を基礎にせねばならぬことをも力說して居る（ルカ傳六章二十八）。

第四――成長價値の原則に就いて、イエスはこれを自然界に發見し、麥や芥種の成長を指摘し（ルカ傳十三章十九）、又あの有名なタラントの譬へ話に於いて、賣買に依る利潤（ルカ傳十九章十三）、又銀行に預金することに依つて發生する利子の事についても彼は知識を持つて居た。で彼は多く持てる者は益々與へられ、持たざる者はその持てるものをもとらるゝなりと云ふ、實に驚く可き價値原則を我々に認識することを要求して居る。

第五――選擇價値の原則に就いては、生命に入らんが爲にあらゆる淘汰を爲す可きことを考へて居る（マタイ傳十八章八）。又彼は、審判に於ける嚴肅なる選擇を教へて、我々に反省を促して居る。

第六――法的價値の原則を彼は大切なものとして、われ律法また預言者を毀つ爲に來れりと

思ふな。毀たんとて來らず、かへつて成就せん爲なり（マタイ傳五章十七）と云ふて居る。然しイエスは又、此律法の完成は愛であることをも力説した（ヨハネ傳十三章三十四）。

第七――合目的性の原則に就いてイエスは汝等天の父の如く完全なれと教へ、神への奉仕が、手段としての金錢と兩立しないことを力説して居る。人はよく神と金錢とが兩立しないと云ふことを讀んで、宗教生活が經濟生活を無視すべきものであることを考へる。然し、キリストに於いては、經濟生活が神への目的を持たない場合に、それが全く無意義であることを説いて居るのである。世にはよく、神を離れて金錢ばかりを考へて居る者があるが、かうした者こそ誠に憐む可きであるとイエスはいふたのである。

十字架愛と經濟價値

イエスの宗教の偉大なる理由は、その教訓が勝れてゐたからではない。いや、寧ろ、彼の意識生活が神の意識と合致し、彼が十字架上に例れるまで、その短き一生を全人的に生かしたからである。誠に彼の十字架は、神に對する愛と、人に對する愛を一つの集點の上に燃燒させたものである。世人これを呼ぶに贖罪愛の言葉を以てするが、その言葉をもつてしても、彼の尊

き死の全體を表現することは困難である。

彼は、神の立場より人間を見直した。そして、神が人間社會に持つ連帶意識の立場より、人間を救はんとする意識に目覺めたのであつた。この尊い宇宙全體意識には、人間の缺點を神に懺悔し、完全の愛をもつて神に接近せんとする氣持も含まれてゐた。そこに、人類の個人的價値運動と社會的價値運動の完全なる一致が發見せられる。よく神學者に、イエスの贖罪的死が個人の靈魂の爲であつて、社會全體の爲ではないといふやうなことをいふが、それだけでは足りない。個人の缺乏は宇宙全體の惱にもなるのである。それで、キリストの贖罪愛は、人類社會全體を救ふために、個人の靈魂を救はねばならぬといふことを意味して居た。

若し、キリストの十字架意識が、社會人の總ての人に理解せられ、又意識せられるなら、理想的社會は容易に實現出來る。彼の十字架の愛の運動は、經濟價値の七要素を全部含んでゐる。即ち、(一)死なんとする生命を救ひ、(二)失はれたる力を補塡し、(三)化石化したる自由を失ふた靈魂に眞理に依る自由を與へ、(四)退化したるものに神の國の成長力を回復し、(五)選擇力を失ふた者に選擇力を附與し、(六)法則を踏み外した者をもう一度道に返し、(七)

目的より迷ひ出でたる者を愛を以て救ひ返す、その七つの再生力を保證してゐるのが、イエスの決死的贖罪愛の精神である。

で若し、十字架的精神が日常生活に組込まれるなら、我々の經濟行動に搖ぎのあらう道理は絶對にない。

近代資本主義が、十字架愛を蹂躙して、それを經濟的に意識化せず、唯十字架を神靈的なものとのみ考へて、經濟價値と關係なきものとして取扱つた故に、今日の如く悲慘な失業や恐慌が續出するやうになつたのである。

若し、十字架意識が經濟上に價値運動とし組み込まれるなら、それこそ人類社會で至高の神の國運動がそこに實現することは疑ひないことである。實際今日まで多くの宣教師が、血を流してまで福音を野蠻人に運び、多くの人道主義者がキリストの名に依つて巨億の富を社會救濟の爲に投げ出したのは、この十字架愛の意識より割り出されたのであつた。唯、不幸にして、それ等の運動が個人的十字架意識の活動に終り、十字架を社會全體に生かさうとする努力、即ちキリストが神の國と云はれた社會性、又パウロが考へたキリストの體(Soma)の中に、生かさ

なかつたことは殘念なことであつた。ボウロが考へた「體」は「國體」「團體」の體を意味するのであつて、キリストの愛を基礎としたる社會體を意味してゐるのである(エペソ書五章三十)。或る人々がキリストの贖罪死は個人の靈魂のためであつて、社會の爲でないといふけれども、パウロ等の意識したのはさうではなく、社會のためでもあつたのだ(エペソ書五章二十六)。

かく考へて來ると、十字架愛こそ宗教の本質であつて、この十字架愛を信ずることが眞の信仰生活であるのだ。それで、若しこの十字架愛が社會經濟の原理として認められるなら、それこそ經濟社會に一大革命が起つて來ると私は思ふ。何故ならば、十字架愛の前には、個人の所有權も、相續權の問題も、總て神と全社會へ奉獻せられて、利得と云ふものは全く神への利得とのみ考へられるやうになるからである。

即ち、十字架愛は、再創造を意味する贖罪的回復であると共に、單なる創造の世界に對しては、第二の創造を意味する新しき發展である。誠に十字架愛に於いてのみ、總ての失業者を抱擁し、總ての恐慌に依れる損害を辨償する大きな愛となつて現れて來るのである。例へば、米國に千二百萬人の失業者があるとしても、一九三五年の冬、若し米國一億二千萬の同胞

が九人宛團結して、十字架的精神に依つて失業者を救濟する決心を出しさへすれば、失業者の救濟等は何でもない。これを協同組合運動に應用すれば、ライフアイゼン式信用組合運動以上に、羨ましいほど社會愛に滿ちた良き運動が生れ出づるのである。

で私は、十字架愛の原則を、たゞ一種の教條として聖壇の上に殘して置かないで、キリストの如く全生命、全社會に生かして行かなければならぬと思ふ。其處に宗教の本質が、經濟運動の本質とならなければならない原理が存在してゐるのである。

然るに、近代キリスト教の本質が神に對する絶對の信賴にのみあつて、愛の活動にはないと考へ、經濟生活から宗教運動を全然分離せんとする態度に出る者があるが、誠に悲しいことである。

神に對する絶對の信賴は誠に良い。然しそれが、手足の活動を休止して居て、且つ神に救はれ得ると信ずる者であるならば、それは一種の迷信である。

信仰は要するに神に依る可能性を信ずることである。神に依る可能性を信ずるといふことは、信ずることその事すらが人間的行爲を意味してゐるのである。人間の行爲を否定する者

が、信仰といふ行爲を重大視するならば、愛といふ行爲を否定する理由もないのである。若し、神のみを考へて、人間を無視するなら、宗教の存在する理由もない。また神が人間を作つた理由も無い。愛の行動を人間の行動と考へるから救ひを捷ち得んとする功績のやうに考へる者もあるが、愛が神の軌道に乘ることであると考へさへすれば、それは功績でも何でもない（ヨハネ第一書四章七）。使徒ヨハネは「愛は神より出づ」というてゐるが、實に愛は人間隧道を通つて現るゝ神の行爲であるのだ（間違へては困る。それは劣性的なものをいふのでは無くして、贖罪愛的のものをいふのである）。贖罪愛は全體意識、即ち神意識から出現し、神より出るものである。即ち、この種の愛は、人間意識を通して現れても、神の軌道に乘つたものである。で、信仰とは、この柔弱に見える愛の力の方が、暴力による活動より更に大きな可能性を持つことを信ずることを含んでゐる。

キリストの贖罪愛に對することも同樣である。彼の愛の心情は、人間を別に、天にまで吊り上げなくとも、それが愛であるが故に、人間を救ふ力を持つてゐることを信ずるのである。

愛は既に神の本質に迫つてゐる。愛は神から出てゐる。だから、信仰とは、愛による可能性

を信ず可きことをも含んでゐる。そして、その可能性を信ずる信仰は、愛を可能ならしむるやうに――即ち、神をして人間を通して彼の可能性を發見し得ることが容易であるやうに爲向けなければ、神とても可能性を發揮することは出來ない。我儘だけを主張して、口に信仰だけを主張するものは、表面に於いて神を信じ、本質に於いて神を拒んでゐるのである（マタイ傳二十五章四十五）。神を愛することと、神を信ずることとは同一內容を持つてゐる。それで、神の愛を信じながら、神が作り給ふた部分部分（即ち人間）を愛さないとするならば、全くその愛は矛盾してゐる。たゞ、先にも述べた通り宗教といふものが、個人の救ひのみを考へて、神の意志を個人及び社會に徹底することを意味してゐると思はない者は、個性の意識だけを深めて、社會に神の意志を徹底することを打つちやらかす傾向をとる。そして、社會的に活動することを淺薄なりとして退け、愛の運動を馬鹿にさへする傾向が起る。然し、先に述べた通り、十字架の贖罪愛に於いては、この二つが完全に調和してゐる。

それで、信仰といふものを靜止的なものと考へないで、それは動的であり、超人間的力が、人間を通して流れ出でる場合、愛の形をとつて現れて來ることをも信ずるのを信仰といふので

あると考へなければならない。この愛に依る創造性と保存性と回復性を、神に連絡のあるものと信じなければ、信仰は人間から神へ行く一本途になつてしまつて、神から人間に來る聲は全く聞えないものとして塞がれてしまふ。神の聲は愛を通して響く。神は愛なりとの認識と信仰は、愛を通してのみ認識されるのである。

神よりの默示を論理的にのみ聽かんとして、愛を通して聽かうとしない者は、絕對性と相對性の對立を永久に深めるだけである。そして、この絕對と相對の對立を越えて、我々に兩者を接近せしめるものは愛である。愛は七つの價値要素を一つにしたものである。愛に於いて、絕對は相對に話し掛け、愛を通して、神は人間を神の子として懷く。キリストが神の言葉であると云ふ意味は、キリストが絕對的贖罪愛を相對的人間生活に意識化したからである。それで、神よりの愛を取次ぐ者は、神の言葉を取次ぐものである。誠に、贖罪愛に於いてのみ、神の言葉は人間に明確に意識化される。それで、我々は唯單に神を信ずるのみならず、神に聽き、神の言葉を他人に傳へなければならぬ。それをしも、大それたこととして人間に神の子としての權利を拒むならば、さうした宗教こそ誠に悲しむ可き宗教である。

不幸にして、カトリック教會は、人間の小さき愛を積み上げて、神の愛が彼だと思ふやうな誤謬に陷り、神の愛から人間の愛を絶縁してしまつた。

又プロテスタントは、神に依る罪の赦しをのみ信じて、人間の小さき愛が、神より流れ出づる大きな愛と連絡し得可きことの、神の力の可能性を信ずることを忘れてしまつた。

結局、プロテスタントも、信仰をやかましくいふ癖に、神の絶對的力に對する信仰に、ある制限を與へて居り、カトリックも、愛をやかましくいふ割合に、神の愛に制限を與へて居るのである。で我々は、その失敗に鑑みて、神がその愛によつて完全に人類を救ひ得ることを信じ、神の愛としての贖罪愛を社會に實現して、神より來る言葉を日々聽き續ける必要がある。

使徒パウロの意識したる經濟價値

キリストは神第一を主張した。然し、それに依つて、經濟を無視したのではなかつた。寧ろ、彼は、天國に寶を積むために、貧しき者に富を與へることを教へ、乞はれたる者には與へ、借らんとする者を拒まず、人にせられんとすることを人にもすべき、神中心の經濟生活を教へたのであつた。この美しき教訓は、使徒行傳第二章、第四章に於ける宗教的共産生活と

して、キリストの死後實行せられるに到つた。で、パウロの十三通の書簡を見るならば、初代教會の勤勞主義的他愛經濟の精神が良くわかる。

彼は十三通の手紙の中、十通迄に勤勞を教へてゐる。そして、彼自らが勞働者として働き、その得たる賃銀をもつて、弟子達の生活を支持したことを誇として居る（使徒行傳二十章三十三、三十四、三十五）。で彼は云ふてゐる。汝等もかく働きて弱き者を助け、又主イエスのいひ給ひし、與ふるは受くるよりも幸なりの御言葉を記憶せよ。何といふ尊い言葉であらうか。この精神はテサロニケ後書第三章八節より十節に最も良く書き表されて居る。

價なしに人のパンを食せず、反つて汝等のうち一人なも果はさざらん爲に勞と苦難とをもて、夜晝働けり。これは勝利なき故にあらず、汝等をして我等に效はしめん爲に、自ら模範となりたるなり。また汝等と偕に在りし時、人もし働くことを欲せずば、食すべからずと命じたりき。

かうした精神を基礎とすれば、宗教的共産生活は實に容易に實現出來る。即ち、この精神が發展して、パウロがあの驚く可き國際的社會事業をやつたのだといふことがわかる。それは、使徒行傳第十一章二十八節に記載されてゐる飢饉の救濟から始まつて、パウロはエルサレ

ムに於いて逮捕せられるまで貧民救濟の事業を繼續した（コリント後書八章、九章。ロマ書十五章二十五、二十六。使徒行傳二十四章十七）。

パウロにとつてはかうした救貧事業は、宗教生活に無くてならない經濟行爲として考へられた（コリント後書九章十三、十四）。從つて彼は、強い言葉を以つて、富める者がその財産を貧しき者に分與す可きことを教へて居る（テモテ前書六章十七―十九）。斯く考へて來ると、贖罪愛の偉業を完成するために、パウロはどうしても貧しき者をいたはり、宗教的協同生活を實現する必要を感じたのである。そしてこの思想が、キリストの兄弟ヤコブにも、ペテロにも、ヨハネにもあつたことを否定する事は出來ない。

然るに、信仰を力説する者が、かうした愛の行爲を、救ひに邪魔になるものとして退けんとする傾向があることは悲しむ可き現象である。パウロがあれだけ信仰を高調してロマ書を書いたに關らず、そのロマ書の末尾に社會事業の必要を高調してゐる所をみると、パウロに於いては、信仰生活と社會生活は何等矛盾を持つて居なかつた。若し我々が信仰といふものを唯單に抽象的なものと考へるならば、それは社會生活と矛盾を感ずるであらう。然し、神の救ひ

が唯一個の靈魂を救ふのみでなく、社會總てを救はんとする企である以上、靈魂を救はれた る者が、神の愛に感激して救ひの實現に努力す可きことは、それ自身、信仰生活の內容そのものであると私は思ふ。

私は信仰と云ふことを教義に對する信仰とは考へない。生活全部をもつて、神の愛に信賴することを信仰生活と云ふのだと思ふ。然らば、神の救ひを確信したる靈魂が、結果を望まずして神の愛に信賴しつゝ、キリストの贖罪愛を地上に生かすために努力することが、何政惡いだらうか。私は、信仰を論理的にのみ考へて、全生命的に考へない多くの神學者があることを悲しむ。神の愛を信ずるといふ者が、自分だけ救はれて、それで足れりとし、神の愛を自己の生活に反映せしめないとするならば、私は彼自身が神の愛に浸つてゐるとは考へられない。

窓硝子が太陽より光線を受けて、それを通さなければどうなるだらうか。その硝子は透明でないのである。神の愛によつて救はれ、彼が愛を奉仕するのは、彼が自己の力を信賴するからではない。神の愛をして、彼の靈魂を貫通せしめるからである。パウロの愛の行爲は、彼が贖罪愛に生きたことに依つて可能になつたことは、彼の屢々いうてゐる通りである。あゝ、然し、

世界には何と云ふ多くの不透明なる硝子のある事よ。

贖罪愛と經濟革命

キリストにとつて、神は、宇宙を抱く大きな愛であつた。然かも、それは、宇宙の最微者も忘れ得ざる贖罪愛そのものであつた。で、イエスにとつては、パリサイ宗の如く教養や教條に縛られて慄く信仰ではなく、聖靈意識の導くまゝに、自由なる愛の生活を實現することが、神の子としての地上の生活であつたのだ。然るに、中世紀の混亂と近世紀の資本主義文明の壓迫は、宗教より愛を蒸發させてしまつて、信仰に關する教條だけが殘つてしまつた。それで、今日若しも、キリストの贖罪愛を實生活の上に實現させれば、ソヴイエト共産主義とはまた異つた、優れた社會が現れて來るけれども、神の教條を神學的にのみ取扱つて、實生活にこれを意識化し、經濟生活をも聖愛の意識化の内容として溶解せしめようとしないならば、宗教は、資本主義や暴力主義と何等衝突することなくして、罐詰の様になつて保存されるであらう。

嘗て、ローマ帝國の滅亡以後、野蠻人の侵入がヨーロッパに於けるキリスト教的經濟生活を破壞し、再び私有財産主義を基礎とするローマ法が復興せられた如く、今日ローマ法の繼續せ

られた機械的資本主義治下に於いて、世界を救はんとする贖罪愛の意識生活が蹂躙せられ、多くのキリスト教會がその贖罪愛の意識を辛うじて教條化してのみ、慰安を感じ得んとする狀態は餘りにも淋しいことである。

私にとつて、キリスト教會が受けついで來た一切の教義と教條は、總て贖罪愛の意識内容を説明したものとしか受けとれない。三位一體論も、キリスト神聖説も、豫定説も、原罪論も、奇蹟論も、總てが人間の價値ない事と、神の愛が價値無き者を救はんとする、廣大無邊の愛を、實現せんとしてゐることを教へんとしたものにしか過ぎないと思ふ。

絶對なる神の愛が、有限を超越し、内在し、且有限に表現してゐる事を信ぜんとしたのが三位一體論ではないか(エペソ書四章六)。又キリストの贖罪愛が神の本質に一致して居る事を信ずる事がキリスト神聖論の出現した理由ではないか。又神の愛が有限の世界に向つて歴史上に現れた場合、總てが可能であることを信ずるために奇蹟論が起つたのではないか。つまり一切は、神の愛の説明として信ぜられるに到つた。

然し、かく深く廣く高き愛を信じつゝも、この愛をして人間の意識を貫いて放射される愛の

運動として發展せしめることを、多くのクリスト教團が躊躇して來た。この躊躇は主として、野蠻人と同じ系統を引いて居る、主我的な利得主義者の壓迫から來たものであることを我々は忘れてはならない。即ち、今日の教團組織が利得社會の特權階級を基礎にして出來てゐるものが多いために、新約聖書の教へる樣なキリストの意識內容を、そのまゝ生活意識の內容と爲し得ない事が、今日の薄弱なるキリスト教會を生み出した理由であり、それが今日の社會を混亂せしめ、それが今日の教會を無能ならしめた理由である。

偶像復興に傾いたローマ教會に、モハメット教が鞭を當てた如く、經濟生活を贖罪愛に依つて改造し得ないところに、マルクス主義の共產革命が興つて、キリスト教團にもう一つの鞭を當てつゝあることを我々は考へねばならない。

初代キリスト教徒の兄弟愛的經濟生活

宗教の歷史に於いて特筆大書す可きことは兄弟愛の發展である。使徒行傳第二章、第四章に於ける兄弟愛の記錄、又パウロの書簡に現れたる兄弟愛に就いて、私は再び述べる必要は無いと思ふ。ヨハネ第一、第二、第三の書に現れたるあの美しい兄弟愛の發露は、國際的に互に愛

し合ふ美しき宗教的兄弟愛の實行の一例である。ユウセビアス（Eusebius）の教會歷史を讀んでも、紀元一世紀に於ける兄弟愛の記錄を美しく記述してゐる。アレキサンドリアの兄弟達が、想像も及ばない力を以て貧しき者を勞つた話、或は愛餐式が失業者救濟を意味してゐたこと、又セラピウテ（Therapeute）が一種の共產生活をして居たこと、彼等が平和主義を尊重し、戰爭を拒否したこと等は、如何に初代クリスチャンが愛の生活を實行して居たかをよく傳へるものである。

然し、この頃の兄弟愛は主として救貧事業を中心としたものと見える。それで、紀元六世紀以後に發達したやうな、生產的職業組合を教會が指導して居たかどうかに就いては私は詳しい智識を持つて居ない。然し、ヨーロッパに於ける最初の病院も、最初の貧民救濟所も、キリスト教信者が始めて手を付けたものであると歷史は記載して居る。かうした運動は迫害に依つて、一層內部的結束を固めたらしい。そして、迫害が終つた第四世紀に於いては、兄弟愛は社會愛として教會の外部にまで擴張さるゝに到つた。であるから、フランスの聖者セント・マルチン、アイルランドの聖者パトリックの如き皆兄弟愛の實行者であると共に、社會愛の實現

者としてフランス及びアイルランドの建國者となつた。

然し、紀元六世紀の末葉に、ベネディクトがイタリーに現れて、こゝに始めて、祈りと愛と勞働の三つが僧院生活に於いて調和し、職業が神聖化され、職業補導がクリスト教の獻身者に依つて爲されるやうになつた。こゝに注意せねばならぬことは、このベネディクトの修道者は專門の僧侶でなかつたことである。カトリック教會に於ける四大教團、即ちベネディクト、ベルナード、フランシスカン、ゼスウイトの中、專門家の僧侶の中心になつたものはゼスウイトのみである。

修道者といふ者は紀元二世紀からもう既にあつた。然し、紀元六世紀に始まつたベネディクトは實生活を修道生活に織り込んだことに於いて、今日でいふならば一種の農村セツツルメントの樣な形をとつたものと考へられる。この驚く可き教團は、歐洲の農業文化を六世紀間（六世紀より十一世紀まで）指導したと考へてよいと思ふ。彼等は平信徒であつた時の職業をそのまゝ、僧院に於いて生かし報酬を望まずして、これを他人に教へたのである。今日世界で一番美しい聖畫として殘つてゐる、フローレンスのサンマルコ寺院の壁畫は、ベネディクト修道僧

のフラ・アンゲリコが畫いたものだと思ふと、ベネディクト修道院がどんな精神で勞働に獻身して居たか大抵わかる。

ゴシツク經濟文化の起源

恐らくこのベネディクト精神に、十三世紀のあの美しいフランシスカンの兄弟愛の精神が加はつて居なかつたなら、ゴシツク文明と云ふものは現れては來なかつたであらう。今日フランスに殘つて居るゴシツクの文明は、僅か五十年間位の繁榮を基礎にして徐々に現れたものであるが、その背景をなすものはベネディクト精神とフランシスカン精神でなくて何であらうぞ。このベネディクトの修道院を基礎にして最初小さい都市が生れ、その次に商人ギルドが生れ、十一世紀になつて、職業ギルトが、教會を基礎にして生れたのである。このギルドが宗教的な工人を組織化し、あの優れたゴシツク建築を完成したのである。そのゴシツクの勞働精神に就いて、ジョン・ラスキンが「ベニス石」の第二卷に數十頁を費して論じて居るところを讀むと、如何にその時代の創作的勞働がギルド精神（組合精神）に依つて理想的に纏められて居たかゞ良くわかる。フランスのバリーにあるノートルダム・ド・バリー寺院を見てもわかるが、

正面にある二つの塔は遠くから見れば、全く均等したものであるが、近くに寄つてその彫刻物を見れば一つの彫刻物として相等しい物はない。皆、工人が自己の創作に依つて作り出したものである。此の創作の喜びと、勞働の神聖と、宗教的敬虔の心情が全部一致した所にゴシック精神の優秀さがあつた。然かも、彼等の間に於いては、石工と金工、建具工と木工、硝子工と彫刻工の間に完全な調和がある。それで大寺院を建築するのに何等の差障りが無かつたのである。彼等の間の共濟制度は美しき程度にまで發達し、失業者は無く、事業上の恐慌といふものを全く知らなかつた。勿論、ゴシック精神の衰へると共に、ギルドの親方と使用人の間に鬪爭が起り、商人ギルドと工人ギルドの間に長き爭覇が續いたけれども、これを近代に於ける階級鬪爭に比べるとその差は頗る著しい。

ローマ法と寺院法の對立

ベルナード修道院は、ベネディクト修道院から別れたものである。そして、勞働の代りに學問を採用した。フランシスカンは、イタリー、アシシのフランシスを創始者としておこつたのである。この運動は修道院を持たない平信徒の運動として起つた。かうして、混亂に混亂を重

ねた中世紀は、修道僧中心の兄弟愛の社會を形成させた。そして、修道院の外に於いては、キリスト教前の法律であるローマ法が支配し、修道院内部に於いては、キリスト教兄弟愛を基調とする寺院法が支配をした。實際、暗黑な中世紀に於いて、教會がどんなに墮落した時でも、キリスト教がその生命を絶やさなかつたといふことは、全くこの修道僧に依る兄弟愛の持續に依つたと考へねばなるまい。この兄弟愛の運動が民衆に徹底すればする程、そして文藝復興が新約聖書を民衆に再び取り返したと共に、聖書中心の宗教運動が現れ、修道院内の兄弟愛を社會全體に押し擴めんとする大運動が捲き起つた。それが、ウイツクリフの運動であり、ジョン・フスの運動であり、サボナローラの運動であり、又ドイツ、アナバプテストの運動である。

このアナバプテスト運動の起る前に世にも美しい共同生活の兄弟團（Brotherhood and Common Life）と云ふ教育的共産團體が現れた。彼等の約束は、一年間候補者として入會し、その後は正會員として教育に一生を捧げ、全部獨身の生活を送り、收入を無視して貧しき村の教育に從事するのであつた。彼等の生活は、共同生産に依つて保證せられ、兄弟團内部に於い

ては宗教的共同主義を實行したものと見える。その中の一人は、トーマス・ア・ケンピスの如き勝れたる文學を後世に殘した。彼の書いた「キリストの模倣」は、彼の屬した「共同生活の兄弟團」の經濟組織を我々に報告してくれないけれども、恐らく「キリストの模倣」の中に現れてゐるやうな生活態度で經濟生活を送れば、最も美しい宗教的共同生活が出來たであらうと私は思ふ。この團體に屬する者から萬國公法の學者エラスムスが生れたことも記憶せねばならぬ。彼等は皆サンタクロースのやる生活を送つたと私には考へられる。

宗教改革期に於けるアナバプテストの經濟運動

殊に、今日のバプテスト教會が非常に感化を受けて居る醫者シモメノールの運動の如き、又ヤコブ・フッテルの如き人々の運動を見ると、彼等が如何に新約聖書に忠實であつて、如何に兄弟愛の運動を實現せんと努力したかがよくわかる。不幸にして彼等は、政治的權力と一緒になつた大教會の運動のために迫害せられ、彼等の兄弟愛的運動は鎮壓されてしまつた。そのために、リフォームド教會の信條は、兄弟愛の結社組織をぬき去つた自由主義の信條のみを殘した。再びローマ法に近い法律制度を是認した國家權力と並行して存在するやうになつた。そし

て、誠に殘念なことには此の自由主義的傾向は、カトリック教會が殘した最も美しい制度の一つであるギルド組織を、カトリック教會に味方するものとして全部叩き壞してしまつた。若し何等かの形に於いて、これらのギルド組織が新教の教會に許されて居たなら、今日の失業問題は起らなかつただらうと思ふけれども、人間の心理は、自由を尊ぶ時に兄弟愛の形式や組織を無視したがる傾向があると見えて、それ等が迷信の組織と關係してゐるやうに思つて全部迫害してしまつたのであつた。

プロテスタント自由主義と兄弟愛運動の分離

自由主義經濟の勃興がプロテスタント自由主義と相俟つて發達したことは勿論のことである。若し、プロテスタント社會に於いて、自由主義に依る繁榮のみが續いて來たら、果して兄弟愛運動が教會に訴へるところがあつたかどうかは問題である。不幸にして、自由主義は資本主義とくつつき、資本主義は機械文明とくつつく。自由主義的、そして機械的資本主義は、少數の資本家と多數の無產者とを生み出し、こゝに自由主義的精神主義に反對する唯物的共產主義が出現するに到つて、教會も漸く反省するやうになつた。

然し、實際不思議なことは、自由主義的プロテスタントの社會に於いて、社會愛の運動は相當に盛であつたに關らず、兄弟愛の組織は殆んど總て教會外に組織せられたことは注目に價する。これは教義、教條をやかましく言つて、分裂に分裂を重ねたプロテスタント教會の信條では兄弟愛的結社が出來にくいと考へたのか、キリストの金則を基礎として多くのフラターニティが生れる樣になつた。英國に於けるフレンドリー・ソサイテーの出現がそれであり、秘密結社としては、フリーメーソンが特色を持つて居る。或る人の計算に依ると米國には數百のフラターニティが教會外に結ばれて居るといふことである。そして、終に、昔は教會と結び付いて生れた工人ギルドまでが教會を離れて勞働組合として生れ出で、その勞働組合が教會に反對して無神論運動の溫床となるやうな傾向さへ孕むやうになつた。

然らば、自由と愛とは相背反するものであらうか。私はさう考へない。然し、社會現象に於いては、自由と愛とが背反し、自由主義と兄弟愛が並行して居ない現象を示して居る。世界の恐慌も、失業も、全く此の自由主義の慘禍であるといへよう。それで、近代經濟のうちに於いて最も大切なことは如何にしてこの自由と兄弟愛を調和するかにある。そこに現れて來た

のが協同組合運動であるといひ得よう。

ロッチデールの一つの成功は、信仰が多少異づて居ても愛だけは實行して行かうといふ大切な約束を持つてゐることである。若し、キリスト教各派の人々が、信仰が異づてゐても新約聖書だけは共通的に持つてゐる如く、兄弟愛を基調としたる協同組合に於いて一致し得るならば、失業と恐慌と搾取制度だけは防止し得るのである。

宗教的兄弟愛の經濟的實現性

以上宗教的兄弟愛の發達を顧るに、キリスト教の信仰が兄弟愛として生きてゐた時代と場所に於いては、所有權や相續權の問題は殆んど例外なく共同生活的に取扱はれ、勞働は尊重せられ、利息をとることは許可されなかつた。

それに反して、キリスト教會内に兄弟愛の實行が餘り力説されない時代に於いては、キリスト教前のローマ法的私有財産制度が確立し、奴隷制度が復興せられ、キリスト教的組合運動は蹂躙せられる傾向になつてゐる。この傾向は、西歐に於いて封建制度の確立となり、キリスト教道德は修道院に退却してしまつた。そして、もう一度修道院に保存せられたキリスト教兄弟

愛的經濟制度を、俗世間に復活せんとしたプロテスタント運動は、封建君主の力を借りなければならなかつたので、兄弟愛だけを殘して信仰の自由だけを獲得した。

そして、殘念なことには、自由主義の經濟がまた奴隷制度を復活し、キリスト教會は目前にキリスト教發生前の野蠻時代を見せつけられるやうになつた。それが、機械文化の發達と共に、更に大きな罪惡をはらんで近代資本主義文明を生むことになつた。幸にもこゝに、キリスト教傳統の兄弟愛的經濟組織運動が現れた。それは、先に述べた如く、ロッチデールに始まつた協同組合運動である。

この協同組合運動は、物質を第一位とせずして人格を第一位とし、利益を中心とせずして互助を中心とする。その目的は、搾取を離れた統制經濟にあつて、キリストの教へた山上の垂訓の精神と全く相一致してゐる。然かも、組合運動は徹底的に暴力を排除し、眞理をして自ら勝利を得しめる比類なき手段を選んでゐる。それで、一見非常に薄弱に見えるけれども、その運動は實に根强い力を持つてゐる。で、我等は飽くまでこの眞理を死守して、再び舊き時代の失敗を繰返さないやうに努力しなければならぬ。

第五章　意識的兄弟愛と協同組合運動

近代協同組合運動と中世ギルドの差異

精神的兄弟愛の意識を經濟的に生かした場合、そこに二つの事が現れて來る。第一は搾取を離れたる經濟制度、第二は協同的互助組織のそれである。中世ギルドは、ギルドに屬する兄弟の間に於いては、組織と非搾取的經濟行爲とが行はれたが、他人に對しては、その兄弟愛を實行することは出來なかつた。近代協同組合運動の特徴は、中世ギルドのやうに或種の職業にこれをくぎらないで、全社會にまでこの組合意識を發達させやうといふ處にある。

資本主義は最初搾取制度と氣づかないで、營利主義として出發したところが、營利主義が機械的組織の發達によつて完全に搾取制度に變つてしまつた。そして自由競爭主義がそれに加へられると共にそれは政府主義に變化して來た。で若しも、競爭の代りに互助、搾取の代りに共益が置換へられるなら、政府主義的侵略主義も消え、階級鬪爭も無くなる筈である。然し、人間の心理には或限界があるから、餘り尨大な組織を持つても纏める事は出來ない。そこで、或

地方に、或は又或職業内に、或人員を限定したる組合員が集つて小組合を組織し、その聯合體を作り、それを統轄する國内聯盟を設け、更にそれを聯合して國際的協同組合組織を作れば、再び搾取と無秩序より脱れることが出來る。

ロッチデール式とライフアイゼン式

この協同組合運動を思ひ付いたのはロバート・オーエンが最初である。然し、殘念なことにロバート・オーエンはこれを單に社會科學とのみ考へて、宗教意識の上に基礎づけられた、經濟運動とすることが出來なかつた。そして又、作つた組合も、利益を社會的に使用することを考へ得ないで、投資した資本に應じて分配することを考へたので、折角立派な組織運動を考へたに拘らず、實際的運用に於いては成功しなかつた。

一八四八年マンチエスターに近いロッチデールの兄弟達が一ポンドづつ出し合つて作り上げた消費組合は、その利益の分配に於いて新しい方法をとつた。即ち、消費高に應じて利益を拂ひ戻した。

實際、利益を消費高に應じて拂ひ戻すと云ふ方法は、富を搾取しないことと又、集中させな

いことに於いて根本的な原理を持つてゐる。ロッチデールの兄弟達が作つた消費組合の運動は、マウリス、キングスレー等のキリスト教社會主義者の支持を受けた。そして、英國に於ける消費組合運動は驚く可き進歩をしたのである。然し、英國に於ける協同組合運動は主として消費組合運動に限られた。この外に互助組合としてフレンドリ・ソサイティがあつたことを忘れてはならない。然し、これは健康保險組合と結びついて始めて大きな運動となつたのである。

このことに就いては後に述べることにする。

今日に於いても、英國に於ける消費組合運動は組織の大なる點に於いて世界一であるといへやう。それに比較して他の組合運動の盛でないことは誠に殘念の至りである。

獨乙に於いては、デリッチのシュルッ氏がロッチデールの原則を都市信用組合に應用した。そして間も無く一八六九年頃ヘーデスブルクのフレデリック・フォン・ライフアイゼンがロッチデール原則を改良して、農村信用組合の組織に應用した。ライフアイゼンは熱心なキリスト教信者であつたから、金融に依つて得た利益を組合員中の、最も貧しき者に生業資金として無利子で貸し與へる樣にした。かうして組合を通しての防貧及び救貧事業が著しく發達するや

うになつた。その後、歐洲各國はその例にならひ、フランスも遲ればせに消費組合を作るやうになつた。

日本に於ける協同組合運動

日本に於ける協同組合運動は一九〇〇年内務大臣平田東助氏が獨逸の都市信用組合であるシユルツ式のものを移植したものである。それで、國民は殆んど協同組合運動が何物であるか十分理解せずして運動を始め、最初の年は十六作つたが、殆んど總てが信用組合だつた。數年後消費組合運動にも手を附けたが、經營の原理を理解しなかつたので、殆んど總ての消費組合が一時に潰れてしまつた。一九一九年勞働階級の間に、物價の昂騰を苦しむ者が多かつたので、その頃から日本に於いては始めて無產階級の間に消費組合運動が始まつた。そして無產階級の組合運動が始まると共に政府が作らしめた協同組合運動も新しい力を得、一九三五年の四月には、五百二十萬人の組合員と一萬四千六百の組合が出來、信用組合だけでも十八億圓に近い資本金を持つ樣になつた。一九三九年には組合員數六五〇萬を數へ一萬二千の農村に於いて未組織のものは僅か二四を殘すのみになつた。また協同組合の仕事としては、利用、販賣、購買、

信用の四種事業を兼營するやうになつた。

共產主義より協同組合主義へ

歐洲戰爭後、ロシヤはマルクス主義的共產主義の革命を實行したが、レニンは協同組合を重視し殊に一九二一年以後協同組合を基礎にして、ロシヤの建て直しを始めた。卽ち、唯物主義萬能の經濟政策より人間の社會心理的作用を基礎にしたる經濟機構に逆戻りし始めたのである。ロシヤの今日はもはや共產主義の國家でなくして半强制的協同組合の國家であると云ひ得やう。これに似たのがムツソリーニの組織した强制的組合國家である。

協同組合は、强制的に作らさなくとも自發的に作る樣に敎育すれば、容易に作ることが出來る。そして、假令强制的に作つても自發的に作るやうな精神が無ければ、完全な經濟活動をすることが出來ない。一例を以つていふならば、强制的に組合を作らしても、秘密で賣買をするやうな者があれば、殆んど何の役にも立たない。統制經濟は全く破れてしまふ。組合經濟の眞の價値はその非搾取主義と計劃的統制經濟にある。それで、この非搾取主義と統制經濟の原理が組合員各自によく理解されて居なければ、外部的の壓迫のある間さうした組合運動は稍々或

る形を爲しては居るけれども、その强制の壓力がゆるんだ場合、組合活動は忽ちに止まつてしまふ。それで、結局のところ、組合運動は徹底的に教育運動から始めなければならぬ。そして經濟活動と云ふものは、この教育運動に依る意識的自覺以上にうまく行くものではない。或る者は、然し、そんな生溫いことでは仕方がないから、國家社會主義を以つて資本主義をうち倒したが良いと主張する。然し、民衆の欲望及び能力を少しも理解しないで、國家社會主義を實行することはもう一つの新しき資本主義的機關を附け加へることにも等しい。それは私が先に述べたやうに今日の程度に於ける經濟狀態といふものは、七つの價値の要素を持つてゐるから、單に議會を通過した法律案を以つて大產業の國有を決議してしまつても、他の六つの經濟行動がそれに卽しなければ、決して運用はうまく行かない。それは濠洲に於ける鐵道國有の失敗を見ても判る。日本の國有鐵道は非常に成功であるが、これは日本の國民生活に幸ひ合致したからである。然し、日本の鹽專賣事業でも煙草專賣事業でも必ずしも理想的に行つてゐるといふ事は出來ない。煙草の專賣事業の如きは、最近稍々改良せられたけれども、元は地方の有力なる政商が、中央の者を動かして有數の元賣捌人となり、小賣商人に賣渡して非常な利益を

收めたものである。かく考へると、國家社會主義といふものはその下に組織せられたる系統、系統の協同組合組織を持たなければ、結局、或地方に於いて或種の個人と結托を結び、消費組織に於いても、金融組織に於いても、或は生產組織に於いても、或種の個人を利得する樣になる。

協同組合運動に對する反對

勿論、地方的に組織せられた組合員のみの利益の外考へない特殊協同組合に對して非常な反對がある。或者はこれ等を資本主義の變形したものとして罵倒する者もある。確かに全體意識に目覺めないで、或る一地方のみの利益を考へて、局部的に組織する場合は著しい弊害がある。然し、私が主張する如く、經濟生活の全面に亘つて七種協同組合を組織して掛るならば、決してさうした弊害は無いのである。例へば、消費組合等に於いても、小人數の家族と大人數の働く大工場との利益配分は、大工場の方に割が良いことは勿論である。同率で別けたとしても、拂ひ戻し金は工場の方に高くなる。それで、ある者は結局資本家が德であるといふ。然し私は、かうした場合、何もその購買高に依る利益を工場主に返さなくてもよいと思ふ。寧ろそ

の利益をその地方の公共事業に使用して社會的に拂ひ戻しすればよいと思ふ。これは都市信用組合に對する場合に於いても同じことがいへる。

都市信用組合に於いて、最も利益を受ける者は、金を多く預け入れた者と、金を多く借りた者である。最も多く金を預け入れる者は資本家である。又最も多く金を使用する者は、資本主義的系統機關である。それで、都市消費組合の運用に依りて最も多く利益を得る者は、資本家と資本主義的系統機關とであると非難する者がある。

勿論、此場合、獨乙ライフアイゼン式の利益分配法を應用し、その得たところの利益を、組合員中の最も貧しき者に生業資金として貸し與へるとか、然らざるも、その組合員の爲に公益事業を開始するならば、組合は始めてそこに生きて來るのである。日本に於いても、最近都市信用組合は、この方面に目覺めてその利益金を、組合員の醫療施設の方面に使用するやうになつて來た。即ち、醫療組合病院が信用組合の利潤金を以つて組織されるやうになつた。即ち、協同組合の利益金の配當といふものが、必ず組合員全部に分配してしまはなければならないと云ふ理由は無いのであるから、組合の決議に從つてこれを公益の爲に使用すれば、協同組合運

動が受けた今までの非難は免れ得るのである。

精神運動としての協同組合

これを要するに、組合の運用は、運用する者の精神的社會意識の目覺めの程度に依つて、どうともなるものである。これが、協同組合運動の經濟がその組合員の意識內容と一致すると私の主張する點である。若し、其組合員が非常に利己的であれば、利益金は全部彼等自身に返つて行く。組合員が他愛的であれば、その利益は組合の決議に依り全部社會公共の爲に使用される。然し個人主義的に經營せられる資本主義と異つて、協同組合が統制經濟的に計畫を持つてゐるだけ、假令組合員が多少利己的になつても、自由競爭の無いだけ强味を持つて居る。それで、良き組合はどうしても利己的な組合員を壓迫して、實質的に良い方に向はしめるやうな傾向を採る。であるから、贖罪愛的宗教意識がそれを組織する組合員と、それを指導する組合の理事の間に多くあればある程、その比率に從つて、組合は完全なる社會性を發揮する。そこに、精神的兄弟愛意識と新しい協同組合意識が、實に緊密なる關係を持つて居ることがわかる。

保險組合

私は、七つの經濟價値行動が經濟意識の內容として各々その働きを持つてることを述べた。そして、意識的經濟學が發達すればする程、その經濟價値行動が猛烈な活動を始める。譬へて見れば、生命價値に就いて昔はさう大きな經濟價値運動を持たなかつたが、今日に於いては、生命保險の問題の如き、國民健康保險の問題の如き國民經濟の內に於いて最も大きな近代的經濟活動となつて來た。今日に於いては、それで資本主義はこの領域まで進展して、當然社會保險的に組織さるべきものを食ひ荒して居る。で、私は生命保險の今日の趨勢を見ろに、その契約高は銀行よりも更に大きな契約高を持つて居る。この未來性を帶びた心理經濟的資源と云ふものは、協同組合化せられて始めて眞の本領を發揮し得るものである。今日のやうに、生命保險の經濟を少數の資本家に委せて、その集中せられたる金融力を資本主義的に運用する事が恐慌を生み、失業者を續出せしめる最大原因の一つとなつてゐるのであらう。生命保險は、協同組合的に組織せられ、死ぬまでの定期預金の性質を持つたその金を組合員各自の流動資金に廻すべきである。さうすれば、信用組合は絶對に恐慌に會ふといふ心配は無くなるのである。

私は細かしい專門的なことに就いてはこゝでは言はない。然し、生命保險を協同組合的に經營すれば、もう一度中世紀のギルド精神に返り、教會を中心にして互助友愛の精神を增すことが出來る。これは、國民健康保險組合の場合に於いても同じことがいへる。

國民健康保險組合といふものは、國家社會主義の理論でもつて、一八八三年に獨逸のビスマークに依つて始められたものであるが、うまく行つて居ない。何故ならば、協同組合的訓練を缺くからである。それに反して協同組合的に經營せられてゐるデンマークの如きは比較的にうまく行つて居る。又古くからあつた友愛協會(Friendly Society)を基礎にしたものなどは、英國に於いても稍々成績がよい。これはフランスの共濟組合を基礎にした場合に於いても同樣である。何れにしても、道德的訓練を基礎にしないものは、かうした新しい社會保險を完成することは出來ない(その他の保險に就いては此處で詳しく說かない)。

生産組合

第二の協同組合は生産組合である。生産組合も、土地生産組合と工場生産組合の二つに分類することが出來る。勞働組合は、企業に對して全然責任を持たないために、永久に無産者的形

態を採る性質を持つて居る。若し勞働組合が企業に責任を持ち、自主的生産を爲す場合には、生産組合と呼ばれなければならない。然し、多くの生産組合は今日まで大抵失敗して來た。それは消費組合と完全なる連絡をとらなかつたからである。これを見ても、勞働組合が完全な消費組合を持たなければ、永久に不安な狀態に置かれることを私は考へる。若し勞働組合が政治的な力を握つても、消費組合を組織しない以上は、永久に自らを解放することは出來ない。然るに、勞働組合が消費組合を無視し、信用組合を等閑に附する傾向があるが、これは全く近視眼的習性であつて、永久に無產者を解放する道ではない。

英國に於ける生產組合等が多く失敗して來たに反して、日本の土地生產組合（地割制度）の如きは、數百年の歷史を持ち、十一ケ國、十三の大名の手に依つて實行せられた。殊に洪水の出る河の流域に於いては、土地利用組合を實行しなければ耕作が全く不可能である。即ち、週期的に襲ふて來る洪水は、田畑を荒すが常であつた。それを救ふために、農民は土地生產組合を作らざるを得なかつた。洪水後第一年に土地の三分の一を整理して、これを村全體の戶數に應じて平等に割付け、比較的收穫の少ない者に對しては、比較的收入の多くとれた者が持つて

行つてやるといふ樣な制度をとつた。そして第二年目には、更に荒廢地の三分の一を回復し、第三年目には殘りの三分の一を回復して全部を耕すやうにした。然し又、六年目か、十二年目か、十八年目かにやつて來る大洪水に依つてまた田が全部土砂をかぶつてしまふ。さうすると、また同じやうな方法をとつて協同的にその失地を回復するのであつた。

この方法を旱魃の場合にも應用して救はれて居る者が日本に相當ある。即ち、全村に水が足らない場合には、三分の一だけは灌漑して、其三分の一の土地の生產物を全村民が分け取りするのである。これは、海岸の漁業地に於いても應用せられて居る。この土地生產組合には色々の種類があつて、勞力だけを共にするものもある。さうしたものは收穫を全部個人的にその勤勞の量に應じて分配するのである。また中には收穫物まで全部平等に分配するものがある。然し、この土地生產組合は村の親密さに依つて色々の形をとつて居る。日本の政府は、農村の恐慌に對應して、最近農事實行組合と稱する土地生產組合を無數に作らしめた。昭和十年十月統計には、二十二萬を數へて居る。これは大抵二十戶乃至三十戶位を一單位として作らしたものである。日本に於いては家族が最もよく農村に於いて團結して居る。これを小字といつて

居る。そしてこの小さき土地生産組合は團體として村の各種産業協同組合に加盟してゐる。

ジョン・ラスキンが作つたセント・ジョージ土地ギルドは失敗した。それは、ラスキンが餘りにその當時の經濟狀態を無視した方法をとつたからでもあらうが、もう一つは消費組織と聯絡をとらず、全然機械の力を借りることを嫌つた事にもあらう。然し、彼の經驗は實に尊いものであつて、我々はどうしても彼の失敗を失敗として考へないで、かうしたギルド精神は永久に生かさねばならぬことを記憶しなければならない。

組合運動に於いて、日本で機械生産に最も成功してゐるものは絹絲の生産組合である。農村に於ける大抵の絹絲工場が潰れたに拘らず、組合製絲と稱するものは幸ひに其力を維持して來た。これは全く驚く可きことであつて、團體の力に依れば、最も困難なる恐慌をも、完全に切拔け得ると言ふことが判るのである。今日約八十五の組合と、年産額約八千萬圓の生産額があるが、その出資者も多くは小作人であり、その工場も農民のものであり、女工も農民の娘であり、その繭は自ら作り出したものであり、そのニウヨークに賣る場合でも中間商人を省いて直接に賣り捌いて居る。それで、今日に於いては、大きな資本家までがこの組合製絲の形態を

とり、郡是も、片倉も特約組合と稱する、政府に認可せられた資本主義的協同組合の統制組織をとるやうになつた。かうした方法をとらなければ、結局製絲のやうな價格の高低の甚しいものは、實際的に運用出來ないといふ事が判つたのである。

又一般の市街地工場に於ても、一九二〇年以後の日本に於ける恐慌時代に、勞働階級の組織した生産組合の手で土地を經營した例が澤山ある。

これ等の工場は資本家が破産して、勞働階級が失業する恐れがあつた。そこで失業を嫌つた勞働階級は、資本家よりその管理權を貰ひ、自らの勞働賃銀を合理化し、資本家より貰つてゐた賃銀より何割か安い賃銀で働き、その生産品を前より契約してゐた問屋に持つて行くのであつた。大阪の河北電氣、東京近在の河口市の鑄物工場、其他メリヤス工場等に於いて比較的面白い成績を今なほ擧げてゐるものがある。またこの方面で最も成績の良いのは、一萬人に近い漁民を中心に組織した、靜岡縣燒津の漁民生業組合である。これは汽船を持ち、工場を持ち、年六百萬圓位の生産高を擧げて、日本に於ける漁業組合中最も良き成績を示してゐる。

販賣組合

生産組合は、もし直接消費組合と聯絡することが出來るなら販賣組合を作る必要はない。然し、消費系統が明瞭でない場合は、どうしても販賣組合を作つて大都市の消費階級と關係を結ばねばならない。これは米國に於いても、歐洲戰爭前より發達したものである。小麥、青物、牛乳等に於いては歐米諸國の農民間にこの組織は頗る普及してゐる。それで私は詳しくこの事に就いては述べない。販賣組合を作つてゐる農民が、作らない者より、景氣の良いときには收入が多く、不景氣の時に於ける損害をも免れるので、結局、組合を作つた方が全體から見れば大きな利益である。これは一九三五年頃の組合の無い濠洲の農民と、組合のあるニウジランドの農民とを比較すれがよく判る。然し、販賣組合を組織する農民が唯營利中心に集つて、社會改造の大理想を持たないために、更に進んで信用組合を作り、社會保險組合を組織し、消費組合、共濟組合等にまで手を伸さうとする元氣を缺いて、今日まで世間よりよく思はれなかつたことは誠に殘念な事である。で、これはどうしても單獨組合としないで、七種組合の一つとして組織す可きであると私は思ふ。販賣組合が發達すると小賣商店が沒落する。それはどうしても小賣業者を商業組合にまとめて、販賣組合化する用意が必要である。これ等は少し技巧を用

ひさへすれば、容易に爲し得る事だと私は思つてゐる。

信用組合

信用組合の中に於て最も理想に近いのはドイツのライフアイゼン式信用組合である。これは防貧、救貧の二つの道を兼ね、資本の集中を防止し、資本の個人的集積を無くなす運動としては最もキリスト教的である。日本のやうな貧乏な國でも、約十八億圓の金が信用組合の手に集つてゐることを考へると、誠に面白い現象だといはねばならぬ。然し、先にも述べた通り、信用組合は是非各種保險組合と聯絡をとる必要がある。殊に生命保險とは絶對的の連絡を保ち、生命保險に依る死ぬまでの定期預金を農村及び商工業者の生業資金に（殊に各種組合事業の資金として）流通せしめる必要がある。

ドグラス・システムと信用組合

最近、英國民の間に、そして又米國人の間に於てもい、ドグラス少佐に依つて唱導せられた社會信用制度を信ずる者が非常に殖えた。殊にカナダ・アルバータ洲に於けるドグラス黨が勝利を得てから一層英國民の注意を引いて居る。

彼等の主張するところは、特殊な銀行が兌換紙幣を發行し、金融を私有し得るならば、國家は宜しくその紙幣發行力を社會化し、その流通力を利用して無產者を解放すべきであるといふのである。信用の社會化から見れば、この說はまことに公平の主張であつて何等非難すべき點はない。それは恰も米國ミネソタ州ミネアポリス市に於いて、メクレンベルグ博士が二百五十萬弗の流通爲替を發行して、失業者一萬五千人を四年間支へて來たことを見ても、或る組織を持つならば、流通爲替券に依つて、十分經濟機構を圓滿ならしめることが出來る事は判つてゐる。

それで、或る特別なる組織力と、特定なる地域と、特殊な事情があれば、ドグラス信用制度は實行すること實に容易である。

たゞ私は、これを廣く行ふ場合に信用組合を基礎にせず、七種協同組合を度外視して大規模にこれを實行すれば、或種のインフレーションが起り、物價は恐ろしく昂騰し、發行されたる債券は社會的負債として殘り、發行せられたる金券は協同組合的利益分配制度と統制經濟を基礎として居ないために、忽にして小數の資本家の手に集まり、消費者側から見れば、それは

一種の浪費に終り、生產者側から見ればその社會的負債を、彼等のみが償却せねばならぬ重大責任を負はされることになる。であるから、ドグラス・システムを永久的に採用せんとするならば、結局それは信用組合の基礎の上に置く可きものであることを私は考へて居る。信用組合を全國的に、又國際的に組織し、更に生產組合と消費組合と各種保險組合とを完全に組織して行けば、その上でドグラス式信用制度はいくらでも活用出來ると私は思ふ。若し、さうした組織を持たないで、今日の自由競爭制度の生產組織と消費組織のまゝでやるならば、私は獨逸のインフレーションの二の舞を演ずることを恐れる者である。

今日の金融の組織の缺點は、金融組織をあまりに重視し過ぎる傾向である。私をして言はしむれば、金融組織と云ふものは要するに社會勢力（Social energy）の流通性に外ならない。金融制度はそれを表象するにしか過ぎない。ドグラス少佐がその表象的金融組織を社會勢力以上に過重視して、金融の社會化だけを計れば、無產階級を解放し得ると考へるのは大きな間違である。メクレンベルグ氏の如き一萬五千人の失業者を四年間も、たつた二百五十萬弗の流通爲替券で支へ得たといふのは、流通爲替（ドグラス氏に言はせれば金券）がさうさせたので